
Muv-Luv ナイトメアを作ろう！

koko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v ナイトメアを作ろう！

【Nコード】

N 0 7 0 9 L

【作者名】

k o k o

【あらすじ】

黒の騎士団時代から仕えていたルルーシュ亡き以降、ナイトメアを平和利用の為に造っていた神凧 翔。ある日突然目覚めると其処は自分の知らない場所だった。この前とは違う世界ではBETAと呼ばれる化け物に世界は侵略されていた。翔は自分のナイトメア等の知識を使いこの世界に介入していくことになる。色々オリジナルの設定とかも出てくるので嫌な人は見ないでください。更新は不定期です。

プロローグ（前書き）

オリジナルなど色々な設定が入っているので、細かいことが気になる人や、文句など言う人は見ないでください。これでもいいと言う人はどうぞ！

プロローグ

プロローグ

1997年1月20日

とある一室に光が溢れ返り、その光が収まった場所には一人の少年が寝ていた。

寝ていた少年、神風^{かんなぎ} 翔^{しょう}はゆっくり瞼を開くと見覚えのない天井が目に入って来た。

視線をゆっくりと巡らせる。

見覚えのない部屋。

部屋には畳が敷き詰められており、周囲からは木の香りを強く感じる事が出来た。

調度品は高級そうな木の机がある。

まるで昔ながらの武家屋敷に居るような感じだった。

(あれ? 此処は何処?)

昨夜は人型兵器である『ナイトメア・フレーム』を平和利用する為の開発研究を、ラクシャータ、ロイド、セシルと共に行っていた筈だった。

ナイトメアを平和利用する事が出来る様になったのも、ルルーシユと言う一人の天才が自分の命を捧げ平和へと導いた結果だ。

だがこの真実を知っているのはごく僅かしかない。

彼の御蔭で世界では戦争という行為は少なくなり、飢餓や貧困に力が注がれるようになったのだ。

（昨夜は自分の開発していたナイトメアが完成してみんなでお祝いをして寝たはずなんだど……）

取り敢えず立ち上がろうとしたが、身体が上手く動かず転がってしまった。

「……………あ……………え……………!?!」

（身体が動かないッ!? それに声も出ないッ!?）

視線を落としてみるとそこには子供の身体に子供の手足があった。

（身体が縮んでるッ!?）

この状況に悩んでいると……

「失礼します叔父様」

静かに襖が開けられ其処からは綺麗な少女が現れた。

「何処かへ出かけているのか? ……誰だ君は?」

これが神凧かんなぎ 翔と篁しょう たかむら 唯依ゆいの初めての出会いだった。

S i d e 篁たかむら 唯依ゆい

私は帝国斯衛軍所属 篁たかむら 唯依ゆい。

この帝国において殿下をお守りするお役目をし、さらに装備実験
ホワイトファンクス
部隊白き牙中隊で人型兵器である『戦術機』やその装備の開発など
も行なっている。

そして今は『BETA』と言う地球外生命体と戦う為、色々な装
備や戦術機のアイディアなどを日本帝国陸軍技術廠・第壹開発局副
部長でもある叔父様に相談しに来たというのに代わりにいたのは…
…一見して幼いと思われる体躯で黒い長髪で瞳はまるで黒い宝石、
顔の整った中性的な少年だった。

見た感じ変わった衣服を見に着けていている。

しかしこの部屋で私が見た事もない少年が居るなど有り得なかつ
た。

だから

「誰だ君は？」

そう問わずにはいられなかった。

少年は畳に尻餅をついてこちらを見上げる顔は不安に満ちていた。

「……………」

私の言葉に威圧を感じたのか、少年はゆっくりとした動作で後退
りをし始めた。

……………どう言う事だ？ 何故逃げる？

その態度に内心で首を傾けつつ、念のためにと銃を取り出して少年に向けて構える。

銃口を向けられた少年は不安から恐怖へと顔色を変えている。

「……………ッ!？」

「どうした？ 君は誰だ？ 何故何も答えない？」

こんな少年に銃を向けるのは憚れるが、今はこの少年が何であるかはつきりさせなければ！

「答えるッ!！」

「……………ッ!！」

私の怒声に、少年は怯えながらも答えない。

怯えられるのは辛いが今は仕方が無い。

だが何か様子が変だ…………

答えないのではなく答えられい？

私の気迫に飲まれ、今や目に見えて怯えている少年はなんだか口をパクパクと開閉させていた。

「……………あ……………ッ!……………ッ!！」

一生懸命？ と思われる動作で、体を震わせ泣きそうになりなが

らも必至に口を動かしているが、声が全く出ていない。

「……まさか、喋れないのか!？」

愕然としたまま発した間に、その少年はそれはもう必至になって頭を上下にするのを見て絶句してしまった。

一体どう言う事？

どう見ても敵には見えない……こんなにこちらを怖がっているし、こちらを害しようとしているとはとても思えない。

これでは私が子供を虐めているみたいではないか。

そう苦笑しながら銃を元に戻した。

「うーんどうしよう……」

このままでは埒が明かないな……

少年の傍へと寄り膝を折り、その震える手を両手で取り視線を合わせる。

「はいなら頷いて、いいえなら首を左右に振って。それならできると？」

コクコクと私の問いにこれでもかと言うほど、一生懸命に顔を上下に動かす少年を見つめ安心させるように微笑みながら聞いてみた。

「君は誰かに連れられてここに来たの？」

私の問いに少年はブンブン首を横に振っている。

「ふむ。じゃあ一人でここに来たの？」

S i d e O u t

S i d e 神かな凧な 翔しょう

なんと言えはいいのだろうか？ 自分にもよく分からないです……

でも一人でここに来たと言う事でもないですしブンブン首を横に振った。

「一体どう言う事だ？」

僕は彼女の問いに首を傾け、「僕にもわかりません！」という風に涙目で彼女を見上げた。

うつゝ見られてる……やっぱり無理があります……

S i d e O u t

S i d e
篁 たかむら 唯依 ゆい

この子自信にもよく分かってないみたいね、嘘も言っていないみたいだし……どうしようかしら？

「うん、これは叔父様に相談したほうがいいわね」

S i d e O u t

S i d e
神 凧 かんなぎ
翔 しょう

よかつた。命の危機は去ったみたいですが……でもこれからどうなるんだろう？

それにうまく動けないし声も殆ど出せないし、まあ今は深く考えなくても仕方がないです……

「さて、叔父様は何処にいるのだろう？ 部屋で待ってた方がいいかしら？」

叔父様って言うのは彼女の家族が保護者なのでしょうか？

そう言えば名前知らないです……聞いてみましょう！

彼女の手を握って一生懸命ジェスチャーして名前を教えてくださいませんか。

「ん？ えっと名前？」

コクコクと頭を上下に動かした。

「そうね！ 折角だから自己紹介しましょうか？」

まずは言い出した僕からです！ 彼女の手で文字を書いて教えてください。

「えっと、神風 翔君ね、私は篁 唯依って言うのよろしくね」

おおく唯依お姉さんかあ、ぎりぎり手が動いてよかったです。

そこに先程と違い勢い良く襖が開けられ、其処から入って来たのは渋いおじさんでした。

Side Out

1 ナイトメアの開発（前書き）

以外と早く書けたので投稿します！色々オリジナルな要素がでてるのでそれでもいい人だけ読んで下さい。ではどうぞ！

1・ナイトメアの開発

Side 翔

あれから色々ありました……

あの渋いおじさんは唯依お姉さんの保護者で家族でした。

聞いた話によると名前は巖谷^{いわや} 榮二^{えいじ}。帝国陸軍技術廠・第壹開発副部長で中佐と言う偉い人である事が分かりました。顔には大きな傷跡があり武人としての人柄を雄弁に語っています。

色々話し合われ僕が何故部屋に居たのか等色々と不審な点が多々あったのですが、医療施設で確りと調べられた結果、動けず喋れずで満足に日常生活も送れないような子供に、暗殺や諜報員^{スパイ}の様な事が出来るとは思えないとおじさんは判断したようです。と言うより唯依お姉さんが僕の事を庇ってくれた御蔭です。更にこちらでお世話になる事が出来る様になりました。

これには僕も驚きましたが、それよりも嬉しかったです。

それから喋れないからおじさんから小さいノートPCを貰う事が出来ました。

これで文字を打ち込めば会話も出来ます！

話し合いから数日経ちましたが僕は唯依お姉さんを唯依姉さんと呼ぶようになりました。何故なら僕の事を弟の様に思ってくれているからです。でもかなり過保護です！ 唯依姉さんは黒く長い長髪

をしていて、瞳には強い意志や誇りが見え顔は整ってスタイルも凄くよく、見る人必ず振り向くであろう容姿です！ そんな人と一緒に居られるのは嬉しいですが恥ずかしいです。

食事から仕事場に風呂から寝る時まで常に一緒です……一応中身は唯依姉さんと同じくらいです。でも徐々に精神が肉体に引つ張られているせいか最初ほど恥ずかしく感じる事は無くなっています。

僕は自分の現状がどうしてこのような事になったのか分からなかった為色々調べた所、どうやらこの国？ というかこの世界が自分の世界とは違う事が分かりました。

何故ならBETAと言う地球外生命体が地球へ侵略していたのですから。

僕はお世話になるだけじゃ悪いので、自分の知識で恩返しをしたいと考えていたのですが、自分に出来る事はナイトメア関連の事くらいです。

ですがこの世界にはナイトメア・フレーム何て無いです。

その代わりにこの世界はナイトメア・フレームとは別に『戦術機』と言う物が存在していました。

この戦術機と言う物は僕が唯依姉さんに仕事場に連れて行って貰った時に見る事が出来たのですが、ナイトメア・フレームよりも遥かに大きく、動きがかなり鈍かったです。

そこで僕は戦術機と同じ大きさのナイトメア・フレームを造って戦力増強をしようと考えている所です。

頭の中には前の世界のナイトメア設計図は頭の中に入っているし、ラクシャータさんやロイドさん達からは天才と言われた事もあります。自分からしてみたら二人には敵いませんと声を上げていいたいのですが……

僕はナイトメアを造るにあたり本当にこの世界の技術で造れるか分からない為、戦術機の事を唯依姉さんから詳しく聞くことと尋ねたのですが、詳しく聞く事は出来ませんでした。

普通は子供には話す事じゃないし、機密でもあるようですし仕方が無いです。

だけど現在この帝国では第三世代戦術機である不知火の配備、生産が進んでいると言う事は聞く事が出来ました。

僕は参考にこの不知火と言う戦術機をもっと詳しく知りたいと思いい、こっそりと唯依姉さんのPCを調べたりもしました。

そのPCの中には戦術機の情報がかつており技術的に造れる事が分かりました。他にも値段も調べる事が出来たのですが、その不知火はナイトメアであるサザerlandよりも遥かに高い事が判明したのです。

そしてその情報を元に僕は現在一生懸命パソコンに設計図を打ち込んでいます。

名称は以前と同じくサザerlandで日本名は舞鶴へと名前を変えた設計図を……

僕はこの舞鶴サザランダは値段も能力も決して悪くないと思っています。

戦術機と違い両腕両足を簡単にパージ出来るので、整備やら補給がとてもし易いのが利点です。

値段と言えば第七世代ナイトメアである紅蓮式式の設計図も作ったりしているんですけど、これは唯依姉さんに死んで欲しくないの何回も唯依姉さんの訓練データや訓練風景を見て、以前の紅蓮式式をカスタマイズして設計しています。

でも数日前からやっていたので疲れました……時計を見るともう夜になっていきますし。

「翔君いる？」

唯依姉さんが来たようです。

「……あ……い……！」

静かに襖が開けられ唯依姉さんが入って来ました。

「ん？ 翔君何してるの？」

そう言っ僕の後ろからパソコンを覗き込んできます。

「こっこれ何ッ!？」

あっちゃぱり驚いたみたいです。この世界にナイトメア何てないから驚くのは当たり前ですね……

『戦術機を参考に戦術機とは違う兵器を作ってみました。名前はナイトメア・フレームでそこに映っている機体はサザーランドです。日本名の方は舞鶴です』

そうパソコンに文字を打って答えました。

「戦術機を参考に作ってみたってもしかして私の仕事場で情報を！
？ それにこれがどれだけ凄い物だかわかってる！？」

僕にとっては普通の事だったのでてんと首を傾けていました。

唯依姉さんは顔を紅くして此方を見ていましたが、何かを思い出したかのようにまたPCの画面を見だしました。

唯依姉さんは設計図を真剣な目をして調べています。

どうやら唯依姉さん自身戦術機等の開発研究を行っているので、これがどの様な物が把握が出来る様です。

「とにかく叔父様の所へ行きましょう！」

そう言って僕は抱えられて運ばれてしまいました。

S i d e O u t

S i d e 唯依

凄い！ 凄い！！ 凄い！！！！ こんな小さい子が全く違う戦術機を作るなんて！ しかもよく見ると値段も不知火の部品等と比較してあり安さが証明されている。造ってみなければ分からないけど恐らく能力もかなりの物を持っていそう！

「叔父様！！」

私は襖を勢いよく開け放った。

「うおっ！？ 唯依ちゃんどうしたんだい？」

「これをッ！ これを見てくださいッ！！」

そう言っつて叔父様にノートパソコンを見せた。

「一体どうしたと言っつのだ？ ……これはッ！？ 唯依ちゃんどうしたんだこれはッ！？ 一体誰がこれをッ！？」

やっぱり叔父様も驚きましたね、まあそうですよね！ 私の弟は優秀です！！

「これはこの子、翔君が開発していたんですよ！」

まるで自分の事のように私は興奮して話した。

「翔君がか！？ 凄じじゃないかッ！ 戦術機の技術も使われているのか、この設計図通りミスなくとは行かないだろうがこれなら作れるか？ ……よしッ！ すぐにこの舞鶴を殿下と紅蓮大将に国防省や城内省にも報告しなくてはッ！」

そう言っつやいなや叔父様はすぐに立ち去っつて行っつてしまった。

「翔君このナイトメアについてなんだけど……」

「……あ……いッ！」

「あっパソコン持っつて行っつちゃっつたから話せないか」

コクコクと翔君は上下に頭を振っつている。

ふふ、可愛らしい

「もう遅いし部屋に戻って寝ようか？」

またもコクコクと頷く翔君を私は手を取って部屋へ戻った。

Side Out

Side 翔

次の日の朝に唯依姉さんと朝食を食べていると、おじさんがやって来ました。

「おはよう唯依ちゃん、翔君」

「おはよう御座います叔父様」

「……お……よ……」

手は何とか動かせるようになりましたが、足は殆ど動かず、声も殆ど出ないです。

だから挨拶もちゃんとできなくて凹んでしまいます……

「翔君、気にしなくてもいいんだよ？ 君の言いたいことは分かるから」

優しさが胸に染み渡ります。

「そう言えば翔君の開発した戦術機、いやナイトメアと言ったか？ そのことで殿下が是非話を直接聞きたいそうだ。朝食を食べたら私と唯依ちゃんと共に帝都城へ行こう」

「私もですか叔父様ツ!？」

「うむ、翔君も唯依ちゃんがいた方が緊張をそんなにしないだろうし」

「ですが私なんかが……いえ、分かりました。そう言う事なら」

僕はコクコクと頷きながらどうしたら良いのか考えていました。

殿下かあゝ偉い人相手に上手く喋れるだろうか……あつ喋れないからパソコンに文字を入力だけか……悲しくなります……

そう言えば舞鶴サザールランドしか昨日は見せてなかったけど一応紅蓮式式の設計図も見せた方がいいのかな？

よし！ 見せてみましょう！

『お二人に見せたい物があります！』

そうパソコンに文字を打ち込んだ。

「見せたい物って何？」

「ん？ なんだい？」

『実は唯依姉さんのデータを見て舞鶴以外にも唯依姉さん用に開発していた機体があるんです』
サザールランド

「えっ！？ あれ以外にも作っていたの!？」

「それは吃驚だな……」

二人とも目を大きく見開いていますね。

「そう言えば翔君一人にするのが心配だったから毎日訓練施設に連れて行ったけど、その時に私のデータを見たの？」

コクリと首肯する。

「それでどんなのなんだい？」

『これです』

カタカタと入力して画面に姿からデータまで表示させました。

「「こっこれは!?!」」

驚いてくれました。何か気分がいいですね

「翔君これ不知火よりもスペック上じゃない!?!」

「それだけじゃない! この右腕の武装! 『放射波動』機構という装備だ! とてつもないぞこれは!?! この理論だけでも今までに無いものだぞ! しかしこれは舞鶴サザランに比べて金がかかりかかるな」

『なら新しい動力や装備でも作って売りましょう』

「「新しい動力と装備!?!」」

『まだ構想途中で詳しくはこれからですね……』

「でも昨日の舞鶴サザランを見せて貰ってから凄いと聞いていたけど、ここまで凄いと聞いていなかったわ!」

そう言っただけ唯依姉さんの膝の上に抱え込まれました。

少しくすぐつたいです。

「ああ、これは本当に凄い！ これらの機体に新しい動力や装備まで作れたら少しでも兵達が生き延びることが出来る！ だが頭の固い上の連中が何と言うか……はあ……」

『でもまだナイトメア用のOSを作らないといけないし、紅蓮式式にいたっては完璧にEース機です。唯依姉さん用として作ったのでEースクラス以外の人は多分無理ですよ？』

「うむ、分かっている。だがOSの方は翔君なら出来るのだろうか？」

『時間さえ貰えれば何とか……』

OSは前の世界で余り弄った事が無いから時間が掛かりそうです

……

「そうだッ！ それなら帝国技術廠に入るといっことはどうだ？ そうすれば色々便利になるぞ？」

「叔父様、急ぎ過ぎではないですか？」

「む、だが唯依ちゃんも翔君が技術廠に入れば今より面倒も見やすくなるし、会いやすいだろう？」

「た、確かにそれはありますね！」

「と言う訳で取り敢えず殿下への謁見が終わったら詳しく話そう！」

いじりして朝食での会話は騒々しく終わりました。

Side Out

1・ナイトメアの開発（後書き）

少し直しました！

何かアイディアを募集してますので宜しくお願いします！

2 殿下への謁見(前書き)

月詠 真耶さんは大尉と言うオリジナルになっています。

2・殿下への謁見

早朝から翔達は謁見の間に呼ばれていた。

そこには変な髪型で厳つい顔をした大きな男や、緑色の髪で眼鏡を掛けた目付きが鋭い人等、かなりの人数がこの謁見の間に集まっている様だった。

凄い沢山の人達がいいます……これってみんなナイトメアの話しを聞きに来たのでしょうか？

『唯依姉さんここに居る人達は？』

「皆あなたのナイトメアの説明を聞きに来たのよ？ あそこに居る大柄な人が紅蓮大将で、緑色の髪をして眼鏡を掛けている人が月詠大尉と言って殿下の護衛をしている人、あちらに居るのは五撰家の人達ね……こうやって見ると凄い人達ばかりね」

『昨日今日なのに凄いです』

「それだけの物だったと言う事よ。本当なら翔君じゃ殿下に会う事なんて出来ないのだけど、今大陸は状況が悪くこのままじゃ日本にも進行される恐れがあるの。その為に戦力の強化は必須なの。その為に戦力強化が出来そうな可能性のあるナイトメアの開発者である翔君が特別に呼ばれたのよ」

そう言っただけで唯依姉さんは此方を見て微笑んでいます。

「そうだな。ここに居るのは帝国軍のこれからを決める物達と言う事だ」

おじさんがそう言ってプレッシャーを掛けてきます。

……かなり大掛かりな事になってしまいました。たしかに自分で

撒いた種だけどここまでの事は予想していなかったです。

そして一人の侍従らしき人が部屋に入って来た瞬間に部屋は静寂に包まれ、その後ろから一人の女性が静かに部屋へ入って来ました。

その姿は凜と佇んでおり、見る人を惹き付けるその姿はとても綺麗です。青紫色をした綺麗な長髪を後ろで纏め、その瞳は全てを見通すかの様に此方を見ており、その瞳にはルルーシュ陛下に似たものを感じ不思議な感じがしました。

一瞬でこの方が殿下だと僕は確信出来ました。

あつ皆頭を下げている……僕も下げなきゃ！

でも上手く体が動かない……そしたらコテンと倒れてしまいました。

皆が一斉にこちらを見てきたので身体が固まってしまって動けません……

それに周囲からは何故こんな子供がいるのだ？ と、不思議そうに見ている人達が殆どです。

殿下がクスクス笑いながら部屋へ居る人達へ面を上げて下さいと言ったのですが……ど、どうしよう！？ 謝った方がいいのかな！？

ビクビクしていると、唯依姉さんが大丈夫だからと手を握ってくれました。

それにおじさんが「申し訳ありません殿下、この子は体が不自由

なものでお許してください」と僕の代わりに謝ってくれました。

「気にしていませんよ、楽にさせてあげてください」

そう言ってこつちを見て微笑んでくれました。

「……………あ……………う……………」

お礼を言ってみたがやっぱり無理でした……

「いいえ、気にしなくていいですよ」

パソコンを使わずに僕の言う事がわかるのは、唯依姉さんとおじさんだけです。簡単な事だけですが………それなのに殿下は初対面で分かってくれました！

「貴方の名前を教えてくださいませんか？」

そう言われてノートパソコンを取り出し、すぐに自分の名前を打ち出しました。

「神風 翔殿と言うのですね、さて皆さん本日は急な呼び出しをしたのには理由があります。実は昨日の夜に巖谷中佐から私と紅蓮大将の二人に新しく戦術機とは別の概念を持つ兵器の設計図がもたらされました」

周りがざわざわと騒ぎ出し、それから一人の人物が手を上げて喋り出しました。

「殿下その兵器と言うのはどんな物なのでしょうか？」

「それは今から配る資料を見て下さい、真耶さんお願いします」

「はい」

そう言つとあつという間に皆の皆の手元に資料が生き渡りました。物凄く早いです……咲世子さんのように忍者なのでしょうか？

暫らく皆が資料に目を通してしていると周りから次々と声が上がってきています。

「殿下何ですかこれは！？ 戦術機とは違うこのナイトメア・フレームと言つ兵器は！？」

「そうです！！ 巖谷中佐これはどうしたのです！？ まさか技術廠が開発したとでも！？」

「いえ違います。このナイトメア・フレームの開発者はこの子です」
そう言つと周りからは馬鹿などか巫山戯るなどか罵声が飛び交っています。

ここに居る人達の殆どは皆戦術機に乗り前線で戦う者や技術者の為、これがいかに凄く有り得ない事かを理解している様です。

「だがデータだけでは実際に開発し稼動出来るか等わからないではないのでは？」

「このナイトメア・フレームは戦術機の技術を十分に活用できますし、私が見たところ開発も可能だと判断をしました」

「だがッ!!」

「やめいッ!!!! 殿下の御前であるぞ!?!」

紅蓮大將が声を張り上げて場を鎮めました。

「説明は開発者である翔君が行ないます」

そうおじさんが説明を促してきました。

「翔殿、この舞鶴サザランと言うナイトメア・フレームの説明を頼んでも宜しいでしょうか？」

殿下がそう静かに聞いてきました。

昔からこのような場所で話すのは苦手です……緊張で体が仔犬の様にプルプル震えてしまいます。

すると隣から唯依姉さんから「大丈夫だから、ゆっくり説明すればいいだけだから」と手を握って励ましてくれました。

それから殿下の問いにゆっくり頷いて説明を始めました。

『それでは説明します。このナイトメア・フレームは今までの戦術機とはあらゆる面で違います。まず設計思想はあらゆる局地的状況における生命保持を主眼においた『サバイバルコクピット』機構と
言う物があり、兵士の命を救う為の脱出装置があります。詳しく説明しますとダメージを受けすぎますとコクピット全体が機体から切り離されて射出し、安全地帯まで低空を飛ぶように任務前に設定し

ます。そうすると射出された時自動で其処まで飛びます。また手動でも飛ばし動かす事が出来ます。しかし光線級がいた場合撃たれる可能性があるのです。そこは気をつけなければなりません」

「ふむ、これが本当に出来るのなら前戦で戦っている兵士の命を少しでも救う事が出来るやもしれませんな」

紅蓮大将が力強く呟いていました。

「しかしBETAの大軍の中で上手くいくでしょうか？」

「それはまだ試作の段階なので自動射出する方向や飛べる距離は改良します」

「それならばこの装置はかなり有効になりそうだな」

「他に特徴としては、情報収集用カメラ『ファクトスファイア』、地上での高速移動の他、建造物の間もよじ登る事が可能なホイール『ランドスピナー』、移動や牽引、攻撃など多数の用途を持つワイヤー式アンカー『スラッシュハーケン』などがあります。これ等は最低標準装備として持たせます。後は戦術において必要な者を装備出来るように腰や足に長刀や銃を肩にはミサイルランチャー等装備出来るようにします。なので火力を心配する必要もありません」

「成る程、どれもこれも戦場では便利なものだな……子供ながらよくここまでの物を考え付いたものだ。動力の方はどうなっているのだ？」

紅蓮大将が威厳のある声で聞いてきました。

「まずは既存の物を使いたいと思います。ですが既存の物では舞鶴サザナギはよくてもそれ以上の機体である紅蓮式式には力が足りません……ですので新しい動力炉を作ろうと考えています」

「馬鹿なッ！」

「誇大妄想もいい加減にせよッ！」

「何処の国も何年も研究して今の形に落着いているというのにッ！」

やはり納得できないのか怒声が部屋中に響き渡っています……

「いい加減にせよッ！ 殿下がお聞きになっっている所に口を挟むなッ！」

紅蓮大将の怒声で再び部屋は静けさを取り戻しました。

「それで翔殿、新しい動力と紅蓮式式とは何でしょうか？」

殿下がそう聞いてくるとそこをおじさんが説明をしてくれました。

「殿下申し訳ありません。実は昨日あまりの驚きにきちんと確認をしないまま此方へ来てしまい他の機体があると知ったのは今朝だったのです……動力については未だ構想段階だそうです」

そう言っておじさんは頭を下げました。

「たしかに巖谷中佐の気持ちもわかります。所でその紅蓮式式のデータはありますか？」

「はい。翔君のパソコンに入っています。翔君いいかい？」

そう言われ僕はコクリと頷きパソコンを差し出しました。

「こちらになります殿下」

殿下はパソコンを受け取ってマジマジと画面を見だしました。

「これは本当に可能なのでしょうか……だとしたらとてつもない機体ですね。開発中である試作型武御雷を超えていますし、武装もとてつもない物がありますね。しかもこの輻射波動と言う理論から設計図まで……しかし唯依姉さん用と書いてありますが？」

説明したいけどパソコンがあつちにあるから説明出来ません……

それが分かっていたのかおじさんが説明してくれました。

「実は翔君が篁中尉を死なせたくないと色々な訓練データを見て、この機体を篁中尉用にカスタマイズして一つ一つの動作や中尉の癖など操作しやすいようにしたらいいのです。しかしまだOSが完成していないそうです」

「成る程ワンオフのEES機と言うわけか……だが今ならまだ普通のEES用の機体にはできないのではないか？」

紅蓮大将がこちらを見ってきます。

か、顔が怖いです……

「翔君できる？」

唯依姉さんが隣で聞いてきました。

カスタマイズしたのを一般用にするだけなら可能ですね。

コクリと僕は頷いた。

「ならば此方もどうにかして開発したいな……」

「しかし作るのも時間やお金も結構かかりそうですし……」

S i d e O u t

S i d e
翔

こうしてかなりの時間話し合われていましたが、流石に長時間はきつくグッタリしてしまいました。

「翔君大丈夫？」

唯依姉さんが心配して声を掛けてくれました。

僕はコクコクと首を首肯して返事を返しました。

「もう少しだけ頑張ってね」

そうこうしているうちに説明が終わったらしくパソコンが戻ってきました。

「皆さん私は試しにこのナイトメア・フレームを作ろうと思います
が、反対の者はいいますか？」

「しかし戦術機に取って変わる物かは判りませぬぞ？」

一人の政治家が言った事はナイトメアを知らない人には当たり前の事です。

「勿論テスト等には行ないます。今はあらゆる可能性を試さなければならぬのです。テストをして駄目だったら仕方がありませんが、もしデータの通りの性能が発揮できれば日本の防衛に役立てる事ができましょつ」

そう言い周りを見ると反対の者は特にいないようです。

「ではこれで今日の議題を終わります。後、翔殿と巖谷中佐、篁中尉に紅蓮、真耶さんは残って下さい」

えっまだ何かあるの？ 僕は首を傾けながら不思議に思った。

皆が立ち去った後少しして静かに殿下が僕へと質問をしてきました。

「それではここに残って貰ったのは翔殿の事です。翔殿そなたは何者ですか？」

まさかここでそれを聞かれる何て僕は思いもしていませんでした。

何て答えたらいいのだろうと僕は混乱してしまいました。

「失礼ながら昨日真耶さんに、ナイトメア・フレームの開発者の素性を調べるよう頼んでおいたのです。しかし調べた結果何も出てこなかったのです。通常こんな事はありません。ですので本人に直接聞きたいと思つたのです」

僕はこれは話した方がいいのかもしれないと思い始めていた所です。

それに下手に嘘をつく和不味い様な気がします。

「恐れながら殿下、翔君は今まで帝国に不利益なことや怪しい事など何もしておりません」

唯依姉さんは僕を抱きしめ庇ってくれていました。

僕はその言葉に涙が出そうになりました。

「篁中尉、何も翔殿が何か害するなどと言っているのではありません。ましてや翔殿は体が不自由で声も出ないのです。最初から疑ってなどいません」

「では何故ツ!？」

「篁中尉ツ!！」

「ツ!?! 失礼しました……」

おじさんに名前を呼ばれ唯依姉さんは殿下へと頭を下げていました。

「良いのです。篁中尉が翔殿を大切に思い信じているからこそ言葉なのでしょう。ただ私は不思議に思ったのです。何故翔殿の様な子供がいきなりナイトメア・フレームの設計図を作れたのか、お二人も知らないのではないですか？」

的確に事を突いてきます。

「そうなのか巖谷中佐？」

紅蓮大将もおじさんに聞き返しています。

「はい、私も詳しくは知りません。翔君も篁中尉からも私の部屋にいたとしか聞いていません」

「詳しく聞かなかったのか？」

「本人も混乱していましたし身体も不自由でしたので危険は無いと判断していました。それに篁中尉が家で面倒を見ると言ったので、様子見もかねて詳しくは後でいいかと思ひまして」

「篁中尉も詳しくは聞いていないのですか？」

「はい、初めて会った時には部屋にいたとしか……その時翔君に聞いても誰かと来た訳でも無く一人で来た訳でもない……気付いたら部屋にいたみたいで」

「では行き成りその場所にいたと言う事になりますね……翔殿その話は本当ですか？」

僕はコクコクと一生懸命頷いた。

「詳しい事を説明出来ますか？」

『分かっている事ならあります』

「ではお願いします」

そう殿下に言われ分かっていることを僕は語り出しました。

S
i
d
e

O
u
t

S
i
d
e

煌
武
院 こっけいん

悠
陽 ゆうひ

「
実に興味深い話ですね……紅蓮貴方はどう思いますか？」

「違う世界から来たと言うのはちょっと突拍子もない話ですが、嘘を付くならもつとまじな嘘を付くと思われますし、ナイトメア・フレームと言う兵器の設計図を作れたと言う事実もあります。何より目が嘘についておりませぬ」

「真耶さんはどうですか？」

「私も紅蓮大将と同じ考えです」

（それにしても異世界ですか…… あちらでは科学者をしていたと言っているのでナイトメア・フレームのような物を作れたのですね。しかし涙目になりながら此方を見てくる姿はどうも保護欲が掻き立てられますね。抱き締めたいです！）

「では翔殿、これからは技術廠に入って民の為にそなたの技術を貸して貰えませんか？」

そんな問いに翔殿はまたもや一生懸命にコクコクと頭を動かしていました。

（やっぱり抱き締めたいです！ 今度ゆっくり異世界の話を書く為に呼びましょう！ そしてその時に抱き締めましょう！）

「ではこれにて謁見を終わります」

私はそう言って翔殿に微笑みかけ謁見の間を去って行った。

Side Out

S i d e
翔

しんどい一日でした……帰りの車の中では唯依姉さんに「何でもっと早くに教えてくれなかったの？」と言われジトつとした目で見られてしまいました。その上罰として今日はお風呂と一緒に入るからねと笑顔で言われてしまいました。普段はできるだけ自分で入る努力をしています。手だけは使えるので這いながらシャワーだけ浴びるのですが……

「翔君はこの世界に来て寂しくない？」

唯依姉さんが聞いてきました。

前の世界では家族はいなかったの、よくラクシャータさんやロイドさんと研究室に閉じ籠っていました。だからあの人達に会えないのは悲しいけど、今は唯依姉さんがいるから寂しくはないです！

だから僕はブンブンと首を振って答えた。

「……………い……………」

今は風呂の中でパソコンがない為、唯依姉さんがいるから寂しくないと言おうとしたんだけど言えなかった。

だけど唯依姉さんは分かったような顔して僕をゆっくり抱き締めてくれました。

胸が後頭部に当たってます！ かなり恥ずかしいです！ いくら精神が体に引っ張られて12歳だと言っても恥ずかしいです！ でも気持ちいいです。

そんなこんなでその後も一緒に布団で寝ました。温かいです！

僕は又ク又クと眠りにつきました。

Side Out

3・帝国技術廠に入局（前書き）

ここまで読んでくれた方々有り難う御座います。引き続き頑張っ
て行きたいと思えます。

3・帝国技術廠に入局

1997年2月10日

あの謁見から三日後、正式に辞令が届いた。

「以前にもここに来た事があるので何人かは既に知っていると思うが、新しくこの第壹開発局に入局する事になった神風 翔君だ！」

パチパチと拍手が巻き起こる。

『これからお世話になる神風 翔です。宜しくお願いします』

唯依に抱えて貰いながらパソコンの文字を皆に見せぺこりと頭を下げた。

皆その姿に可愛い！とワイワイ騒ぎ出した。

「翔君は足が殆ど動かず声も殆ど出せない。と言う訳だからみんなサポートを宜しく頼む。中には子供だからとか子供何かにとか言う馬鹿者が出てくるかもしれん！その時は皆が守ってほしい！その時は私の名を使っても構わん！」

「……………分かりました！！……………」

「そんな馬鹿は黙らせませすよ中佐！」

「そうですね中佐！」

皆がそう声を上げていた。

皆の歓迎の歓声にニコリと翔が笑っていると、唯依が頭を撫でてきた。

そこに一人の男性職員が手を上げて質問をした。

「所で中佐その子が例のナイトメア・フレームとやらを作ったと言うのは本当でしょうか？」

やっぱり子供が作ったと言うのは信るのは難しいみたいで、翔もその気持ちは分かると納得していた。

「其れについては本当だ。これからナイトメアの話しもしたいと思っっている」

そう言い説明を始めた。

「まずは戦術機等の開発研究は今まで通り進めてもらう。理由はナイトメアがまだBETA戦で使えるか分からないからだ。まあそんな事はないと私は思うがな」

「中佐！ もうそのナイトメアは製作されているのですか！？」

「ああ今急ピッチで製作されている。其処で此処にナイトメア専用の班を作る事にした」

そう言つと皆が「私やりたいです」「や」「ぜひ俺に任せてください」など手を上げてくる。やはり研究開発に携わる者として新しい物を研究したいらしい。

翔は似たような人達を知っているので懐かしく感じていた。

「皆落ち着いてくれ、こんなに皆がナイトメア班に行ってしまったら戦術機の研究開発が出来なくなってしまう」

そう言われて皆少しは落ち着いてきたみたいだが目がギラついている。

あわあわと震えている翔に唯依が気付き研究員達を睨み付けた。

「こらお前達！お前達のせいで翔君が怖がっているだろう！」

其処でやっと皆が冷静になってきた。

「しかしあの鉄の篋中尉がブラコンになるとは……」

皆がヒソヒソと喋り出した。

「何か言ったか！」

ギロリと睨み付けた。

「イエ！ ナンデモアリマセン！ マム！」

その光景翔は驚いていた。全員が一斉に敬礼をしたのだから。

「まったく……こんなに可愛い子がいたら可愛がるのは当たり前だろ」

唯依は皆には聞こえない声ではそりと呟いた。

「だけど翔には聞こえていた。何か日に日にブラコンになってきているのは気のせいでしょうか？」と翔は内心思っていた。

「あゝ皆いいか？」

今まで喋り出せなかった巖谷中佐が声を掛けてきた。

「で、先の話の続きだがナイトメア班の班長に翔君を、副長には篁中尉が決定した。後は翔君と篁中尉が話し合って決めてくれ」

『行き成り班長ですか！？』

「ナイトメアが一番詳しいのは製作者である翔君だけだからね」

『唯依姉さんが副長ならとても助かりますし嬉しいですけど、ナイトメア班の副長とホワイトファンクス部隊隊長の両立大丈夫ですか？』

「部隊の方は両宮中尉に任せる事にしたわ」

「後翔君はナイトメア開発の功績で中尉に昇進したから」

翔は口を開けて固まってしまっていた。

それも仕方が無いのかもしれない。

普通なら中尉になるまで最低でも年単位は掛かるのだから。

『何故行き成り其処まで階級が上がったのですか？ 普通技術士官でも少尉とかからでは？』

翔はパソコンの文字を見せ聞いてみた。

「翔君は自分の事を過小評価し過ぎだ。ナイトメアの開発の功績にはそれでも足りないくらいだぞ？」

巖谷中佐は苦笑しながら翔に教えた。

そこで翔は前の世界ではナイトメアは当たり前前すぎて感覚が麻痺していた事に思い当たった。

行き成りこんな兵器を開発したら普通はこうなるのだと今更ながらに気付いたのだ。

「翔君はもっと自分の事を誇ってもっと私達に頼っていいのよ？」

そう優しい声で翔へと話しかけた。

唯依は翔が体が不自由なのに、自分で出来る事以上に無理をしようとするので心配でたまらなかった……だからもっと自分を頼って欲しいと思っていた。

そんな唯依の言葉に翔は涙が出ていた。

それに驚いた唯依は翔を抱きしめ慰めていた。

周りでは生暖かい視線を感じるのか、翔は恥ずかしかった。

その光景が周囲に更に笑顔をもたらしているとも知らずに。

「後専用の部屋も用意してるからそっちで後の事は話し合っ
てくれ」

それで紹介は終わった。

「それじゃ〜翔君、部屋に行って人員について話し合おうか？」

翔はコクリと頷いて唯依と一緒に部屋へ向かった。

S i d e 翔

『凄く部屋が広いです』

吃驚です！ 以前自分が使っていた研究室はもつと小さかったので、ここまで広いとは思いませんでした。

「ふふ、この部屋は研究開発で使っていただけなんだけど、ナイトメアの研究室に使える様にもらったのよ。これなら結構人数入ると思うわよ？」

頭を撫でながら教えてくれた。

『これなら20人は余裕で働けるんじゃないですか？』

色々な機材が入っているのに其れでもまだ広いです。

「そうね、其れくらいは余裕で入るわね。それじゃ〜翔君は其処で座って待っててね」

そう言われてぼけ〜と待っていると何かの資料を持って戻って来ました。

「これが技術者の資料でそっちがテストパイロットの資料、ナイトメアはまだ機密の固まりだから専属になつてくれる人を決めなくちゃいけないの。でもテストパイロットはまだ一人決めるだけでいい

わ、私も乗るから」

なるほど……でもかなりの人数の資料があります、今日中に終わるでしょうか？

「翔君この人何てどう？今まで色々な装備や戦術機の整備から開発を行っているし、結構いいと思うんだけど？」

そう言われて資料に目を通すと結構な経歴だった、この人なら開発をまかせられると思うのです。

こうして十数人の候補者が決まりました。

『これで開発研究の技術者は決まりましたね！ でもこの人達引き抜いて良いんでしょうか？』

「大丈夫よ。ナイトメアは今国家重要プロジェクトの一つになっているから多少の無茶や我侭はきくわ。それに面接して見ないと分からないし」

「……いいのでしょうか？ でも深く考えても仕方がないので、他の部署の人達には頑張つて貰うしかないのです……」

「じゃ、次はテストパイロットを選びましょう！」

テストパイロットかあ、前の世界ではルルーシュ陛下の元にはいたときはスザクさんにやって貰つて、陛下が亡くなってからはカレンさんにやって貰つてました。あのような人達はいるのでしょうか？ あのと二人はある意味人間辞めていたので此方は気にせず機体を作っていたのですが……今回はそうはいかないとでしょうね……あんな人間が沢山居るはずがないからです！

「うーんこっちの人は……」

そう言いながら唯依姉さんが色々悩んでいますね。

僕も色々資料を見てみると、えっ！？ 何で！？ 何でこの世界

にカレンさんがいるの！？ ん？ でも名前が紅月^{「こうつき」} 可憐^{「かれん」}で名前が漢字になっているし……聞いてみましょう！

『唯依姉さん、この人はどう言う人ですか？』

「ん？ えつとこの子は紅月 可憐訓練兵ね、この子は訓練兵だけど能力が物凄く高いから資料に加えておいたのよ」

もしかして世界には似ている人がいるのでしょうか？ でももしカレンさんと同じ位の能力が有るのなら、将来はエース確実です！
引き抜くしかないです！

『唯依姉さんこの人が良いです！ この人ならきつとナイトメアを乗りこなす事が出来ると思います！』

「そう？ でもまだ実戦に出た事がない訓練兵よ？ 正規兵の方がいいんじゃない？」

『いえ、訓練兵なら変に戦術機の癖とかも無いのでナイトメアに順応し易いと思います！』

「翔君が其処まで言うならこの子にするわね。でもこの子も面接して見ないと……テストパイロットとしてやってい行けるか分からないし」

コクリと頷いた。

やりました！ これでエース獲得です！ どうせならその内にブリタニア帝国みたく『^{ナイト・オブ・ラフランス}円卓の騎士』をテストパイロットで結成するのも良いかも知れないです！

こうして僕の初仕事は夜遅くまで資料を見て人員確保の話が行われた。

S i d e O u t

4・テストパイロットの面接

Side 可憐

私が同期の訓練兵達と走っている最中だった。

「紅月訓練兵！」

私を呼んだのはガチガチの日本軍人。

ハーフである私の事を嫌っている一人だ。

一体何だろうか？ 今日は何のミスもしていない……また何か嫌味事だろうか……ハーフなのも日本がアメリカの半属国化なのも私のせいじゃ無いって言うのに！

「はい！ 何でありましょうか教官！」

私はやりたくもない綺麗な敬礼をしながら返事を返した。

「貴様に今すぐ技術廠第壹開発局へ来いと命令があった！」

技術廠？ 一訓練兵にすぎない私に一体何の用だ？

「了解しました！ 今すぐ技術廠へ出頭します！」

「ふん、では行け！ 決して迷惑を掛けるなよ」

最後まで嫌味を言われて私はは直ぐに技術廠へ向かった。

はあ〜 一体何の用だろう……私早く正規兵になってお兄ちゃん
の仇であるBETAを討って、アメリカにいる私達家族を捨てた父親^{あいつ}
を見返したいのに！ こんな所で無駄な時間を使っている暇何てな
い！

私はそう思いながらズンズンと技術廠の廊下を歩いていった。

私は今第壱開発局の前に来ていた。

「……着いた、早く終わらせたい」

溜息をつきながら扉をノックした。

「失礼します！ 紅月 可憐訓練兵です！」

中では忙しそうに仕事をしている人達がいた。私に気付いたのか
こっちに一人やって来た。

「あつ君の事は聞いてるよ。あつちの部屋で待っているから行って
くれ」

「はい、分かりました」

Side Out

Side 翔

「ふう〜翔君これで技術スタッフは揃ったわね。殆どの人が問題なくて良かったわ」

本当に皆職人気質で親方！ って感じでした！ まあ中には未だに信じられないナイトメアと言う兵器より戦術機の方を研究開発した方がいいと言う人も何人かいましたか……

『そうですね、後はテストパイロットだけです』

「そうね、問題が無ければ明日からもうナイトメア班は始動できるわね」

隣に座っていた唯依姉さんが、僕の事をギュッと抱き締めてきます。

そうこうしている内にノックが部屋に響き渡りました。

僕の事を抱き締めていた唯依姉さんは直ぐにキリッと佇まいを直して返事をしました。

「どござ」

唯依姉さんは短く言って返した。

「失礼します！ 紅月訓練兵です！」

部屋へと入って来たのは赤みをおびた髪、扇情的と言っているほどスラリと伸びた脚、其処だけはもう娘から女性への階段を駆け上がるうとしている綺麗な胸部のラインを持つ少女。

まだ子供っぽさが残るその顔は、それでもくっきりした目鼻立ちをしている。

強い光を放つ瞳が印象的だ。

うん、やっぱりカレンさんです！ もう本人と同じです！

「其処に座ってくれ」

そう言われると可憐さんは席に座りました。

「私は篁 唯依中尉だ。こっちが神凧 翔中尉だ。では此処に来て貰った理由を説明する」

「はい」

「此処に来て貰ったのはテストパイロットへの面接だ」

「テストパイロットですか!？」

そう言われて可憐さんは驚いていた。

まあ、無理も無いですが、普通訓練兵にそんな話しは行かないです

から。

S i d e
O u t

S i d e
可憐

まず驚かされたのは目の前にいる人達だ……一人は自分と同じか

年下くらいの年齢で中尉、まあこれはいい……だがもう一人は明らかに子供なのに中尉だと言う、どう言う事よ！

内心そう思いながら理由を聞いた。

「此処に来て貰ったのは新型機のテストパイロットへの面接だ」

えっテストパイロット!? ただの訓練兵の私が!?

「テストパイロットですか!?!」

何時の間にか自分で叫んでいた。

これはチャンスだ！ 新型戦術機のテストパイロット等普通は訓練兵がやらして貰える訳がない。何としても受からなくちゃ！

其処で篁中尉から説明が話された。

「まあ、テストパイロットと言っても戦術機ではない」

えっ戦術機じゃない!? どう言う事!? そんなんじゃ軍に入った意味がない！

だがそんな私の気持ちが表情に出ていたのか直ぐに説明された。

「戦術機ではないがナイトメア・フレームと言う人型兵器だ」

はっ? ナイトメア・フレーム? 何だそれは?

「えっと、それはどんな物なんでしょうか?」

私はは困惑しながらナイトメア・フレームと言う兵器について尋ねた。

「本当は合格する迄は機密なのだが……神凧中尉も領いている事だし説明しよう」

視線を神凧中尉に向けるとニコニコと此方を見ていた。物凄く可愛らしい……あれは下手な又イグルミよりも可愛いのではないだろうか？ それにあの黒く綺麗な長髪に黒い目がまた、可愛らしさ以外に神秘性を持っている。抱き締めてみたい……

はっ！ ぼけーと見つめてしまった、集中しなくては！

「ナイトメア・フレームと言うのは此処に居る神凧中尉が開発した人型兵器だ。しかも今までの戦術機とはあらゆる面で違う」

そこで私にナイトメア・フレームについての資料が渡された。

それからじつくりと資料に目を通していた私はは余りの驚きに目を見開いていた。

「こっこれは!？」

「そうだ。大きさは戦術機と同じ位で今迄にない装備や脱出装置、それにスペックは陽炎並で安価に作れる。しかしまだ兵器としての実績が無い為、まずは何の実績も持たず戦術機の癖がない訓練兵に乗って貰おうと思ったのだ」

こんな凄い兵器に自分が!？

「是非自分にやらせてください！ 必ず結果を出して見せます！」

「やる気は有る様だな……能力も悪くない。神風中尉どうでしょう？」

『僕も言います。彼女にテストパイロットをやって貰いましょう』

やった！ こんな凄い事に選ばれるなんて！ あれ？ そう言えば何で神風中尉パソコンで返事したんだろう？

「あ……？ 一ついいですか？」

「何だ？」

「神風中尉は何でパソコンで返事を？」

「それはこの子が喋れないからだ……それに足も殆ど動かない、手位しか動かせないのだ。でも最近は腕も少しは動かせるにはなってきたはいるが、まだまだの状態だ」

「すみません！ 余計な事を聞いてしまって……」

神風中尉の方を見てみると笑いながら首を振ってくれていた。

「そう思うなら紅月、君も神風中尉をいや翔君を普段から助けてやってくれ」

「はい！」

支えるのは部下の役目だと思いながら元気に返事をした。

「もう一つ聞いていいですか？」

「何だ？」

「何故ハーフの私を選んだのでしょうか？」

神風中尉はそう聞かれパソコンに文字を打ち出した。

『逆に聞きますがハーフの何処に問題がありますか？』

そう問われ泣きそうになってしまった。今迄はその事で色々教官や同じ訓練兵に言われ続けて来たのに、この二人は其れがどうしたと言っている。この二人にならついて行けると心から思った。

「後ナイトメアの事は秘密だから話すなよ？ 後今日中に辞令が降りる筈だ、後少尉への昇進も決まっているからそのつもりで」

はっ！？ 行き成り少尉っ！？

「了解しました！」

心から頑張ろうと誓った。

こうして後に『ナイト・オブ・ラウンズ十二の剣』のエースにして翔の腹心になる者の面接が終了した。

Side Out

S i d e
翔

「良かったわね翔君、性格も問題ないみたいだし」

コクリと頷いて返事をした。

本当にカレンさんと同じく好感が持てたのです！ でも可憐さんはアメリカ人とのハーフだったんですね、あっちではブリタニアでしたから。でも僕の事も心配してくれたし上手くやって行けると思っています！

でもカレンさんが可憐さんになって少し状況が変わっているなら、前の世界のラウンズの人達も何処かにいそつです！ その内に探してみましよう！

「これで明日からナイトメア班が動き出せるわね」

『これで人員について心配事はなくなったのです！ 今日の仕事は終わったのです！』

「それじゃ今日は帰りましようか？」

『明日に向けて英気を養いましよう！』

「じゃ〜一緒にお風呂に入って一緒に寝ましようね」

えっ！？ それは何か違うのです！

「私にはそれが英気を養う事になるのよ」

そう笑顔で言われた。

その夜帰ってから、一緒にお風呂に入って布団で抱き締められながら僕は眠った。

Side Out

4・テストパイロットの面接（後書き）

アイディア募集中です！

5・サクラダイト発掘

ある日翔はどうしようかと悩んでいた。

今の所開発スタッフやテストパイロット等確保出来た為、順調と言えば順調だった。

だけど紅蓮式式の動力をどうしようかと唯依と一緒に考えていた

……

「翔君、既存の動力じゃ紅蓮式式の力が出し切れないわね……」

翔は頷いて返事を返した。

唯依もどうやって強力な動力を得るか考えているみだがやはり難しいみたいだ。

「一つだけ考えていた事があります！ やってみるしかありません！」

一つだけ確かな方法があった。前の世界と同じ動力、『サクラダイト』で『エナジーファイラー』を造ってそれを使えばと翔は考えていた。

「考えていた事って？」

「僕が前の世界に居た時にナイトメアに使っていた動力です」

「えっそんな物があるの!？」

唯依が驚いた様子で翔を見ている。

「はい。此方ではまだ発掘や発見がされていない様ですが、サクラダイトと言うレアメタルで造ったエナジーファイラーと言います」

「サクラダイト？ エナジーファイラー？ 石油みたいなもの？」

「大雑把に言えばサクラダイトはレアメタルですね。そのレアメタルでエナジーファイラーと言う電気を大量に貯めておける大容量バッテリーを造るんです。前の世界と同じなら富士の山中に大量にある筈です」

「富士山にそんな物があつたなんて……富士山は神聖な場所として今迄調べられた事はなかつたから盲点だったわ」

「そうだったんですか。でもこつちの世界にも在るかは判らないのですが……」

翔の心配はそこにあつた。

前の世界と同じ場所にあるか、それ以上にサクラダイトが存在しているのかと。

「直ぐに許可を取って調べさせて見るわ！ だからそのサクラダイトと言うレアメタルの事を詳しく教えて」

こうしてサクラダイト発掘計画が開始された。

S i d e
翔

あれから数日……調査発掘計画は見事成功しました！あれから直ぐに調査発掘チームが作られ即座に調査が行われ其処にサクラダイトが在ると判明し、そこからは殿下の耳にも入っていたのか、発掘許可が下り発掘工事が直ぐに開始され見事に出てきました。取り扱いは注意ときちんとマニュアルを渡したので大丈夫でしょう！

「翔君、これで開発中の紅蓮式式の動力に目処がたったわね！」

本当に良かったです、これで見つからなかったら紅蓮式式の起動に問題が出る所でした。

そう考えると自然に笑顔になりコクコクと頷いて返事を返す事が出来ました。

サクラダイトが見つかったので、電気を蓄えられるエナジーファイラーや、そのエナジーファイラーから高エネルギーに転化する『ユグドラシルドライブ』機関とその核である『コアルミナス』も作らなければなりません！ これらが無いとエナジーファイラーからユグドラシルドライブのコアルミナスで高エネルギーに転化し、動力として使えないですから。この三つはサクラダイトがあれば直ぐに出来ると思うので問題は無いと思います。

「このサクラダイトを上手く使えばエネルギーに困る事は無さそうですね。それにこのサクラダイトを世界に売れば資金がかなり入ってくるわ」

もうこれでもかって言う位頬擦りされて抱き締められた。

「翔君が居てくれて良かった」

そう言われると照れますね、でもまだまだ此れからです！

サクラダイトが在ればブレイズルミナスも作る事が出来るし、他の兵器も作れます！

だけどナイトメアなら問題は無いですが、戦術機に今から動力等

を組み込むとするなら改修が必要ですね……

『唯依姉さん、弄って良い戦術機ってないですか？』

「戦術機？ どうして？」

不思議そうな顔をして尋ねてきました。

『今は実績の無いナイトメアを量産出来ないじゃないですか、出来る様になるとしても時間が掛かると思うんで、今在る戦術機やパーツでナイトメアに改造出来ないかと思って……』

「成る程、翔君の言う通りね叔父様に掛け合ってみるわ！ 翔君は此処で待っててね」

そう言うと部屋から立ち去って行ってしまいました。

でも戦術機を改修出来るだろうか？ その不安だけが残っています。

それから余っていた撃震を一機弄らせて貰える事になりました。

それなりに改造は順調に進んでいます。ナイトメアのように一から作るわけじゃないのでナイトメアより早く完成させる事が出来ました！ コクピットはどうしようも無いですが、両腕両足をパージ出来る様にしてナイトメアのローラーやスラッシュハーケン等の装備をつけOSを改造しました。此れだけでも以前の撃震よりもちろん性能はアップしたはずです！

そうしている内におじさんがハンガーにやって来たようです。

「どうだい翔君、撃震の方は？」

『今の所こんな感じになっています』

パソコンのデータと戦術機の方を見せました。

「ある意味別物だな……此れなら低予算で撃震を改修出来るな、後はテストをして決めるか。」
「苦労様翔君、後は私が引き継ごう」

僕の頭を撫でてハンガーから去って行きました。

S i d e O u t

後日その改修された撃震は見事合格し名前も五月雨さみだれに変更された。

5・サクラライト発掘（後書き）

色々なアイデアありがとうございます。これからも募集するので
宜しくお願いします。

6・試作ナイトメア完成

1997年3月25日

Side 翔

ナイトメア班が始動してから一月が経ちました。

僕は今日も唯依姉さんとナイトメア開発研究室へ向かっています。

部屋に着くと色々な人が書類などを片手に持ち、忙しそうに動き回っているのは日常茶飯事です。そして中でも異色なのはこの部屋にシミュレータが二機置いてある事だと思えます！

ここに置けたのは戦術機のシミュレータよりも小振りで、この部屋が広いからこそ出来た事なのですが……

このシミュレータはこの前完成したナイトメア専用のOSを、コクピットを使って本物と同じ感覚が味わえる様にしました。でもナイトメア専用のOSは完成と言っても前の世界程のOSは僕にも完璧に造れませんでした……一からOSを造った事がなかったのでこれは諦めるしかありません。それでも十分通用する物は造れたので問題はありません。しかもこのシミュレータに搭載してあるOSは特別で、唯依姉さんと可憐さんに合わせて僕自身か作った常に最適化するOSです！ だから使えば使う程動かしやすく成り、経験を積みめば自分にとって最高のナイトメアになります！ これは戦術機の間接思考制御を参考にしたものです。だけど此れだと過去のログ等が機体に残っている場合が有り違和感が出てしまいます。なので二人のOSは記憶媒体でナイトメアのコクピットから持ち運ぶ事が

出来るの様にしました。此れなら将来ナイトメアが広がっても自分の蓄積されたOSを、一人一人が持ち運べるので違和感が出てしまふ事は無い筈です！

「翔君、篁中尉おはよう御座います！」とスタッフに次々と元気良く挨拶をされました。

ここのスタッフは男女問わず皆元気です！ 其れにお偉いさんが来た時や公式の場、他人の目が無い時は僕の事を翔君と普通に呼んでくれます！ 堅苦しいのは苦手です！ でも最初唯依姉さんは皆にちゃんと呼べと言っていたのですが、僕が皆にそう呼んでと願いますとコロツと「そうしましょう！」と唯依姉さんは意見を変えました。嬉しいけどこれで良いのだろうか？

そう色々考えながら「おはよう」と二人で返事を返しシミュレータの方へ近付いて行きました。

「どう？ 可憐の方は？」

「お二人共凄いですよ！ この数値をみて下さい！」

そう興奮しながら色々なデータを出して来ました。

「確かにこれは凄いな……訓練兵の時の能力からして乗らしたら適正が有ると思っていたが、数日で此処迄とは予想していなかったな」

唯依姉さんは感心しながらデータを見ていました。

確かに凄いです。やっぱり可憐さんを引き抜いて良かったです！

後で聞いた話ですが、可憐さんが前に居た所では厄介払いが出来たと喜んでいたのですが、馬鹿な人達です。彼女と共に訓練等を行えば必ずレベルアップ出来た筈なのに、自分達からそのチャンスを捨てる何てどうしようもないですね。そんなにBETAに食べられたいのですかね？

そんな事を考えていると、スタッフがまたも興奮した声で画面を指差してきました。

「特にほら！ 今シミュレータで近接戦闘を行っているんですが、斯衛にも匹敵しますよ！」

あの反応速度は凄いです！ BETA相手に舞鶴サザランであそこ迄挑めるなんて！

「ふむ、つい最近迄訓練兵だったとは思えないな……日に日に動きが鋭くなってきている」

唯依姉さんがそう呟いていた。

こうしてデータを纏めながら唯依姉さんやスタッフ達と話していると、シミュレータから可憐さんが降りて来ました。

「ふうーまだこれじゃ駄目ね……って翔君、篁中尉おはよう御座います」

「おはよう可憐、朝から頑張っているな」

『おはよう御座います可憐さん、シミュレータに随分と慣れて来たみたいですね？』

「私は戦術機に乗ってBETAを倒すのが夢だったら、今は出来るだけこの舞鶴サザランに慣れたいと思っているので出来るだけ頑張りたいの！ それに日に日に乗り方が分かって来て楽しくなってきた。」

可憐さんは綺麗な笑顔で言ってきた。

しかしデータを見ると所々おかしい所があります……

『可憐さん、もしかして舞鶴サザランの反応が鈍いと感じていませんか？』

そうじゃ無いとこんなデータは出ない筈です！

「そうね、自分の肉体の反応には追いついてくれないわね」

可憐さんがそう言うのと唯依姉さんも含めスタッフが驚いていました。

『可憐さんは身体能力が高いので、そう成る可能性はありました』

やっぱりそうになりました……舞鶴サザランでは可憐さんは全力を出せないようです……前の世界のカレンさんと同じ能力を持っているなら舞鶴サザラン何かでは無理です……

其処に唯依姉さんが声を掛けて来ました。

「其れについては後々何とかしよう、当てが無い訳でもないしな」

「えっそうなの！？ 有り難う翔君！ 楽しみにしてるわね！」

本当に楽しそうにしています、でも唯依姉さんの当てつてもしかして紅蓮式式の事ですかね？

まあ今は置いといて、今日はナイトメアの試作品をお披露目する日だった筈です！

『そう言えば可憐さん、今日は試作品のナイトメアを皆さんにお披露目するので可憐さん実機起動訓練が出来ると思いますよ？』

「えっ本当！？」

『確か昨日の書類にそんな事が書いてありました』

「其れなら私も見たから間違いない」

そこで周りのスタッフ達が自分達も見に行ってもいいですか！？と押し寄せて来ました。

「おっ落ち着けお前達！？」

唯依姉さんが目をギラつかせたスタッフの相手をしていた。

そうでした、半分のスタッフはこっちでデータ関連の処理や新しい装備の開発研究で、ハンガーの方へは行ってなかったですね。自分達を作った物を見たいのは研究者として当たり前です！

『なら全員で行きましょう！ 初のナイトメアですし、こっちでデータ関連を処理していて開発スタッフに会った事が無い人も居るかもしれないので丁度いいです』

「翔君何時行くの？」

可憐さんが今にも行きたそうにしていますね。

『えっと予定では午後に行く事になっていますね』

可憐さんの少しシユンとしていた姿が何処か犬を連想させます。

S i d e O u t

ハンガーにやって来たナイトメア班一行。

辺りを見回していると、以前ナイトメアの開発研究のために引き抜いたスタッフ達がやって来た。

「お待ちしていました！ 此方です！」

そう言われ後をついて行くと、大きな布が掛けて在る機体が二体あった。

翔と唯依の二人は此処で開発をしたりしていたが、こうして改めてナイトメアを見ると翔も唯依も興奮が収まらなかった。

周りの皆も目をキラキラさせて今が今かと待っている。

「神凧中尉、篁中尉！ 此方の紐を引っ張って下さい！ そうすれば布が落ちます！」

翔はコクリと頭を動かし紐を唯依と一緒に持って、さあいよいよと言う所で声が掛けられた。

「待ってくれ翔君！ 唯依ちゃん！」

巖谷中佐が走って二人のもとへとやって来た。

「中佐！？ どうしたんです？ ナイトメアを見に来たんですか？」

吃驚しながらも唯依がそう聞いていた。

「勿論それもあるか、皆聞いてくれ！ 殿下が今此方に来られる！」

そこに居た皆がええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！と声を上げた。

『もしかして殿下もナイトメアを見に来たのですか？』

「そうなんだよ翔君！ 急に来られたので先にこっちへ来て準備をしていたのだよ」

確かに殿下の居る前で紐を引っ張り全員で見た方が感激するし、先に自分達が見て殿下が後から見ると何かが締まらない感じがすると皆が納得した。

『準備したと言う事は何かする事でもあるのですか？』

翔は何かあまり良い予感がしなかった。

「ああそれは後でのお楽しみだ！ だから後は殿下を待つだけだ」

S i d e 悠陽

「此方に翔殿の開発したナイトメアがあるのですね紅蓮？」

「はい、今日お披露目をするそうです。普通設計図通りに作っても必ず何か足りなかったりミスがあったり等するはずなのですが、ナイトメアにはそんな事はなく直ぐに稼働させる事ができたそうです。あの子供には驚かせられませんな」

「それは凄いですね。だからこんなに早くお披露目が出来たのですね」

ハンガーの中を私と紅蓮と真耶さんの三人で歩いていると、人が集まって居る場所が見えてきました。

其処には沢山の人達が居てその中心には翔殿がいますね。

「お久し振りですな翔殿」

私は微笑み掛けながら翔殿へと話しかけました。

『はい、殿下もお変わりなさそうで良かったです』

翔殿の顔を見ると、『と笑顔で此方を見ていました。ああ、やっぱり可愛いです！抱き締めたいです！けど我慢我慢……』

Side Out

「それでは殿下も居らっしゃったので、ナイトメアのお披露目を始めたいと思います」

そう唯依が言い改めて翔と紐を握った。

「じゃ〜翔君せーので一緒に引っ張るわよ？」

唯依に言われ翔はコクリと頷いて返事をした。

「それじゃ、せーの！」

そう言って唯依に抱えられながら翔は一緒に紐を引っ張った。

布が紐に引っ張られ滑り落ちてくる。其処に現れたのは戦術機とは明らかに違うナイトメア舞鶴サザランと紅蓮式式の二機だった。

皆が拍手をして喜んでいた。

翔もパチパチと拍手をしながら皆と喜んでいる。

可憐の方を見てみるとそれはもう目がキラキラとして、翔は製作者として作って良かったと思っていた。

「翔君！ 翔君！ こっちの機体は何！？」

可憐が翔を唯依から抱き上げ、抱えながら聞いてきた。

その機体は可憐の髪のような真紅の色をしていた。

もう一つの機体サザラン舞鶴とはフォルムも大分違う。

人型は人型なのだが、サザラン舞鶴は明らかに剣士や騎士をイメージして作られているのに対し、こちらはそう言った優雅さには程遠く、代わりにも殺戮者めいた威圧を感じさせる形をしている。直立しても、やや背を屈めた様な姿。体高に比べて長い腕、逆に安定感と力強さを思わせる短い脚。そして、何より右腕の先に備え付けられた、その巨大な銀の爪。

『そつちは唯依姉さんが搭乗予定の紅蓮式式ですよ、可憐さんは知りませんでしたっけ？』

そつパソコンで文字を打ち返事を返した。

「ええ、篁中尉が搭乗予定の機体があると言う事と、その機体が紅蓮式式と言う名前だと言う事しか知らなかったわ」

『そつか、可憐さんと一緒にシミュレーションを行なっている時、唯依姉さん可憐さんに合わせて舞鶴サザランを使っていたから知らなかったんだ』

「ええ、でも舞鶴サザランと随分違うわね？」

『そうですね、あらゆる面で舞鶴サザランを超えています。可憐さんが経験サザランを積んだら直ぐに乗る事になる機体ですよ 後で詳しいデータを教

えますね』

「そうなんだ、楽しみにしてるわね」

翔を胸元に抱え込み、抱き締めながら楽しそうに返事をした。

翔は頭を胸に押し付けられて恥ずかしがっていた。

翔は顔を紅くしながら可憐と話して居ると、殿下達と話していた唯依の「ええっ!？」と言う叫び声が上がった。

何事かと皆の視線がそちらに向いた。

「中佐! どう言う事ですか!?! 聞いていませんよ!?!」

「ははは、それは言っていないからな。だが丁度いいではないか? 殿下や紅蓮大将、月詠大尉の目の前でナイトメアの実用性を証明できるのでから」

そう言いながら豪快に笑っていた。

「やりましたな殿下! 今日此方に来て良かったですな、ナイトメアの実用性が分からぬと言って戦術機を作れと文句を言う輩も結構居ますからな」

「ええ、そうですね。これでデータ通りの成果を残せばナイトメアの生産を一気に行いながら、現行の戦術機やパーツを五月雨の様に改造と言うのも考えたいですね……ナイトメアを直ぐに帝国軍全てに配備は難しいですからね」

そう成ると翔に戦術機のパーツで、五月雨以外にどの様な物が作れるか聞いてみないといけないと思っていた。

「真耶さん、データの収集をお願いします」

「はい、分かりました」

殿下達はそう言ってやる気満々のようだった。

翔は可憐に連れられて唯依達の前に戻って来た。

「翔君、可憐急な話しだけど模擬戦する事になったわ……」

『聞いてました、でもチャンスだと思いましょう』

そう唯依に笑いかけた。

「そうですよ、ここでナイトメアの性能を見せ付けましょー！」

可憐もやる気になっていた。

「そだね、頑張りましょー」

項垂れ諦めた表情をしながら頷いていた。

『ただこの模擬戦が中佐の言っていた準備だったんですね』

「ええ、何でも陽炎二機と模擬戦するみたい」

「絶対勝ちましょー！」

こうして急な模擬戦が行われる事になった。

6・試作ナイトメア完成（後書き）

此処まで読んでくれた方有り難う御座います！
此れからも頑張ります！アイディア・感想待っています！

7・模擬戦準備とエネルギー戦略

「全く何で俺達が新兵器だかの評価模擬戦をしなくちゃならないんだ？」

不機嫌そうに男は喋った。

「俺だって嫌だが仕方が無いだろ？命令なんだからよ……………」

もう一人の男が返事を返す。

「大体急なんだよ！ でっ相手は誰なんだ？ 弱いのは勘弁だぞ？」

「確か元ホワイトフアングスの篁中尉と新任少尉の紅月だったか？」

思い出しながら返事を返した。

「ああーあの中尉か、以前見た事があるが体は中々良さそうだったな」

イヤラシそうな顔をしながら笑っていた。

「止めておけ真二、巖谷中佐が保護者だ手を出したら間違いなく殺されるぞ？」

呆れながら真二に忠告していた。

「判ってるよ亮、俺だってまだ死にたくねえよ」

「判っているならいい、手を出したいならもう一人にしておけ」

「その少尉とやらか？　どんな奴なんだ？」

「隊長から聞いた話しだとアメリカ人とのハーフだとよ」

「あぁーあの女か」

「知っているのか？」

「まあな以前偶々訓練兵の訓練を見掛けてな、顔も体も良さそうだったんで訓練が終わった後に部屋へ連れ込もうとしたんだけど、ブン殴られたんだよ！　丁度いい借りは返してやる！」

「自業自得なんだがまあ、やる気が無いより有った方がいいか……」

そう小さくぼやきながら二人の中尉はハンガーに向かった。

「おっ相手の衛士が来たみたいだな」

そう巖谷中佐が言っていると皆がそちらを向いた。

「本日の模擬戦で相手を務めます風守 真二中尉です」

「同じく模擬戦で相手を務めます中村 亮中尉です」

二人は中佐に向かって敬礼をした。

「ご苦労。急ですまないがお前達二人には新兵器ナイトメア・フレームの相手をして貰う」

「ナイトメア・フレーム……ですか？」

どんな物が知らないので、困惑しながら亮は返事を返した。

「そうだ。あっちに見た事がない人形兵器が在るだろう？ あれがナイトメアだ」

二人は指を指された方を見てみると、其処には今まで見た事が無い兵器が立っていた。

「何だありや……」

そう真二が声を出した。

「あれは今迄の戦術機とは違う概念で作られている。スペックではあの青紫色した舞鶴サザードは陽炎と同等の上に値段コストは陽炎より安く、もう一体の赤い紅蓮式は斯衛の瑞鶴や不知火を上回っている」

「なっ!?!」

二人は心から驚いていた。

一体は陽炎より安くスペックが同等と言う舞鶴サザード、もう一体にいたってはあの帝国斯衛軍専用機瑞鶴や不知火を上回っていると言う。不知火は今迄の戦術機より数段上の機体だ、以前斯衛の瑞鶴や不知火同士の模擬戦を見た事が在るがあれは凄かったと思いついていた。なのにそれを上回る機体などと、そんな馬鹿な話しがあるかと二人は思っていた。ナイトメア等とよく分からない兵器に最新機である不知火が戦術機が抜かれる何て事有る訳が無いと二人はこれから戦うであろうナイトメアに敵対心を露わにしていた。

「では君達も準備してくれ」

「了解!!」

S i d e 可憐

私は今篁中尉と模擬戦の前の最終確認をしていた。

殿下は先程翔君を抱き締めながら、模擬戦が見られる場所へ移動されて行った。此処で殿下達が見ている前で、ナイトメアが戦術機に劣らないどころか優れているのだと言う結果を出さなければならぬ。こうして私をテストパイロットにしてくれた翔君の為にも！

「可憐、そんなに緊張するな」

「篁中尉」

「そう固くなるな、今は此処にお偉方はいないのだから」

篁中尉は苦笑しながら「自分も変わったもんだ、これも翔君の影響だな」と呟いていた。

「篁中尉、確かに私は緊張してます。此処で勝たなければ只の訓練兵だった私をテストパイロットにしてくれた翔君に申し訳が立ちません!」

私が緊張した面持ちで喋っているのに篁中尉には溜息を吐かれた。

「其れこそ翔君なら気にし無いと私は思うがな? 其れとも何か? 皆で作ったナイトメアが、仮に万分の一も可能性は無いが負けたとして、翔君が責めるとでも?」

「いえ!? そんな事は全く思っていないません!」

そんな事は天地が引つ繰り返つても有り得無いと、ブンブンと頭を振って抗議した。

「心配するな、今の可憐の實力は斯衛に匹敵する。普段通りにやれば負ける事など無い!」

自信満々に篁中尉は言い放った。

「はい！」

私は元気一杯に返事をした。

そうしていると向こうから中佐達の話し声が聞こえてきた。

「相手が来た様だな？」

私も振り向いて見ると、其処には以前訓練兵だった自分を階級に物を言わせ部屋へ連れ込もうとした変態がいた。

「あ、あいつはあの時の変態！」

私は思わず声に出して喋っていた。

「変態？どう言う事だ？」

篁中尉は私に聞き返してきた。

「実は……………と云う事があつたんです」

私が説明をし終わると篁中尉が静かに怒っていた。

「下種が！ 可憐この模擬戦で完膚なきまでに粉碎しろ！ プライドもへし折ってしまえ！ お前にその下種を任せるからな！」

「了解しました！！」

私は篁中尉の殺気に反射的に敬礼をしまっていた。

S i d e
O u t

S i d e
翔

僕は今何故こんな事になっているのでしょうか……

ナイトメア開発責任者として、殿下達と模擬戦を見る事になったのはいいです。

しかし、僕が今座って居るのは殿下の膝の上です！座り心地もよく外が見れる部屋で模擬戦の戦場が良く見えます。……いや駄目ですよ！殿下はこの国のトップですよ？ そう思って殿下を見上げると微笑みを返してきました。

「翔殿、模擬戦が始まる迄少し此れからの事をお話ししましょう」

此れからの事？ 一体何の話でしょう？

「実は翔殿が発見したレアメタルであるサクラダイト、あれを輸出しようかと思っっています。しかしあれを動力源として使うには、翔殿が開発したエナジーファイラーにユグドラシルドライブ機関と核のコアルミナスも輸出しなくてはなりません。それでその三つのある企業でライセンス生産をして貰い他国に売り、サクラダイトの発掘も一挙に任せたいと思っています。翔殿はどう思いますか？」

成る程、確かにライセンス生産なら利点は多いのです。其れに採掘も行いセットで売ればかなり良いのです。ですが此れ程の事を何故国でやらずに企業でやるのでしょうか？

『殿下、何故国でやらずに企業にやらせるんですか？』

「本当は国でやりたいのですが、国でやるとアメリカからの横槍などが国連を通して入ってきてアメリカに適正価格より安く買われたりしそうですね」

成る程……確かにあの国なら有り得そうですね。あの国はBETA戦後を想定している馬鹿な国です、今のままでは人類は滅ぶと言うのに……でもそう言う理由なら問題ないです。

『そう言う事なら何も問題無いと思います。でも何処の企業にやらせるんですか?』

問題はその企業がきちんとやってくれるかが問題です!

「実はナイトメアの生産もこの企業に任せたいと思っていましたよ。国だけでやるとどうしても遅くなってしまつので共同で生産しようかと……出来るだけ早く日本にそして世界に広めたいですから」

凄い信頼してますね? そんなに凄い企業なのでしょうか?

「皇グループの皇重工と言つて日本有数の大企業です。昔から煌武院家とも繋がりがあり現当主は皇^{すめらみ}神楽耶^{かぐや}と言つて優秀な人物です。私も何度か会つた事がありますがこの国を思う心は人一倍でした。なのでアメリカから横槍が入る心配は無いと思いますよ」

……皇 神楽耶? ああ、確かに彼女なら優秀です。前の世界で直ぐに首相交代したあの無能なモジャモジャと違って、神楽耶様はその力を発揮し日本を見事に復興させて行つたのですから。

まああのモジャモジャの首相交代は余りの無能さと、隠蔽していた事が全部明るみになつたせいですが。

『殿下が其処迄信頼して居る方なら大丈夫ですね! お任せします』

「そうですか、有り難う御座います」

こうしてナイトメアとサクラダイトの世界戦略は決まつて行きました。

……でもナイトメアはまだ模擬戦結果出て無いけど決めてしまっ
て良いのだろうか？

S i d e O u t

7・模擬戦準備とエネルギー戦略（後書き）

アイディア募集中！

8 ・模擬戦終了(前書き)

改めて、オリジナル要素や展開が色々これから出て来ると思っています。
其れが嫌な人は見ない事をお勧めします。
これから投稿は遅れ出すと思います。

8・模擬戦終了

『ではこれより、ナイトメア・フレームの評価模擬戦闘を開始します』

距離を空けて対峙する唯依・可憐と風守・中村。

風守は新任少尉で以前殴られた借りを返す為、数秒で叩きのめしてやると意気込み、中村は油断なく二体のナイトメアを見ていた。

ナイトメア開発研究スタッフは自信が有るのか、相手の陽炎が何秒持つか今日の夕食のオカズを賭けの対象としていた。

『それでは……………状況開始!』

CPの声に瞬時に動き出す風守と中村。

実戦を知らない新任少尉、そして実機起動初めてのナイトメア……幾ら篁中尉と言えどこれだけの不安要素があるなら、我々が隠れる必要は無いと楯を構えつつ前進した二人を驚愕が襲った。

「なっ速い! しかも障害物の壁をローラーみたいな物で走っているだ!?!」

可憐の舞鶴サザーランドは開始の合図と同時に、素早く移動し壁をローラーで走りながら風守達に迫る。

壁を走りながらこつちへ向かって来る舞鶴サザーランドに二人は突撃砲を構え撃とうとした瞬間、舞鶴は壁を蹴り反対側の壁へ移った。

「ちっ！ ちょこまかまと！」

反対側に突撃砲を向け撃った二人は有り得ない物を見た。

何と、何回も壁を蹴ったりスラッシュハーケンを撃ち、ジグザグとこつちへ向かいながら完璧にかわしていた。

そしてその異様な機動をしながら突撃砲を風守に向け撃ってきたのだ。

放たれるペイント弾が、正確に風守のコクピットを狙い撃った。

『風守機、コクピット大破』

「そんな馬鹿なッ!？」

中村はそんな風守の様子を横目に見つつ、自分の目の前に迫って来ている『紅蓮式』を見た。

「あんな機動しながら正確にコクピットに当てて来るとは、ちっ油断したつもりは無かったがな！」

中村はそう言いながら紅蓮式式の相手をした。

迫って来る紅蓮式式を突撃砲で狙う。

だが、唯依の乗る紅蓮式式は戦術機では考えられ無い程の動きで移動し、撃ってもあっさりと弾を避けていく。

「なめるなあー！ー！！」

そう叫び長刀に持ち替え接近戦を仕掛けるが、それをしゃがみ低い体勢で避けられ頭部を右手に掴まれて大破判定が出た。

「馬鹿なツ！？」

掴まれただけで大破する理由が判らなかつた中村は、思わず叫んでしまった。

だが紅蓮式式の右手には輻射波動がついているので当たり前の結果だった。

『中村機、輻射波動をくらい致命的損傷、大破です。状況終了』

CPの声が淡々と聞こえた。

風守と中村の二人は、たったこの数秒間に何が起きたのか直ぐに理解が追いつかなかつた。

そして、理解してきた瞬間に自分達のナイトメアへの認識の甘さ、訓練兵だと初機動だと舐めていた自分達の甘さを呪った。

「クソがッ！ 油断してなかつたら！」

「違う……真二お前も気付いているだろう？ 確かにナイトメアは十二分にすごい機体だ……だがその性能を引き出したのは間違いなくあの二人だ」

「くッ！」

こうして評価試験はナイトメアの圧倒的勝利で終わった。

ハンガーに戻ってきたナイトメアから唯依と可憐の二人が降りてきた。

その顔は笑顔で包まれていた。

「やったな可憐、見事な操縦だった」

「有り難う御座います！ でも、こんなにも上手く行くとは思いませんでした」

「だから言っただろう？ 我々が作ったナイトメアが負ける筈がないと、それに可憐の実力は斯衛にも匹敵するとも」

「はい！ 自信が付きました！ この結果なら翔君も喜んでくれますね」

これで少しでも翔の役に立てた事を可憐は喜んでいた。

「そうだな、これ以上無いくらいの戦果だ。だけど翔君なら無事に終わってくれて良かったと思っている筈だ」

そう苦笑しながら答えた。

「確かにそうですね、翔君優しいから」

可憐もそう言って笑って返した。

「だからこそ私達は、負ける事も怪我をする事すら出来無いぞ？」

そう笑って言った。

「了解です中尉！」

可憐も笑いながら敬礼した。

「いやあ、殿下素晴らしかったですな!!」

紅蓮が興奮した様子で殿下へ話し掛けた。

「ええそうですね、此れ程凄いとは思っていませんでした」

「あの壁を走ったり建物にスラッシュハーケンを撃ち込み、突撃砲を躲したり等機動が柔軟性があり独特でしたな」

「翔殿は今回の評価試験どう思いましたか？」

殿下は翔を抱き締め頭を撫でながら尋ねた。

『そうですね、相手がナイトメアを舐めていたのも有るでしょうが予想通りの結果でしたね。ナイトメアは乗る人が乗ればあのような機動ができます。ただやはりもう少し機動に鋭さと柔軟性が欲しいですね』

「翔殿が指導したのですか？」

『いえ、指導と言う程の事はしていません。ただローラーを使って壁を走ったりスラッシュハーケンは武器だけじゃなく移動にも使えると、簡単にアドバイスをしただけですよ。後はパイロットの技量とセンスです』

胸を張ってパイロットの二人の事を誇った。

「そうですね、この短期間であそこまでナイトメアに慣れるのは苦労があつたのでしょうか？」

『はい。二人共夜遅く迄シミュレータに乗っていましたが、紅月少尉は自分は新任少尉だからとかなり頑張っていました』

二人の努力は並大抵の物じゃ無かった。唯依は副長と言う事でやる事も大量に有るのに休憩時間を削ってまでシミュレータに乗り訓練をしていた。可憐は朝早くから乗り夜遅く迄自分の機動、武器の

使い方や換装と言った細かい所迄チェックし頑張っていた。だからこの短時間でも結果が出せたのだ。

「この結果と真耶さんが集めたデータが有れば一気にナイトメア開発は進みます。翔殿、武御雷はまだ試作量産機も完成していません。今見た結果から紅蓮式は武御雷より優れていると思われます。其処で翔殿に武御雷の代わりになる紅蓮式式の量産機をお願いしたいと思います。後翔殿には其の内に神楽耶殿に会って貰おうと思っています」

量産機と聞いて翔の頭の中に出てきたのは月下や暁に斬月だった。だけどそれより神楽耶に会う事に翔は驚いていた。

『僕も会うのですか?』

「ええ、今から会っておけば何かと役に立つ時が来るかも知れませんよ?」

殿下は微笑んでいた。

S i d e 翔

模擬戦から数時間後、僕達は殿下達と分かれて研究開発室へ帰って来ていました。

ナイトメア班のスタッフ達は、今日の模擬試験の成功を喜びお祝いをしています。

「やったわね翔君！ これでナイトメアの生産が一気に進むわね」

唯依姉さんが喜びながら僕に抱きついて来ます。

僕も笑顔で返事を返しました。

「篁中尉、私にも抱き締めさせてくださいー！」

そう言って可憐さんも抱きついてきます。

「翔君、これで少しは私役に立てたかな？」

可憐さんが抱きつきながら聞いてきました。

そんなの聞かれるまでもありません！

『当たり前です！可憐さんじゃなきゃ此処迄上手く行きませんでした。それに可憐さんは人一倍努力をしていたんですからその努力が報われたんですよ』

僕はそう言いながら可憐さんに抱きつき返した。

「皆此れからはナイトメア班は忙しくなるぞ？ ナイトメアやサクラダイトは斯衛から帝国軍果ては国連から外国に迄広がるだろうか
らな！」

巖谷中佐が嬉しそうに話していました。

「中佐！ もう国外にも販売するのですか？」

一人のスタッフが早くないか？ と思ひ質問をしていました。

「ナイトメアはまだ幾らか先だが、サクラダイトはかなり採掘出来るので外国にも販売する事になった」

やっぱりこつちの世界でも日本は有数のサクラダイト生産地だったみたいですよ。

「所でナイトメア班は此れからの方針は決まっているのかい？」

おじさんが色々食べ物や口突つ込んでいた僕に聞いてきました。

『今の所紅蓮式式の量産機と新型ナイトメアの開発を……後、サザールランド舞鶴の発展機も考えている所です』

「そうか、それはそれで楽しみだな！ 恐らく此れから篁中尉と紅月少尉はナイトメアで戦場に出る事になると思う、それは念頭に置いておいてくれ」

「了解しました！！」

『判りました』

戦場にナイトメアが出る事になるなら、僕は二人に出来るだけの事をするだけだと心に強く思った日でした。

8 ・模擬戦終了（後書き）

読んで下さって有り難う御座います！
それではまた！

9・皇 神楽耶(前書き)

遅くなりました・・・

9・皇 神楽耶

1997年9月12日

あの模擬戦から半年以上の時が流れ、今ではナイトメアは国内に徐々に広がって行った。

サクラダイトの方は大量にナイトメアの方は少量だけ世界に向けて輸出された。

可憐と唯依はナイトメアで戦場に出る様になり活躍もしていった。

各国はこのサクラダイトとナイトメアの性能に驚き、すぐさま日本から輸入を開始していた。

このサクラダイトの調査は世界各国で行われたが、日本の様に取れる場所は殆ど無かった。採掘が出来た場所が有っても少量といった結果に終わった。

日本はこのサクラダイトの輸出で、莫大な金額が流れ込む事となった。そのお金を使い新型ナイトメアや舞鶴サザナリの量産、新型戦艦の建設に回していった。

そしてその結果皇グループ現当主が翔に会いたいと殿下に話し、翔・唯依・可憐は皇 神楽耶に会う事になった。

こうして皇本邸にやって来た三人は直ぐに部屋へ通された。

「少々お待ちください、もう直ぐ神楽耶様がいらつしゃいます」

従者の様な人がそう言いお茶を置いて部屋を出て行った。

「まさかあの皇グループ現当主に呼ばれるとは思ってもしなかった」

唯依が驚いた様に話していた。

「そうですね、皇グループと言えば世界に影響を持つ国内最大の規模ですからね」

可憐も同意しながら話していた。

『やっぱりサクラダイトやエナジーファイラー、ユグドラシルドライブ機関にコアルミナス、果てはナイトメアを皇グループで販売して貰っているからかな?』

これだけの物を帝国の許可が必要とはいえ売ればかなり利益が出るので、その事で呼ばれたとしか思えないですね。

「かなり利益が出ているでしょうからね」

三人でそんな話を話していると、暫くして其処に静かに現れたのは前の世界と同じ姿の皇 神楽耶だった。

「お待たせしました、私が皇家当主皇 神楽耶です」

優雅に此方へ微笑みながら挨拶をしてきた。長く綺麗な黒髪に強い意志を秘めている瞳、その姿はまだ幼さを残し可愛らしい顔をしてはいるが、皇を統べる者として相応しい者だった。

『僕は神風 翔と申します。本日はお招きいただき有難う御座います』

「私は篁 唯依と申します」

「私は紅月 可憐と申します」

三人は挨拶を返した。

「本日は急な呼び出しにも関わらず有難う御座います、是非お礼とお話しをさせて貰いたいと思ひまして、殿下の方に無理を言つてしまいました」

「いえ、我々の方も色々と無理を言つたりしてしますので気にしないでください」

「だけど今日は翔殿にお会いできて光栄ですわ！ 翔殿の発見したサクラダイト、それをエナジーファイラーに加工し電気エネルギーを蓄え、それを高エネルギーに転化して扱う為のユグドラシルドライブ機関とコアルミナス、そしてナイトメア！ 此れからの日本を、いえ世界を変えていく物を造り出す翔殿に是非お会いしたかったです」

『有難う御座います。此方も皇重工等のおかげで研究開発費等も増えて助かっています。それに此方も殿下からも色々とお話を聞かせて貰つて会いたいと思つていました』

翔は笑顔で神楽耶に言った。

「まあ！ そうでしたか！ お役に立てて良かったですわ！ それから翔殿に二つプレゼントが有りますの」

彼女はそう言うと言を二回鳴らした、すると従者が襖を開けて入つて来た。

「実は翔殿が体が不自由で声も出ないと聞いていました。ですのでこの車椅子をプレゼントしようかと思ひまして」

運ばれて来た車椅子を見ると、自動で走れる様に色々な機械
が取り付けられていた。

『いいのですか？』

「はい、是非お使いください」

S i d e 翔

どうしよう……前に使おうとしたら唯依姉さんには「私が手を握って支えてあげるから」と言って使わなくてもいいと言われ、可憐さんには「私が抱っこして運んであげる」と言われ使えなくなりました。しかし此処で貰わ無いなんて事は出来無いので、有り難く貰っておきましょう。今も誰かのサポート無しでは張ってでしか移動出来無いので、有れば役に立ちます。

S i d e O u t

『有難う御座います。大切にに使わせて貰います』

「ふふ、それにしても本当に私より年下の子供がナイトメアを作ったなんて信じられませんか」

「お言葉ですが翔君は子供ですが作ったのは事実です」

唯依がただの子供と言われているようで反論した。

「そうです！ 翔君が作ったナイトメアは戦術機より凄いです！」

可憐も一緒になって反論していた。今の自分があるのは翔のおかげだと思っている可憐は翔に心酔していた。

「御免なさい、別に馬鹿にしたとかではないんです。ただ実際聞くのと目にするのでは違うと思ったのです」

「いえ、此方もムキになりました」

「翔殿は愛されているんですね」

唯依と可憐に微笑みながら言った。

「それは当たり前です！ 弟は私が守るんです！」

「私だつて守ります！私に未来をくれたんですから！」

可憐も唯依に負けずに言い放った。

翔だけは恥ずかしそうに顔を伏せていた。

「それでは二つ目のプレゼントの話ですが、頼まれていたナイトメア蒼月をお渡しします」

「蒼月？」

可憐だけは分からずに首を捻っていた。

『以前可憐さんに紅蓮二式にいずれ乗って貰うと言っていたじゃないですか？ それでこの蒼月を唯依姉さんに乗って貰って、紅蓮二式は可憐さんに乗って貰おうと思っていたのです。本当はうちの方で造りたかったのですが他の物を造っている最中で無理だったので此方へ頼んだんです。でも完成迄まだ先だと思っていたので吃驚しました』

「ふふ、だからプレゼントですわ。それに私共も機密の塊である蒼月の開発に携われたおかげで開発スタッフのやる気が出ています。私共も依頼してもらえてありがたいですわ。それに機密は必ず漏らす事はないので安心してください」

「本当にツ！？ 私も紅蓮二式に乗れるんですね！」

可憐は自分も遂に認められたと思いい心から喜んでいた。

それから暫く他愛ない話しをし此れからの話をする事になった。

「それではこれから皇重工の話しをさせてもらいます。そちらと共同で作っていた舞鶴サザラン発展機、日本名は紫炎、別名グロースターも試作型は完成しました。こちらのテストは斯衛と帝国軍にやって貰うと言っ事ことでよろしいでしょうか？」

『はい、それをお願いします』

グロースターが完成しました！
紫炎は舞鶴の発展機として作ったもので、特に特徴を言えば舞鶴サザilandよりも運動性が高く、武器には切る事も刺す事も出来るランスがあります。帝国軍で舞鶴サザilandを率いる機体として紫炎グロースターを使って貰うつもりです！今の所は撃震と不知火が帝国軍で多く使われていますが、ナイトメアも徐々に広がっています！紫炎グロースターなら不知火近く迄スペックが届く筈です！

此処数ヶ月で一気に開発ペースが進んでいます！
皇重工の生産開発力は凄いです！

本当は紅蓮二式の量産機月下や暁、斬月を作りたいのですが、今はナイトメアを広めるのが先なので安価な紫炎グロースターを作りました。

出来るだけ早く配備したいです。

「そうですか、翔殿本日は有難う御座いました。とても有意義で楽しかったです、篁殿、紅月殿、翔殿またお会いしましょう」

こうして神楽耶さんの会談は終わりました。

9・皇 神楽耶(後書き)

如何だったでしょう？

10・各国の動き1（前書き）

今回は各国の動きです。ナイトメアをどう思っているかを書きました。

10・各国の動き1

米国のとある一室で、日本の事について話し合われていた。

その部屋には米国の軍関係者だけではなく、政治家や経済界の人物、富豪にCIAと米国の中でも国を動かす立場の人間が集まっていた。

「くそつ！ 皇 神楽耶め！ 奴のせいでサクラダイトと言うレアメタルを満足に買う事が出来ん！」

今、日本はサクラダイトをアメリカの企業に少量しか輸出していなかった。それはアメリカが無理矢理サクラダイトを安く買おうとしたり、ナイトメアの機密等を日米安保条約を盾にしてきたりと、余りにも無茶をやるため神楽耶が色々と裏で手を回していた。

「其れだけでは無いぞ！ あのナイトメア・フレイムと言う兵器に各国が興味を持ち始めている！ 調べた結果サクラダイトの超伝導を利用した兵器で性能も高い！ 既にナイトメア・フレイムを輸入している国々では皇重工にライセンス契約を持ちかけているとの話も上がっている！ このままでは我が国の戦術機や兵器業界は大打撃を受けるぞ！」

米国ではBETA戦後を睨んで行動している為、米国で開発した戦術機が世界で売れなくなってしまうては困るのだ。

「国連を通じて圧力を掛けては？」

「いや無理だ……全て国としての事業なら何とか横槍も出来たかも

知れ無いが、相手は皇重工の皇 神楽耶だ。皇グループは世界に高い影響力を持つている。サクラダイトの時の様に無理に干渉したら前以上に此方が手痛い傷を負う事になりかねん」

未だにサクラダイトの時に無理矢理干渉して、輸入を少量しか出来なくなつた事を後悔していた。各部署や企業からは其の事で苦情が来たり研究が出来ないと散々な結果だったからだ。

「くつならばどうする!？」

「我々の兵器が世界一と言う事を認めさせればいいのだ」

「だがそれをどうやると言うのだ!」

「今大陸の方では中華連邦の統一中華戦線や大東亜連合が劣勢に立たされている。恐らく撤退しなければならなくなるだろう。この時に我々が色々と借りを作ればいいのだよ」

共産党と国民党が合わさって出来た中華連邦は表面上でしか手を繋いでおらず、足の引つ張り合いが多い。特に官僚集団である大宦官のせいで戦場で戦っている統一中華戦線は劣勢に立たされており、大東亜連合はそれに巻き込まれている形だった。

「そうだな。その様に進めていこう」

「全ては我々アメリカの為に」

「『『『『アメリカの為に!』』』』」

こうして裏では米国の暗躍は始まり出した。

国連の研究室では、一人の天才科学者が笑い声をあげていた。

「アーハツハツハツハツハツハツ！ 米国の奴らいいざまね！ あの皇 神楽耶に何のアドバンテージも得ていないのに無理に手を出すからしてやられるのよ！」

此れでもかと言う程香月　夕呼は笑っていた。

「其れにしてもこのサクラダイトにナイトメア……サクラダイトは超伝導物質でナイトメア・フレームの動力や駆動系に使われているね。こんな物を最近発掘していきなり兵器や動力に使うかしら？ どうにも府に落ちないわね……」

夕呼の手元にはサクラダイトやナイトメアについて調べられた資料があった。その資料の中には勿論発見開発者の名前も載っていた。

「開発したのは神風　翔と言う名の子供ね。私と同じ天才の部類に入るのかも知れないけれど、開発過程が見えないのが気になるわね……普通はどんな物にも完成されるまでには過程が必ず存在しているのだから。まあどちらにせよオルタネイティブ？の為に欲しい人材なのは確かね、何とかして引き抜けないかしら？」

何とかして接触したいわね、ふふふ！　楽しくなって来たわ！

翔は知らぬ間に極東の魔女に目をつけられる事になった。

大東亜連合の戦術機関開発研究室では、ナイトメアについて話しあわれていた。

「凄いわね、この舞鶴サザランドって機体、今迄の戦術機と違ってこのナイトメアは整備や補給が断トツにし易くなっているし、サバイバルコクピット機構は兵士の命が助かる確率がぐんと上がるわあ」

褐色肌で髪は金髪、口には煙管を吹かしている綺麗な女性がナイトメアを見ながら喋っていた。

「ラクシャータ博士、ナイトメアの解析はどうなっている？」

大東亜連合の高官の一人がナイトメアについて尋ねてきた。

その言葉にラクシャータは楽しそうに話した。

「そうねえ、第二世代戦術機より性能は上ね、それに肝心な所はブ

ラククボックスになっっているから日本に直接聞いた方が早いわ」

大東亜連合に売られたナイトメアにはブラックボックスが存在していた。これは試験機として売られたので契約前に技術漏洩を防ぐ目的もあつた。

「やはりそうか……戦場で何機か使わせて見たが導入して欲しいとの声が高くてな、此れなら日本と話し合ってみるか」

戦場ではナイトメアの導入の声が高まっていた。それはコクピット機構が戦術機よりも命が助かりやすい事や、操作の仕方が戦術機よりも扱いやすい為、訓練兵の訓練時間が減らせて戦場に人員を補給しやすい等メリットが沢山あつた。

「日本とは軍事同盟結んでいましたよね？」

ラクシャータがいきなりそんな事を聞いてきた。

「ああ、確かに結んでいるが？」

不思議そうに高官が聞き返した。

「なら私をナイトメアの開発した所へ派遣出来ませんかあ〜？そうすれば問題無い技術は此方に送る事が出来ると思うんですけど？」

それを聞いた高官は確かにそれ魅力的だと思ったが、ラクシャータ博士がいなくなつては戦術機の改修開発が遅くなる危惧もあつた。

高官が悩んでいると……

「今の内じゃないと後手に回る事になると思いますよ〜?」

「どう言う事だ?」

「そのままの意味ですよ。何れナイトメアは世界に広まると思われます。此処で我々が色々と手を打っておけば後々他国より有利になりますよ〜?」

それを聞いた高官は其の場でラクシャータの派遣を決めた。

暫くして高官と話し終えたラクシャータは上手くいったと心の中で笑っていた。

自分の研究意欲が疼いて堪らない程にナイトメアは魅力に溢れていた。

「此れから楽しみね〜」

今迄に無い程ラクシャータは浮かれていた。

S i d e 翔

仕事から帰って来た僕と唯依姉さんの二人はお風呂に入っている所です。

「ふう〜気持ちいいわね翔君？」

コクコクと頷きながら返事をした。

お風呂はいいのですが一緒に入るのはやっぱり慣れないです……

「翔君の肌スルスベね、それに抱き締めると落ち着く」

恥ずかしくなって顔を赤くしアワアワしていると、面白がって余計に強く抱き締めてきました。

「髪長いわね」

ん？ ああ確かに長いですね。でも前にハサミでバッサリと切ろうとしたら、唯依姉さんと可憐さんに烈火の如く怒られました。あれは恐かったです……洒落にならなかったです、「どうしてこんなに綺麗な髪を切るの！」と二人で言ってきて大変でした。

唯依姉さんが僕の髪を弄りながら「あっそうだ！」と言い出してきました。

どうしたの？ と首を唯依姉さんの方に向けた。

「さつき開発スタッフから連絡が有ってね、アウアロン高天原が12月中に完成させる事が出来そうって言っていたわ」

今年中に出来ますか！ アウアロン高天原があれば僕も戦場に行って手伝えるかも知れないです！

「其れにしても凄いわね、この『フロートシステム』は飛行能力を有する上に空中で静止も可能だし、この『ブレイズルミナス』は理論上レーザー級の攻撃にも耐えられるって話だし、『ハドロン砲』に至っては荷粒子砲なんてとんでもない兵器みたいだし」

でも今の技術力じゃまだ小型化してナイトメアに付ける事が出来ないです。何とかしたいのですが此ればかりはどうしようもありません。僕は設計は出来ますが部品迄作れる訳じゃありません。部品が作れる様に皇重工には頑張ってもらいたいです！

「此れらを小型化してナイトメアに付ける事が出来たら、BETAを駆逐する事も夢じゃないわね」

唯依姉さんはこつちを見て微笑んでいました。

『……ゆい……ま……』

「ん？ 何々？ 唯依姉さんを守る？」

唯依姉さんはずっと一緒にいるため徐々にクチパクでも分かるようになっっていました。

「ありがとう。けど絶対無理をしないで、そばに居てくれれば私は嬉しいんだから」

どちらとももう真の意味で家族が死んでいる為、新しく出来た家族が何より大切になっていました。

こつちして平和な一時は過ぎて行きました。

S i d e O u t

10・各国の動き1（後書き）

全部の国ではないですか其の内他の国も・・・書けたらいいな
それに色々と書きたい事があつて纏めるのが大変です。
なので文才が欲しい今日この頃・・・
アイディア募集です！

11・ナイトメア開発局

1997年12月13日

第一開発局にナイトメア班と開発局の局員が集まっていた。

そこで巖谷中佐が皆の前で辞令を読み上げた。

「翔君新しく辞令が降りた、本日を持って神風 翔中尉はナイトメアとサクラダイトの功績により大尉に昇進するものとする！ それとナイトメア班は第一開発局所属ではなく、ナイトメア開発局へ昇格する事になった、おめでとう！」

翔はまさか大尉になってナイトメア班が開発局にまで昇格する事になるなんて思いもしていなかった。それに開発局になる事で今迄と何が変わる事があるのかと翔は首を傾けていた。

『有難う御座います。でもナイトメア開発局に昇格して今迄と何か変わるんでしょうか？』

首を傾けながら聞いてみた。

「そうだな、まずこのナイトメア開発局は斯衛軍、帝国軍と双方の思惑で出来たと思ってくれていい。その為局になった事で研究開発資金が今迄よりも多くなるのと、ナイトメア専用の開発部隊を持つ事が出来る。この部隊はナイトメア専用の開発衛士を独自に徴用する事が出来る。斯衛軍、帝国軍構わずにな。それと殿下からナイトメア専門の開発衛士に限り、将軍色以外の色は使っていないそうだ。後は今ナイトメア班には篁中尉と紅月少尉しか部隊にはいないが、

これから独自に増やしてていつて構わない。それと部隊名を考えておいてくれ」

巖谷中佐が言い終わると入り口の方から女の人の声が聞こえてきた。

「どうも〜本日より此方でお世話になる事になったラクシャータ・チャウラーって言うんですけど」

そこには白衣を纏い褐色肌で胸元を開けて色っぽい雰囲気を持ち、長い金髪に煙管を口に咥えている女性が居た。

「おお、君がそうか丁度ナイトメア班の皆に辞令を発表してたところだ。君の事はまだ説明していない君自身でするといい」

そう言い終わるとラクシャータに場所を譲った。

「ええ〜大東亜連合よりナイトメア開発局？ に出向してきたラクシャータ・チャウラーよ。今日から宜しく〜」

何とも軽い調子で皆に挨拶をした。

S i d e
翔

……ラクシャータさんです！ まさかナイトメア開発局に来るとは思ってもいませんでした。僕に色々と教えてくれた師匠とも呼べる人とまた会えるとは……でも僕の世界と本当に姿が変わりません！ 懐かしくて泣きそうです……

「「「宜しくお願いします」「」「」

局員皆で挨拶を返しました。

「それでは翔君とナイトメア開発局の人達は新しい部屋へ引っ越し
てくれ。後はそちらで詳しい事をやってくれ」

おじさんはそう言って部屋を出て行きました。

「それじゃ皆引っ越しの準備をしてくれ。可憐とラクシャータは私と一緒に新しい部屋の方で準備だ」

こうして第一開発局からナイトメア開発局への引っ越しが始まりました。

S i d e O u t

引越しが終わって一休みしながらこれからの事を話し合っていた。

「改めて自己紹介するわ。私はラクシャータ・チャウラーよ。貴方がサクラダイトの発見やナイトメアの開発をした神風 翔？」

ラクシャータはソファーに座りくつろぎながら煙管を吹かし聞いてきた。

「そうです、僕がサクラダイトの発見やナイトメアの開発をしました」

パソコンに文字を打って見せてきたのを不思議に思ったのか、ラクシャータは困惑した顔を見せた。

「もしかしてあなた声が出せないのかしら？ さつき篁中尉に手を引かれて歩いていたのを見ると体も不自由なのかしら？」

そこに唯依が話しに入ってきた。

「そうだ翔君は体が不自由なんだ、だからこのナイトメア開発局に居る人達皆で翔君の手助けをしている、貴女にそれが出来ないのなら他の部署へ行ってもらう」

唯依がきつい言葉でラクシャータに問いただした。

「そのくらい大丈夫よ。それに私はナイトメアとそれを開発した翔君にも興味があるしね、後昔戦術機開発する前は医療に携わってい

「だから役に立つわよ？」

自信満々に皆に言っただけで聞かせた。

「そうか、ならこれから宜しく頼むラクシャータ」

唯依は手を差し出しラクシャータと握手を交わした。

「それにしてもナイトメアを初めて見た時は驚いたわ。今迄の戦術機と違って考え方が全く違って面白かったわ。それにこっちは舞鶴サザーランドよりも凄い機体があるって聞いていたから今から楽しみなのよ」

『紅蓮二式や蒼月の事かな？ それなら丁度高天原アウアロンの所へ行くつもりでしたから一緒に格納庫に行きますか？』

「いいの！？ こう言っちゃ何だけど私はまだ大東亜連合から出向してきたばかりだから、当分最新の機体は見たり弄ったり出来ないと思っただけ」

翔のその言葉に吃驚したのかソファアから勢いよく立ち上がって翔の顔に自分の顔を近づけていた。

『紅蓮二式や蒼月は既に戦場で戦って色々な国も見ているので、其処迄気にする事はないですね。それにラクシャータさんがこっちに協力してくれる代わりに他の国より優先的に大東亜連合に技術を渡す事になっているので、無理して関係を悪化をさせる事なんてしないでしょっ？』

「ええその通りね。私はナイトメアの研究がしたいからこっちに来

たようなものだから無理するつもりはないわあ」

自分の考えを読まれていた事にラクシャータは苦笑した。

しかしラクシャータの考えを読めたのは翔にとっては当たり前だった。以前の世界では黒の騎士団時代からラクシャータと共に研究をし、其処から黒の騎士団を離脱しルルーシュやロイド、セシルにスザクと共に世界を統一し、ルルーシュが死んだからはまたラクシャータやロイドと共に研究して過ごしていたのだ。だからラクシャータが研究したいと思う物の傍にいたいと思っっているのは直ぐにわかった。だから無理して機密を送って研究出来なくなるような馬鹿な真似はしないと翔には分かっていた。

「なるほど、それじゃ行きましようか翔君、可憐、ラクシャータ」

四人で格納庫に向かった。

格納庫へ着くとラクシャータは興味深そうな目をしながら紅蓮二式を見つめていた。

「翔君、あれの詳しいデータとかがって見せて貰えるの？」

『いいですよ、今画面にデータを出しますね』

翔がパソコンにデータを表示するとラクシャータは目を細め真剣な目をして画面を見つめていた。

データを見ながら疑問が有る所は質問をし、紅蓮二式を解析していった。だが一番の特徴である放射波動機構の事になると目の色を変えていった。

ラクシャータにとってこの様な兵器は初めて見たし、実現出来ている事に驚きを隠せないでいた。

「この放射波動凄いわ、収束して貫通力を高めて放つたり、拡散して広範囲に放つ事も出来て汎用性も高いみたいだし量産したら他国を圧倒出来るわよ？」

『この紅蓮二式と蒼月の一番の特徴ですからね、量産機には此れ程の輻射波動機構は付ける事は出来ませんが、収束だけ出来る輻射波動や、拡散だけの輻射波動なら出来ると思いますよ』

この話を聞いてラクシャータは何れアメリカの属国的立場を離れ、日本独自で自国を防衛出来る様になると確信をした。

『ラクシャータさんには紅蓮二式量産機である月下の開発を手伝って貰いたいと思っています。それに何かラクシャータさん独自の意見や提案があつたら言ってください』

「了解よ〜ここでなら新しい物を生み出そうで今から楽しみだわ」

ラクシャータは此れから自分が関わるであろうナイトメアの事で頭が一杯になっていた。

「それじゃ翔君、ラクシャータへの説明が終わつたし高天原の所へ行きましようか」

唯依に言われ皆で高天原の区画へ向つた。

アウアロン
高天原の区画へ向かう途中にラクシャータから唯依と可憐は質問を受けていた。

「そう言えば唯依ちゃんと可憐ちゃんはその紅蓮二式と蒼月を使いこなしているんでしょう？」

「唯依ちゃん……まあいい、確かに紅蓮二式は使いこなしてはいるがそれがどうかしたか？」

唯依は不思議そうに問い返した。

「うんさつき紅蓮二式と蒼月のデータを見せて貰ったじゃない？あの二体のスペックを引き出すとなると並大抵じゃ無理だと思っ
ね」

「成る程……ラクシャータさん、私と篁中尉は翔君に言われて特別訓練等を紅蓮二式に乗る為の訓練をしていたんです。だから引き出す事が出来るんですよ」

「いや其れだけじゃない、あの二体に乗るにはエースクラスの实力と徹底的な基礎が必要となってくる。其れらが揃い特別訓練を受けて初めてスペック全てを出し切る事が出来るんだ」

唯依の話しを聞いてラクシャータは成る程と納得していた。あれだけの機体を普通の一般兵が乗る事が出来たら誰も苦労などしないだろうと思っていたからだ。

アヴァロン
高天原の開発区画に到着したら翔と唯依以外の全員が驚いていた。目の前には巨大戦艦が鎮座していたのだから。

「これが高天原……確か理想郷と言う意味があったかしら……」

ラクシャータはそう呟き驚きのあまり煙管を手から落としそうになり、可憐は目を輝かせていた。

『そうです、此れが僕達の部隊である十二の剣の旗艦アヴァロン、日本名は高天原になります』
ナイト・オブ・ラウンス

「十二の剣……其れが私達の部隊で高天原がその旗艦」
アヴァロン

『これが高天原のデータです、お二人共これを見て下さい』
アヴァロン

翔はそう言って高天原のデータを可憐とラクシャータに見せた。

「とんでもないわね」フロートシステムにブレイズルミナス、果て

はハドロン砲……この高天原アウアロンと紅蓮二式に蒼月があればBETA何
てどうとでもなりそうじゃない？」

「本当に凄い！ これなら翔君も戦場に出て来ても安全だし誰にも
負けないわ！」

来月には可憐のセリフ通りになる事になりこの高天原アウアロン、紅蓮二式、
蒼月ナイト・オブ・ラウンスと十二の剣の名前が世界に響き渡る事になる。

11 ナイトメア開発局（後書き）

次回は戦闘に入りたいと思っています！
何時も通りアイディア募集してます！

12 光州作戦1 (前書き)

お気に入りか2000件突破しました！有難う御座います！

12・光州作戦1

1998年1月5日

日本は朝鮮半島南東部に於ける国連軍と大東亜連合軍の撤退支援を目的とした、日本帝国軍と統一中華戦線による共同作戦光州作戦を開始した。

この作戦には帝国軍は勿論斯衛軍も参加する事になり、ナイトメア開発局にも光州作戦への参加命令が来ていた。

翔達は色々と特殊な立場の為、日本帝国軍とは別で独自の判断で行動が出来る様に独立部隊として殿下に認められた。

こうして翔達は朝鮮半島へ向った。

(あれがBETA……)

翔達が作戦域に着いた時にはもう既に戦闘が開始されていて、翔は初めてBETAを直接見る事になった。

直接見ると余りの醜さと数量に翔は顔を青くし圧倒されそうになっていた。

「翔君大丈夫？」

唯依が戦場を初めて見た翔を心配して聞いてきた。

「大丈夫です……ちょっと吃驚しただけです」

翔は自分で無理していると分かっているにもかかわらず苦笑しながらそう答えた。

「翔君心配しなくても大丈夫よ！ この高天原アツアロンに攻撃出来るのは光線級位しか居ないし、レーザーを撃たれてもブレイズルミナスで防ぐ事が出来るじゃない！ 何より私と篁中尉が守るから！」

実際可憐は心配等していなかった。今迄唯依と可憐はナイトメアの性能評価の為に何度も大陸の方でBETAと戦っていたが、紅蓮二式と蒼月は何の問題もなくBETAを屠る事が出来ていた。その上今回は高天原アウアロンと言う旗艦がハドロン砲等で援護もしてくれる。これ以上の物はないと可憐は思っていた。

これから僕達はあの戦場に飛び込むのだから確りしないと……

そう思い周りを見てみると皆緊張しています！　って言っても唯依姉さんと可憐さん、ラクシャータさんはそんな感じはしないですが……

でもこれなら大丈夫そうですね、さあナイト・オブ・ラウンス十二の剣の初陣です！

『これより我々は国連軍と大東亜連合軍の撤退支援に入ります！
ナイト・オブ・ラウンス十二の剣の二人はナイトメアで遊撃を頼みます！』

「了解！」

唯依姉さんと可憐さんは綺麗な敬礼をしてブリッチチを出て行きま
した。

不安が無いと言えは嘘になりますが紅蓮二式にアヴァロン蒼月、高天原の性能を全て出し切れたら此れぐらいの戦場は切り抜けられるはずです！

今モニターにはBETAと戦っている国連軍や大東亜連合軍、帝国軍に統一中華と色々な国の戦術機や少数だけ出荷したナイトメア等が入り乱れて戦っています。

「翔君、唯依ちゃんと可憐ちゃんの準備も整ったみたいよ」

ラクシャータさんが此方に顔を向けて報告をしてくれました。

『では、アヴァロン高天原を前戦へ発進させてください』

「了解！」

スタッフが一齐に返事をして高天原アウアロンを発進させました。

Side Out

現在帝国軍は進行してくるBETAを、この場で私に防衛する事が命じられていた。

『と、藤堂中佐、増援はまだ来ないのですか！？』

「馬鹿者っ！ 何処の部隊もギリギリで厳しいのだ！ 俺達だけで全滅させるつもりでかかれ！」

中隊の年若い少尉の言葉に叱責し返すのは帝国軍にこの人ありと言われ『帝国の剣』の異名を持つ藤堂 鏡志朗中佐。あらゆる戦いでBETAと戦い大陸戦では敗走を続ける帝国軍の中にあつて、唯一侵攻してきたBETAを撃退した現代の侍。

『しかし中佐このまま増援がなければかなりマズイですよ……』

『何を弱気になっているト部！ 我ら四聖剣に断てぬ物などない！』

『千葉さーん、そう言いたいのは分かりますけど本当にこのままじやばいですって』

『やめんかお主等！ 朝比奈も今は目の前のBETAを殲滅せんか！』

窘める様に四聖剣の三人に通信を繋いできたのは仙波中尉。

この四人は常に藤堂中佐と共に戦場を駆けて、その連携の高さから四聖剣と呼ばれ常に激戦区で戦い結果を残してきたが、今回は流石に分が悪すぎた……

『CPよりソード中隊・クラッシュ小隊へ。新たなBETAが現在そちらへと進行中！ 接敵予想時間は約400秒後』

「来たぞ！ 全機鎚吉型ハンマーヘッド・ワンで隊列を組め！ 俺が先行する！」

藤堂の命令で藤堂と四聖剣の乗る不知火や撃震改修機五月雨が広がり、突撃砲を構える。

『突撃級と要撃級合わせて700要塞級は5、接敵迄時間残り150秒後』

「全機聞いたな！ 二機連携エレメントを絶対に崩すなよ！ ……………攻撃開始！」

『承知！』『了解！』

藤堂の号令で不知火と五月雨が展開し、此方を押し潰そうとする突撃級を迎え撃つ。

散発的に突撃してくる突撃級を避け、弱点である背面等を狙い撃ち数を減らしてはいくものの、そこへ要撃級と要塞級が押し寄せてくる。

「ちっこの程度!!」

背後に迫っていた要撃級を長刀で切り飛ばし、突撃砲に切り替え要塞級を沈めていった。

押し寄せる要撃級には四聖剣が一斉に突撃砲をお見舞いした。

『中佐！ 右後方に！』

「くっ!?!」

もう駄目かと思われた所に一体の斯衛軍専用機である端鶴が、突撃級に突撃砲を撃ち込んで難を逃れた。

「済まない助かった。私は帝国軍所属藤堂 鏡志朗中佐だそちらは？」

『こちらは帝国斯衛軍所属枢木 朱雀少尉です！ 此方の援護に来ました！』

コクピットには少年と呼ぶに相応しい姿で、くせ毛の栗色の髪が見え決して硬さや酷い緊張感はない。静かな表情を浮かべている。

「そうか、しかし君だけか？」

話しながらもBETAを屠って行く二人は中々の連携が既に取れていた。

『はい……此方に来る途中に他の三機はやられました……済みません』

「いや君だけでも来てくれて助かった。これからは私の指揮下に入ってくれ」

『了解！』

『へえ、白の斯衛か期待し……！？』

『朝比奈！ 下がれ！』

『おつと!』

千葉機の支援突撃砲から放たれた砲弾が、朝比奈の横合いから迫る要撃級を撃ち抜く。

『ごめん千葉さん!』

『まったく、もう少し確りしろよ? それともう少し下がれ、援護が届かなくなる』

溜息を吐きながら迫る突撃級と要撃級を撃ち抜いて行く千葉。

何とか藤堂達ソード中隊は戦えていたが、クラッシュ小隊の何機かが突撃級に粉碎されていた。

『だっ誰か助けっ……!?!? がっい、いやだあああああっ!』

『ひっ!? たすけ……!?!?』

藤堂達が回線に響いて来た悲鳴に視線を向けて見れば、五月雨がまた一体と要撃級の餌食になっていた。何機かはコクピット機構で脱出出来ていたがやはり脱出出来なかった者も多数いた。

『くっ………CP! 応援はまだ来れないのか! せめて支援砲撃でもないとっ!』

『こちらCP、残念ながら応援は到着していない。繰り返す、応援は……えっ!? 了解! こちらCP、そちらに応援が行った。応援に行った部隊の指揮下に入り敵を殲滅しろ! 繰り返す、応援に行った部隊の指揮下に入り敵を殲滅しろ!』

最初応援は無いと伝えてくるCPに四聖剣達は苛立ち齒を軋ませるが、その後の方でCPの方が動揺し応援が来ると言い出した事に藤堂達は驚いた。

「これは帝国軍の増援か？」

『藤堂中佐！ この増援はナイトメア開発局のマーカ―です！』

『だが増援のマーカ―数はたった二機の機体と支援機だけか！？』

千葉が怒った様な声で怒鳴り散らす。

『確かにこれだけじゃ殆ど意味ないね』

朝比奈も同意しながら要撃級を切り倒していた。

たったこれだけの増援なんかで大隊規模や連隊規模のBETAを殲滅出来るかと、しかし千葉達の怒りは直ぐに消える事になる。

12 光州作戦1 (後書き)

次回は主人公達が参戦です！
アイディア募集します！

13 光州作戦2（前書き）

この作品を見て不快感や自分のマブラヴの世界観が壊れるのが嫌だ
と言う人は今すぐ戻ってください。

13・光州作戦2

クラツシュ小隊も全滅し絶体絶命のピンチを迎えていた藤堂達にある通信が入ってきた。

『ナイト・オブ・ラウンス アウアロンこちら十二の剣旗艦高天原。これより支援攻撃を開始する。全機射線上より退避せよ。繰り返す、これより支援攻撃を開始する。全機射線上より退避せよ』

戦っている最中に突如割り込んできた回線からの言葉に、藤堂達は返事を返すより先に回避行動を行い、後方に浮かんでいる巨大艦の方からレーザー砲が放たれた。

「……なっ!?!」

藤堂達は余りの出来事に固まり驚いていた。

まるでBETAの光線級以上のレーザーが空中に浮遊している艦から放たれていたのだから。しかもそのレーザーは突撃級や要撃級を一瞬にして葬り去っていた。

さらに生き残ったBETAに、アウアロン高天原から小型ミサイルが降り注ぎ粉々に消し飛ばす。

呆然とする藤堂や四聖剣、朱雀や中隊達の機体の上を通過した二機のナイトメアが、駆動音を響かせながら着地する。

「あの機体は!」

藤堂は思いもしなかった機体が目の前に現れ驚愕していた。

『藤堂中佐！　もしかしてあの機体は以前大陸の戦場で物凄い戦果を挙げた機体では！？』

「ああ、間違い無い。まさか此処に現れるとは思ってもいなかったがな」

『こちら帝国斯衛軍ナイトメア開発局所属十二の剣、ナイト・オブ・ラウンスこれより戦闘行動を開始する』

目の前に現れた二機は、蒼い配色と赤い配色が施された機体。

二機の手は普通とは違って初めて見る物は、その紅蓮二式の異様な右手と蒼月の異様な左手に興味を抱いた。

この二機はそれだけではなく長刀や突撃砲、他にも肩部装甲ブロツクや両足にも何かの武装と思われる物がついていた。

目の前の二機は凄いスピードでBETAを翻弄し、長刀や突撃砲で屠っていった。

「おい！　そちらの旗艦！　下がれ！　光線級がいるぞ！？」

藤堂は慌てて声をかけた。

無防備に前線に飛んでいく高天原アヴァロンに光線級のレーザーが目前まで迫る。

レーザー照射警報に、誰もが高天原アヴァロンの撃墜を感じた次の瞬間、藤

堂達は信じられないモノを目撃する事になる。

アウアロン
高天原に向かつていったレーザーは当たると思われた瞬間、緑色の透明ガラスの様な壁に当たりレーザーを防ぎきっていた。

「……………なっ!?」「……………」

これには見ていた全員が口を開けて驚いた。

今まで何処の国もが光線級のレーザーに悩まされ何も対処できないで来た。出来た事はいち早く光線級を倒す事だけだった。それが今日の前で正面から防ぎきった戦艦が存在した。

光線級のレーザー照射までのインターバルは、ルクスの方で約12秒、重光線級であるマグヌスルクスで36秒。

つまり、約10秒間の自由飛行時間が生まれる。

「可憐、今のうちに光線級を優先で叩くぞ!」

『了解!』

ナイト・オブ・ラウンズ
十二の剣の二機は光線級のいる方向に紅蓮二式は右手を蒼月は左手を向けた。

「可憐! 私が拡散輻射波動で雑魚共を一掃する! 光線級は頼むぞ!」

『了解!』

言い終わると蒼い機体の左手からから赤いレーザーの様な物が広範囲に発射された。

「消え去れ！」

その言葉通りに光線級の前に壁になっていたBETA達は一瞬にして消し飛んでいった。

『弾けるBETA！』

今度は赤い機体の右手からさっきの蒼い機体から放たれた物と同じような物が収束されて放たれた。

さっき放たれた物より範囲は狭いが威力はさっきよりも高く、地面を削りながら光線級を一瞬で消滅させた。

「ソード中隊、私達と残りのBETAを叩くぞ！」

そう言われ藤堂達は一斉に残りのBETAへ向かっていった。

『CPより各機へ。周辺に残存BETAは確認できません。ラウンズ・ソード両隊は警戒しつつ撤収準備に移ってください』

CPからの通信を聞きつつ、周囲を見回す唯依と可憐の蒼月と紅蓮二式。

要塞級の死骸の上に立ち背中合わせに並び立つ赤と蒼の二機の姿に、英雄の幻想を見る者も多かった。

「ソード中隊、此方ラウンズ1、そちらの被害は？」

『戦えるのは枢木少尉くらいだ。ソード中隊は半分以上がやられ残った者達も燃料と武器がギリギリでこれ以上の戦闘は不可能だ』

「了解した。それなら枢木少尉以外はそのまま基地へ後退してくれ」
『了解した』

通信を切断すると、基地へと撤退していくソード中隊。

「枢木少尉はこのまま此方の指示にしたがってくれ」

『了解しました』

撤退していくソード中隊を見ながらも警戒を解かない唯依と可憐。

前に戦闘が終わったと思われた時にBETAが地下から現れた事があった、そのためソード中隊がきちんと撤退が完了するまでここに残っていた。

「こちらラウンズ1、高天原アヴァロンにこれより帰還する！ その際一機連れて帰りたい、許可を」

『了解した、直ちに高天原アヴァロンへ帰還してください』

「よし！ ソード中隊は撤退完了したな、我々も高天原アヴァロンへ帰還するぞ」

「神風大尉、ナイト・オブ・ラウンス十二の剣ただいま帰還しました」

唯依と可憐アヴァロンが高天原のブリッジで敬礼をし帰還報告を行った。

「それと彼、枢木少尉が先ほど報告した者です」

「枢木 朱雀少尉です！ 先程は援護有難う御座いました！」

敬礼をしながら感謝を述べた。

『気にしないでください、我々も出来る事をしただけですから』

翔がそう文字を打ち答えると朱雀は吃驚した顔をした。パソコンに文字を打つての返事もそうだが、明らかに子供と言える少年がこの艦の責任者なのだから。

「もしかして声が？」

『はい、なのでこれで失礼します』

「いえ、これからお願いします」

『そんなに固くならなくてもいいですよ、緊急や作戦行動中以外は
楽にしてください』

「はあ」

朱雀は軍らしからぬ物言いにポカンとしていた。

「翔くん、さっきの戦場でどうも他の国がレーザーを無効化したの
を見ていたらしく、さっきから問い合わせがかなり来ているけどど
うする」

ラクシャータが翔にそう声を掛けてきた。

『帝国に直接聞いてくださいと返答してください』

「了解」

ラクシャータは楽しそうに作業に戻っていった。

S i d e
翔

……朱雀さんです！ まさかこんな所で会うとは思っていませんでした！ やはり可憐さんやラクシャータさんの様に能力も同じなんでしょうね。これは是非とも十二の剣に来て欲しいです！

ナイト・オブ・ラウンス

来て貰えるならランスロットを作りたいですね……まあ今は遊撃として他の部隊の援護に行かなければいけないので当分は先になりそうです……

それにしても先程の戦場で周りには他国はいないと思っていたんですが……高性能のステルスを持っている機体が近くに居たんでし

よつかね？まあ近くといっても攻撃や索敵範囲外でしょうが……恐らく米国でしょうね、ナイトメアの事を色々探っていると神楽耶さんからも報告が来ていましたし。

これから大変な事になりそうだと思う溜息をつきそうになりそうです。

S i d e O u t

13 光州作戦2（後書き）

うんももう少し話を長くしたいですね・・・
アイデア募集中

14 光州作戦3 (前書き)

この作品を見て不快感や自分のマブラヴの世界観が壊れるのが嫌だ
と言う人は今すぐ戻ってください。

14・光州作戦3

S i d e 翔

『ラクシャータさん、他の戦場は今どうなっていますか?』

「うーん何処も厳しいのは変わりないわね……それにどうやら現地住民が避難を拒否しているようで、そのせいもあって上手く作戦を立てられないみたいねえ」

避難を拒否ですか……自分の生まれた土地で死にたいと言う事でしょうか。

日本人も同じ気質を持っているので判らなくもないですが、このままでは住民を守るためにいらない被害も出そうです……何とかしたいですがどうしたら……

『取敢えず援軍要請している戦域へ行きます、他の皆さんもまた直ぐ戦闘が行われると思うので準備してください』

「了解」「了解」「了解」

『枢木少尉にも手伝って貰います、戦場では篁中尉の指示に従ってください』

「了解しました」

朱雀さんは敬礼をしてブリッジから去って行きました。

「篁中尉と紅月少尉もナイトメアの出撃準備をしておいてください、直ぐに次の戦場に着くと思うので」

「了解」

二人も敬礼をして直ぐにブリッジを去って行きました。

「翔君、国連軍から通信が来てるけどどうする？」

「はあー一体何の用でしょう……」

『繋げてください』

そう頼むと目の前の画面に国連の人が出てきました。

『私は国連軍の光州作戦責任者ローカス・レンダーだ。早速そちらに指示を出す今直ぐ基地に戻り私達の防衛に当たれ』

行き成り責任者だからと命令をしてきました。だから通信に出たくなかったんです……

それに僕達は国連軍に出向と言う形で来た訳じゃないのに、独立部隊として認められてここに来たのです、なので命令できるのは殿下だけです。

『お言葉ですが私達は独立部隊としてそちらの指示に従う必要は無い筈ですが？』

『なっ貴様！？ 此方の指示に従わないつもりか！？』

『従つても何もそう言う契約の元で私達は派遣されてきているはずですが？』

『くつ後悔する事になるぞ！』

『それは大きな独り言ですか？ それとも国連としての返事として受け取つていいのですか？』

翔は声を出している訳ではないのに其処には子供とは思えない威圧が放たれていた。

『独り言だ……失礼する！』

そう言い通信を切つてきました。

おそらく此処でいざこざを起こして高天原アウマロンの技術が手に入らなくなるのを恐れたんでしょう。

「翔君、やるじゃない、あんなに堂々とやりあつなんて」

『いえ、一杯一杯でした。それに相手も此方を怒らして技術提供などを受けられなくなるのを恐れたんでしょう』

「ふふそうねえ、でもあの男アメリカの息がかつた奴ね。恐らく先程の戦場で見せたハドロン砲とレーザーを防ぎきつたブレイズルミナスが目的でしょうね」

やっぱりそれが目的でしょうね、はあ次の戦場でもこんな事が起きるのでしょうか？

だとしたら憂鬱です……

Side Out

「枢木少尉、端鶴の方は異常はないか？」

「篁中尉！ はい！ 異常はありません！」

「そうか、しかし先程の戦闘を見させてもらったが素晴らしい動きだった」

唯依は朱雀の動きを見て純粹にそう思っていた。

「確かにあの動きをよく端鶴で出来たと思う」

「可憐もそう思い言葉に出した。」

「有難う御座います！　しかし自分はまだまだです、先程の篁中尉と紅月少尉の戦闘を見てまだまだ未熟だと思いました」

朱雀は先程の戦闘に衝撃を覚えていた。

圧倒的機動で敵の攻撃をかわし、効率良く相手を屠って行った二人。

その姿は圧倒的だった。

「そうか、だが少尉なら恐らく私達の乗っているナイトメアクラスの機体に乗る、私達と同じ訓練を受ければ先程の戦闘くらいなら出来なくはないと思うぞ」

「中尉達のナイトメアですか？」

「ああ、私達の機体や装備にOSは特別製だからな。だが私達の機体に付いている装備はそのうち一般兵の機体にも取り付けられると思うぞ？　OSはナイトメア用なので戦術機用にはないといけないがな、だがこのOSが戦術機にも搭載できたら自分のOSを他の戦

術機に直ぐ搭載できるから戦場では楽になるぞ？ ログも従来の戦術機のOSとは違って残らないからな」

朱雀はその言葉に先程の戦場で紅蓮二式と蒼月の機動や使っていた武器、MVSと呼ばれる高周波振動剣や、輻射波動等を思い出し早く軍に広がってほしいと願った。

「そうならば今の状況を打開出来るかも知れませんね」

「必ずしてみせる、翔君もそれを望んでいるしね」

可憐のその自信に溢れた態度や台詞に朱雀は少し見惚れてしまっていた。

『クルシエフスキー大尉！ 支援砲撃がほとんど無い上にこれでは、戦線の維持すら難しいです！』

「何弱音を吐いてるの！ 貴方、それでも男なのっ！」

『ぐっ』

「我々に与えられた任務を全うしなければ、戦ってる意味がありません」

『りよ、了解っ』

「良い返事です、終わったら後で特別訓練を行ってあげます」

『うげえ』

「何か言いましたか？」

『な、何でもありません。ヴァンガード2、任務続行しますっ！』

終わりが見えない迫り来るBETAの集団に向かい、ジノ・ヴァインベルグ少尉はトリガーを引いた。

ジノ・ヴァインベルグは金髪の青年で、青い瞳に彫刻のように整ったハンサムな顔立ち。肌にフィットしたスーツから想像出来る体の輪郭は、スマートでしなやかだ。俊敏なネコ科の肉食動物を思わせるスタイルといい、モデルばりの容貌といい、その気になれば大抵の女性は笑顔一つで懐柔出来るだろうが、今そこにあるのは微笑でも憂い顔でもなく、ただただ疲れた顔だった。

『「愁傷様」』

淡々とBETAを屠りながらジノに声をかけるのはアーニヤ・アールストレイム少尉。歳は十代の半ばも越えていない。結い上げた長めの髪に可愛らしい顔をしていた。ただし、赤みを帯びた瞳は酷く無機質で、表情というものに欠けていた。

『アーニヤはアー戦っていても終わっても地獄かよ……』

そんな軽口を叩き合っている二人を見て流石はプロジェクトの生き残り、精神的にはまだ余裕があると思っていた。

しかし、モニカ・クルシェフスキーも此の儘では流石に拙いと感じていた。

「恋の一つもしてないのに、此の儘死ぬのは御免こうむりたいですね」

操縦桿を握る手も力が入り、泣き言を言っている暇なんか無いと自覚する。彼女は長い金髪にいかにもお嬢様という雰囲気を持ち、その容姿は誰の目から見ても美人だ。普段は瞳も優しく街に出たら必ず声をかけられそうなほどだ。しかし今その瞳はBETAを見据え的確な指示を飛ばしていた。

ここを乗り切らなければ、何もかもが無くなってしまふ……だから歯を食いしばり戦う。

「はあああああー！ー！ー！」

モニカ・クルシェフスキーは自分の国を解放する為、ただそれだけを思いF15-Cイーグル特別機を駆りはBETAを倒していく。

ジノ・ヴァインベルグは幼い頃に遭ったBETA襲来で自分の家族を亡くしており、その復讐の為にF15-Cイーグル特別機でBETAを狩る。

アーニヤ・アールストレイムはジノと同じく幼い頃に家族を亡くし、ジノと同じく望んで受けたプロジェクトの生き残り。そして今度こそ部隊の人やずっと一緒だったジノを守るためにBETAを倒していく。

しかし、倒しても倒しても押し寄せてくる圧倒的なBETAの波に、モニカを初めとするヴァンガードでも戦線維持がやっとで有る。

ぎりぎりの所で押しとどめているヴァンガードに、HQからの信じられない連絡が耳に届いた。

『HQよりヴァンガード試験小隊各機へ。HQよりヴァンガード試験小隊各機へ。其方に向かった十二の剣独立部隊と共に戦線を押し上げよ。繰り返す、其方に向かった十二の剣独立部隊と共に戦線を押し上げよ』

「十二の剣独立部隊？ 聞いた事ないわね……ヴァインベルグ少尉

聞いた事ありますか？」

「いえ、俺もこう言う情報は詳しい方ですが聞いた事無い部隊ですね」

「そう……なら期待して待ちましょう」

そう言ったもののこの状況で足手まといが増えるのは流石に勘弁してほしいと思っていた。

しかしこの心配事は杞憂に終わる事を彼女達はまだ知らない。

14 光州作戦3 (後書き)

アイディア募集中!

15 光州作戦4（前書き）

この作品を見て不快感や自分のマブラヴの世界観が壊れるのが嫌だ
と言う人は今すぐ戻ってください。

15 光州作戦4

ヴァンガード試験小隊は人数は4人と少ないものの、一人一人の技量が高く何とか戦線を維持していた。

そこに先程CPから連絡があつた部隊から通信が入ってきた。

『こちら高天原アウアロンからヴァンガード試験小隊へ。これよりBETAへのハドロン砲発射後其方へ援護に入る。高天原射線アウアロン上より退避せよ。繰り返す、高天原射線アウアロン上より退避せよ』

その言葉を聞いてヴァンガード試験小隊は戦いながら後方を確認し驚いていた。

其処には空中に巨大艦が浮かんでいたからだ。

「ヴァンガード1よりヴァンガード各機へ。先程の通信は聞きまし
たね？ 直ぐに射線上より退避しますよ！」

『『『了解！』』』』

返事と同時に戦っていた全機が一斉に散開したその瞬間に、後方アウアロンの高天原からハドロン砲が発射された。

ハドロン砲は多くのBETAを屠りその威力をヴァンガード試験小隊に見せ付けた。

「とんでもない威力ね……でもこれで何とかかなりそうですね！」

モニカはこの作戦の成功を……

「アハハハハ！ マジかよ、まるで光線級が味方に居るみたいじゃないか！ けどこれならいける！」

ジノは圧倒的力に己の未来を……

「あの武器欲しい……」

アーニヤは……

BETAもかなりの数がハドロン砲に蹴散らされ、さらに高天原アウアロンの方から機体が三機現れた。

『此方ラウンズ1、ヴァンガード試験小隊に加勢する』

「此方ヴァンガード1、加勢感謝します之で何とか時間を稼げます」

こうして各々は自分の正面に居る突撃級、要撃級、兵士級、戦車級、種類によらず全てを駆逐するべく全弾使い切るつもりで撃っていく。

命中したところから、赤紫色の血をぶちまけ、BETAが倒れていった。だがその後ろからぞろぞろとまたこちらへ向かって来た。

10体ほどの突撃級がほぼ横一列でこちらに突撃を開始して来て、ヴァンガード試験小隊の一人が避け損ねて突撃級の波にのまれた。

『う、うわあああああ！』

隊長機であるモニカの機体にその損害情報がすぐさま入ってきた。
機体全壊　　中に乗っていた衛士は……即死。

「なっ!?!」

ジノにも味方の機体全壊の情報が入ってきて一瞬動きが止まりかけた。

だが其処にモニカの一喝が入った。

『振り返るなあ!　倒れた仲間のためにも、前を向きなさい!』

「くっ!　……了解ッ!　くっそおおお!　仲間をまた守れなかったッ!」

『ジノ……』

今の自分達には一人の死を悲しむ間すら与えられていない。鬼籍に入った仲間の死を無駄にしない為にも作戦を成功させる。それが今できる最高の手向け。

そして十二の剣の方もヴァンガード試験小隊に負けずに戦っていた。
ナイト・オブ・ラウンス

「可憐!　同時に拡散輻射波動を放つぞ!」

『了解!』

紅蓮二式と蒼月は右手と左手を突き出し輻射波動をBETAへ向けて放った。

二人の放った輻射波動は広範囲に渡ってBETAを駆逐して行き、周りにはBETAの死骸が溢れ土煙が上がっていた。

「何度見ても凄い威力だな……」

朱雀は感心しながら周りを確認していると、先程迄たちこめていた土煙の向こうに重光線級の忌まわしき瞳が現れた。

「中尉！ 重光線級接近中です！」

とっさにそう叫びながら、自身はその地点に向かって36mmを撃ちこんだ。

『了解！ 可憐、私達も行くぞ！』

『了解！』

二人も重光線級に向かって行く。

だがその時、重光線級たちの照射粘膜が不気味に光った。

「拙い！」

だがそのレーザーはナイトメアや戦術機に向かわず、後方に浮かぶ高天原^{アヴァロン}へ発射された。

「翔君！ 重光線級が現れました！」

ナイトメア開発局高天原アサハロンのスタッフが慌てて報告してきた。

『ブレイズルミナス最大展開してください！ 光線級のレーザーは防げましたが重光線級のレーザーはまだ判りません！ 全員注意してください！』

「……………了解！……………」

そこにラクシャータから報告が来た。

「翔君、重光線級からエネルギー反応増大来るわよ」

その報告から数秒後レーザーが高天原アヴァロンに向かって発射されてきた。

レーザーはブレイズルミナスに当たりレーザーは弾けていった。

だが決して完璧に防ぎきつた訳ではなかった。

「翔君！ 思った以上に重光線級のレーザーが強く、もう一度ブレイズルミナスを展開するには時間がかかるわ」

レーザーの威力が光線級より高かった為ブレイズルミナスに思った以上に負荷が掛かっているらしく修理を直ぐに開始しなければならなかった。

『判りました！ 直ぐに修理を始めてください！ それと十二の剣ナイト・オブ・ラウンスとヴァンガード試験小隊へ高天原アヴァロンの状況を報告してください』

「了解」

「了解」

そう言い終わるとラクシャータは直ぐにブレイズルミナスの修理のためにブリッジから出て行き、オペレーターが各機アヴァロンに高天原の状況を伝え始める。

「此方高天原アヴァロン。十二の剣とヴァンガード試験小隊へ。先程の攻撃で此方に損害が出た。その為次のレーザーは防げない。最優先で重光

線級を仕留めてください！ 繰り返す、先程の攻撃で此方に損害が出た。その為次のレーザーは防げない。最優先で重光線級を仕留めてください！」

「とんでもない戦艦ですね……まさか重光線級のレーザーを防ぎきるなんて……」

モニカは高天原アサマロンがレーザーを防ぎきつた光景に驚きを隠せなかつ

た。

人類の誰もが夢見たレーザーの無力化、日本帝国軍はそれに成功したというのか。

「大尉、日本帝国はとんでもない物を開発しましたね……機体の方も凄いですしこれが広がれば！」

ジノはナイトメアの輻射波動や高天原アウアロンのブレイズルミナス等の兵器を見て、日本帝国の技術力を感心していた。

あれが何なのかそれを今考える必要はない。必要なのは「レーザーを防いだ」という純然たる事実のみ。本当に勝てる、そんな考えが生まれた。

そこに高天原アウアロンから通信が入ってきた。

「此方高天原アウアロン。ナイト・オブ・ラウンス。十二の剣とヴァンガード試験小隊へ。先程の攻撃で此方に損害が出た。その為次のレーザーは防げない。最優先で重光線級を仕留めてください！ 繰り返し、先程の攻撃で此方に損害が出た。その為次のレーザーは防げない。最優先で重光線級を仕留めてください！」

「了解」

ヴァンガード試験小隊は返事を返し直ぐに行動を移した。

「二人供聞きましたね？ 直ぐに重光線級を狩りますよ、あれを落とす訳にはいきません」

『判ってますよ、クルシエフスキー大尉！』

『了解』

三人は一斉に重光線級に向かって行った。

「可憐、枢木、二人供聞いたな？ 直ぐに重光線級を狩りつくすぞ！ あそこには翔君が乗っているんだからな！」

そう唯依が言うと可憐も『判っています！ 日本の希望をこんな所で死なせれる訳が無いじゃないですか！』と唯依と朱雀と共に重光線級に向かつていった。

朱雀は目の前で重光線級の相手をする唯依と可憐のために、彼女たちに群がる小型級BETAを支援突撃砲で的確に撃ち殺した。弾倉をすぐさま交換。戦場を見まわし、ナイト・オブ・ラウンス十二の剣かヴァンガード試験小隊のどちらを援護するか決める。

その時自分に向かつてくる二体の突撃級の存在に気づいた。跳躍でその突進をやり過ごし、後ろからすぐにその柔らかい背面に突撃砲を数十発撃ちこむ。すると、音を立てて突撃級は崩れ落ちた。

『はっ！』

『せいっ！』

みんなの気合の入った声も通信機ごしでも気迫が伝わってくる。

「はあっ！...」

紅蓮二式と蒼月に装備されたMSVで重光線級達が切り刻まれ、ヴァンガード試験小隊達の突撃砲で残りの重光線級達が葬られていく。朱雀は目の前の突撃級の死骸をよじ登ってきた戦車級を長刀で切り裂いた。

圧倒的殲滅力で周囲にBETAは居なくなっていた。

『こちら高天原、アヴァロンBETAの増援なし、直ぐにナイト・オブ・ラウンス十二の剣、ヴァンガ

ード試験小隊は高天原アウアロンへ後退せよ』

『ラウンズ1（唯依）了解』

『ラウンズ2（可憐）了解』

『ギアス1（朱雀）了解』

『ヴァンガード1（モニカ）了解』

『ヴァンガード2（ジノ）了解』

『ヴァンガード3（アーニヤ）了解』

唯依とモニカは各隊に指示を出しながら周囲を全方位を警戒しながら撤退行動を始めた。

突撃級の死骸に隠れた重光線級などがいないとも限らない、部隊の隊長として、部下のため、任務のために二人は万全を期す。

だがこの時誰もが予期しない事態が発生しようとしていた。

15 光州作戦4（後書き）

アイディア等募集しています。

16・緊急事態発生

先程の戦いを終えて高天原へ帰艦したアヴァロン十二の剣とヴァンガード試験小隊。ナイト・オブ・ラウンス

そのメンバーがブリッジに集まって来ていた。

「ナイト・オブ・ラウンス十二の剣及び枢木 朱雀少尉只今帰艦しました」

三人は翔に向かって敬礼を行った。

「それとこちらがヴァンガード試験小隊の方々です」

「紹介に預かりました私はヴァンガード試験小隊隊長、モニカ・クルシェフスキー大尉であります！ 先程は助かりました」

「同じくヴァンガード試験小隊、ジノ・ヴァインベルグ少尉です」

「ヴァンガード試験小隊、アーニヤ・アールストレイム少尉です」

ヴァンガード試験小隊の三人は敬礼をしながら驚いていた。

先程唯依達が翔に向かって敬礼をしていたと言う事は、この子供が艦の責任者と言う事だからだ。

『僕は神風 翔大尉です。先程の事は当然の事なので気にしないでください』

画面の文字を見せられてさらに三人は驚きに目を見開いていた。

「まさか声が……?」

『はい。声と足が不自由ですが仕事には支障ありません』

「失礼しました。そう言う意味で言った訳ではありません」

『分かっていますよ』

翔は苦笑しながら答え、モニカもその返事に翔へ笑みを返した。

「これから如何するのですか?」

『そちらも補給等が必要でしょうし基地に一旦戻ろうかと思えます』

「そうですね、では基地までよろしくお願いします」

Side 翔

まさかジノさんとアーニヤさん、果てはモニカさんまで居るとは

……

モニカさんは直接面識は有りませんでした。が、シャルル皇帝時代の円卓の騎士として有名だったので顔は知っていました。

ジノさんとアーニヤさんは、色々と話したりした事もありましたがやはり変わりませんね。

できるなら十二の剣に引つ張りたいたいですがかなり難しいですよ

……

出来たとしても彼らに国連軍を辞めてもらって、尚且つ殿下の許可等様々な障害が出てきますし恐らく日本高官が情報云々で無理っぽいです……だったら僕が国連軍に……それこそ無理ですね。今の国連軍はアメリカ主導ですし……でも基地を束ねている人がまともな場所なら大丈夫かも知れませんか……一案として考えておきましょう。

まあ今は光州作戦の事を考えないといけませんね、まずは基地に戻って補給を「翔君！ 日本からの緊急通信！」

考えていた最中にオペレーターから声がかけられました。

S i d e O u t

「翔君！ 日本からの緊急通信！」

オペレーターの焦った声がブリッジに響き渡った。

『画面に出してください』

そう言うや否や画面に巖谷中佐が現われた。

それには唯依と可憐も驚いていた。

『作戦行動中すまない、だが緊急事態が起こった』

『何が起こったのですか？』

翔がそう返事をする

『日本の佐渡島にBETAが侵攻してきた……』

その言葉にブリッジにいた全員が驚愕のあまり固まってしまっていた。

「そんなどうやって！？ 何時の間に！？ 阻止は！？ 阻止は出来なかったのですか！？」

唯依がまるで懇願するように巖谷中佐を問い詰めた。

『勿論軍を派遣し阻止を試みたが、失敗に終わった……そこで急遽君達に日本に戻って貰いたい』

『攻めるのですか？』

『いや、まだ準備が整っていない。だがBETAもいつ本土に進行してくるか判らない……その為君達にも戻ってきてもらい防衛の一翼を担って貰いたい』

『分かりました。基地で補給した後日本へ戻ります』

『頼んだぞ』

巖谷中佐が言い終わると画面が閉じられた。

周りの皆は沈んだ空気になっていた。

「……まさか既に日本へBETAが侵攻して来るとは思っても居ませんでしたね。しかし海を渡って来ましたか……」

モニカが最初に心の内を言葉に出した。

『まだまだBETAには分からない事が多いと言っ事ですね……それに唯でさえ今は光州作戦中でしたからね……』

翔もまさかこのタイミングで日本がBETAに攻められる何て夢にも思っていなかった。

「だけど今ならまだ防衛を整えれば佐渡島からの上陸を防げます！」

可憐ラントのこの言葉は翔の作った紅蓮二式と蒼月、帝国軍の紫炎グロースターサザや舞鶴アウアロン、第三代戦術機不知火に高天原等が揃えば防衛が可能だと思っ
ての言葉だった。

「それは私も同意見だが、その判断を直ぐに日本帝国が下せるかどうか……殿下なら直ぐに適切な判断を下せると思うが政府の役人や日本にいるアメリカ軍が邪魔をしないかどうか心配だな……」

唯依は今現在の日本の不安要素を全員に説明した。

「そう言えば日本にはアメリカ軍が駐留していましたね、それにアメリカなら核を使えと言いますね」

アメリカの戦術や戦略等からジノは日本に核使用を迫ると確信していた。

「確かにアメリカならやりかねない……くっ！　日本で核を使わせて堪るか！」

唯依の怒りが周りに響く。

『兎に角今は一刻も早く基地に戻り体制を整えましょう』

「そうですね。今は焦っても仕方ありません。それに私達ヴァンガード試験小隊は日本に行けないのも悔しいですね……此方の作戦もまだ終わっていませんから」

モニカは悔しそうに顔を俯かせていた。

『そのお気持ちだけで十分です。此方の作戦も大切なのは分かりますから』

「そうですねよ、此処で上手く撤退出来なければ後々の作戦で影響が

でてしまいますからね」

こうして十二ナイト・オブ・ラウンスの剣とヴァンガード試験小隊は全速力で基地へ向かった。

基地へ到着し高天原アウアロンを格納庫へ入れ艦から降りると、其処には凄
い人数が高天原アウアロンを見上げていた。

国連軍は勿論の事、大東亜連合に中華統一戦線等の人達もいた。

既に高天原のハドロン砲やブレイズルミナス、紅蓮二式に蒼月等アウァロンが先程の戦闘で知られている為興味ที่ 尽きないようだ。

確かに前戦で戦っている人達にとってはハドロン砲やブレイズルミナス、紅蓮二式や蒼月は魅力的に移るだろう。

既に翔がナイトメアを開発したのは世界で知られている。だからこそ今此処に各国の技術者から各国の交渉役が出向いて来ていた。

その中でも一人威圧感やカリスマと呼ばれる物を纏った人物が、副官らしき女性を引き連れが翔達の前に出てきた。その男は吹き抜ける風になびく長い黒髪。幅の広い肩。背はすらりと高く、それでいて線が細いと言う印象は余り無い。バランス良く鍛え抜かれた筋肉がそう見せないのだろう。精悍な容貌とも相まって、全体としては密林を駆け抜ける黒豹めいた印象がある。

「お初にお目に掛かる、私は統一中華戦線の黎・星刻上将リー シンクと言う。こつちが副官の周・香凜上尉ジヨウ チャンリン、貴公にお会い出来て光栄だ。体が不自由と言うハンドエをもともせずにはサクラダイトと言うレアメタルの発見やナイトメアを作りし天才神風 翔殿」

星刻は翔に向かって右手を差し出し握手を求め翔もそれに応じ右手を差し出し握り返した。

「丁寧に有り難う御座います。僕を知っているみたいですが改めて神風 翔大尉です。こつちの右に居るのが副官の篁 唯依中尉で左に居るのが紅月 可憐少尉です。それにしても体の事知っていた

「んですね？ 後僕は天才と呼べる程ではないですよ」

「謙遜は行き過ぎると嫌味になってしまうぞ？ それと翔殿の体の事は私は大将なので重要な情報は入ってくるし、他の国も上の人間ならこの程度は知っている事かと思うぞ？」

神凧 翔の名前は既に各国で知れ渡っている。其の為少しでもデータを集めようと各国の諜報員は調べており、手に入れやすかった翔のデータは声が出せないのと足が不自由と言う事くらいだった。不自由と言っても最近の翔は体が最初の頃の様に全然動かない訳ではなく、上半身は動かせるようにはなってきたいて、特に腕から手にかけては問題が無くなってきていた。だがそれ以外の翔の情報はいくら調査しても分からず、他国には公的に発表されているサクラダイトの発見者とナイトメアの開発者ぐらいしか知られていない。

それは城内省が翔のデータの機密ランクを最大にしていた為でも有ったし、普段翔はナイトメア開発局に居て戦場には今回が初めてだった為データが漏れる事はなかった。

『重要な情報ですか？』

自分がそこまで重要だと思っていなかった翔は目をパチクリとしていた。

「その通りだ。今翔殿の作ったサクラダイトやナイトメアがどれだけの評価を受けていると思っておられる？ さらには先程の戦闘でのあの艦の攻撃力と防御力、この場に集まっている人数を見れば一目瞭然ではないか」

星刻に言われ改めて周りを見てみるとかなりの人数が翔達の周り

に集まっていた。

『どうやらそうみたいです』

翔は苦笑を漏らした。

『でも態々統一中華戦線の星刻上將が態々僕に挨拶だけしに来た何て事は無いですよ？』

翔がそう言うと星刻は若干驚いた様な顔を見せた。

「その通りだ。翔殿に統一中華戦線様のナイトメア開発依頼と、先程のレーザーを無効化した技術を提供して欲しい」

その提案には周りの人達もざわめき出した。

「それなら我が国連軍にも！」

「大東亜連合にも！」

等々周りからも声上がり出し翔の周りに詰め寄っていた。

「星刻上將に他の方々、残念ながら神風大尉の一存で決めれる事はありません。日本の方で許可が下りているのなら話しは別ですが」

翔の代わりに唯依が問いに答えていた。

「だがナイトメアの開発責任者からの声ならば話しは別だろうか？」

「だとしても我々がそれに協力する義理はない筈です」

「確かに、だがこれからの状況を考えるとそうも言ってられないのでは？」

星刻の言う事は正しかった。今の人類にはもう余裕など無く人類一丸となって協力しなければならぬ。しかしそれでも国家間での駆け引きなどがあり上手くはいっていない。それに今の日本がやばいのは翔達も分かっていた。この朝鮮半島から軍が撤退したら次は日本が攻められるし、既に佐渡島にはBETAが侵攻してきており出来るだけ他国に協力を取り付けておきたい日本の現状は翔達にも分かっている事だ。だからこそ星刻もそう言っているのだ。

「成る程そう言う事ですか……一応掛け合っておきましょう」

「宜しく願います」

唯依と星刻は話しを纏め国連軍や大東亜連合とも話しを始めていた。

翔はその間にスタッフ達に補給を頼み可憐とPXへ向かった。

16・緊急事態発生（後書き）

アイディア募集中です！

17・各国の動き2（前書き）

遅くなりましたー！

各国の動き第二弾です！

17・各国の動き2

Side 統一中華戦線

今この場では二つの派閥の内の一つの高官達が、日本への外交の仕方等を話しあっていた。

「日本への対応は今どうなっている？」

「先程星刻上将から先程連絡がありどうやらナイトメア開発者の神風 翔と接触出来たそうだ。そこで統一中華戦線用のナイトメアを依頼し他にも技術提供を頼んだそうだ」

「ふむ、それで相手は何と？」

「確定ではないがある程度の物は引き出せるかと、ただ此方もそれなりの条件を出される事を覚悟したほうがいいと、そして其れだけの価値があるとも言っていた」

あの星刻上将が其処まで言うのにはこの場に居る全員が驚いていた。

星刻上将は決して過大評価はせず客観的な目で物を見るため、その技術には其れだけの期待が持てる物だと言う事が分かった。

「そうか、我等統一中華が日本から数機購入していたサザーランドはどうなっている？」

「やはりサザーランドは第二世代戦術機よりも高い性能を誇ってお

り、第二世代よりコストが安い。其の為これからの事を考えてライセンス契約を皇重工と結んだばかりだ」

「そうか、少しは楽になるか……そう言えば以前大陸の戦闘に出てきた最新のナイトメアの情報はどうなっている？」

「それが先程星刻大将からの報告では、光州作戦に以前大陸で戦っていた蒼と赤のナイトメアが戦闘で出てきており、その性能は言われていた通りやはり第三世代を超えているらしく、星刻上将曰く準第四世代だと言う話した」

その話しには会議に出席していた全員が固まった。

「やはり日本で第三世代をも超える物が開発されていたのか！」

「うむ！　しかし超えたのはナイトメアで戦術機じゃなかったと言うのは、我々人類は今迄の時間何をしていたんだろうな……」

その言葉には誰もが何も言えなかった……唯でさえ報告にある神凧 翔は徴兵される年齢ではないのに、今迄人類が開発に悩んでいた第三戦術機を越える新しい概念の機体をいとも簡単に作り、その上サクラダイトと言う新しいエネルギーをも発見したのだから……

「しかし決して我々が無能と言う訳ではない。彼は日本の香月博士に大東亜連合のラクシャータ博士、EUの盟主イギリスのロイド博士と同じく天才だったのだろう」

「この歳である天才達と分野は違うが同じ領域にいるか……日本は羨ましいな」

「そうですね、我々は唯でさえ大宦官に色々と邪魔をされる上に、
奴等は国民や天子様を食い物にしているからな」

大宦官と言う言葉が出てきた時にこの場に居た全員が顔をしかめた。

「何れは大宦官を排除してみせる。其れまでは星刻大将に言われた通り我慢し奴等に従っているフリをし力を蓄えよう」

日本への対応はこうして決められていった。

S i d e O u t

S i d e 大宦官

「天子様はどうしている？」

「今は部屋に居らっしゃる」

「最近星刻大将に何か色々吹き込まれている様で、此方に口を出してくる様になったからな」

「まったく道具は道具らしくして欲しいものだな」

「何れはアメリカへの貢物として持って行く事になっているのだから下手に出ているものを、勘違いされて困るな」

話している彼らは天子の次位に位置し統一中華の政治を行う官僚達であり、国民よりも自分達の保身を優先し、天子を政治の道具にすることも厭わない者達。

メンバー全員が顔に赤い刺青をしており高亥、ガオ・ハイ 趙皓、ジャオ・ハオウヤ・ワン 夏望、チエン・ジョン 程忠、シャン・シェン 項勝、シエ・サイ・リ・シ 蔡力士、トン・ルン 童倫、ファン・シェン 黄遷の8人がいる。

現在アメリカとの密約を結ぼうとしており、天子の政略結婚等で自分達を安全なアメリカで不自由なく暮らせるように交渉している。

天子は国民に人気が高い為に、大宦官はこの様な手段を考え付いていた。天子がアメリカの誰かと結婚するとなれば、国民は天子と結婚したアメリカの言いなりに出来る為、アメリカも乗り気である。

「アメリカからの話しだと現在G元素を使った特殊な兵器を開発しており、それを使えばBETA等敵ではないそうだ」

「ならアメリカがそれを使った時に天子様の結婚を発表すれば万事上手く事が運べそうですな」

アメリカがBETAを駆逐する兵器を開発したなら、国民からの天子様の政略結婚の反発も少なくすむだろうとの判断であった。

S i d e O u t

Side イギリス

「このナイトメアと言うのは実に興味深いね」

「こんな所に居た！ロイドさん書類仕事もしてください！」

不意にそんな声が聞こえてきて、広々とした格納庫の入り口をロイドは振り返った。

格納庫の蛍光灯の淡い光の下に、すらりとした影が立っている。

仕官服を着た女性で仕事だったのか、右手にはバインダーを抱えていた。

化粧の薄い顔が、かえって理知的なキラメキを感じさせる様で清々しい。

「嫌です！僕は研究さえ出来ればいいのに」セシル君だって僕がそう言う人間だって知っていますでしょう？」

名前を呼ばれるとその女性、特別戦術機開発部所属、セシル・クルーミー中尉は怒った顔をしてロイドの元に近づいて来た。

「またそんな事言っつて！」

「だつてこのナイトメア凄いやないかセシル君だつてそう思うでしょ？」

セシル相手に喋っているロイドは正直余り軍人らしくなかった。

身に着けているのは軍服ではなく、むしろ研究者が着るような白衣で、身長こそ高いが筋肉の張った体はしていなかった。

色白の肌に縁無し眼鏡、実に研究者や学者といった印象が強い格好だった。

しかし、それでもロイドはれっきとした階級を持つ軍人である。

正式な名はロイド・アスプルンド。

セシルも所属している特別戦術機開発部の一人である。

若いながらもこの二人は優秀な為、特別戦術機開発部に入る事が出来たのである。

「其れはそうですけど書類仕事もしなくてはいけないんです！ それとも教えて差し上げましょうか？」

につこりと微笑んで右手を振り上げた。

「御免なさい！ すぐにやります！」

ロイドは慌てて書類仕事する為研究室に戻った。

「まったく、自分の興味を持った物や戦術機には何処までものめり込んで行くのに、興味が無い事は本当に何もしないんだから……」

でもこのナイトメアはロイドさんの興味を引いたみたいだから、これからは戦術機じゃなくナイトメアにのめり込むのかしら？ 私としても興味があるからいいのだけでも仕事が増えそうね……

溜息を吐きながらロイドの後を追って行った。

S i d e O u t

S i d e 大東亜連合

大きな会議室では大東亜連合の政府高官と軍部高官が大きな机越しで話し合っていた。

「ラクシャータ博士を日本に派遣した甲斐がありましたな」

「ええ、そうですね。今、他の国は慌てて日本や皇重工と話し合いをしている事でしょうな」

光州作戦で翔達があヴァロン等の兵器を見せつけ為、今各国では日本と皇重工にあヴァロン、紅蓮式、蒼月の詳細や技術の提供を問い合わせていた。

「我々大東亜連合は、ラクシャータ博士を派遣した代わりに他の国よりいち早くナイトメアを生産する事が出来る様になりましたからな。ラクシャータ博士の言っていた通り先手を打っておいて良かった。でなければ我々も他の国の様に出遅る所でした」

「それにラクシャータ博士から問題ない技術をナイトメア責任者である神風 翔の許可を取って送ってきてくれている。これだけでも他の国よりアドバンテージが高い」

大東亜連合は元々日本と軍事同盟を結び、ラクシャータ博士も出

向させている為、翔から色々な技術が提供されている。

だがその提供されている技術も翔からしてみればナイトメア第五世代以下の物であったが……だがそれでも他の国にはもたらされていない技術であり、この技術を上手く使えばかなりの物が作れる程の物でもあった。

「そうだな、後はナイトメアサザランドを元に大東亜連合独自に開発していければこれから有利に運べる」

「それに先程報告があつた光州作戦でさらにとんでもない兵器を使つたらしいからな」

「BETAを一掃したという兵器に、光線級のレーザーを防いだと言つ浮遊戦艦か……出来れば手に入れたいが……何とかラクシャータ博士に頼んで交渉して貰いたいな」

「流石にそれは厳しいのではないか？ あちらにとつても最新鋭の物だろ？」

「まあ出来るだけやってみよう」

「無茶して機嫌を損ねる事だけはしないようにな」

「それは勿論注意する。交渉してみるだけですから」

こうして大東亜連合は他の国より一步前に出て来ていた。

Side Out

S i d e アメリカ

「くそ！ 忌々しい！ 神風 翔のせいで我々の軍事産業が落ち始めています！ それに何だあの戦艦は！ B E T A の様なレーザーを撃ち出す兵器といい、光線級のレーザーを防ぐ防御力といい何なんだ一体！」

今此処には前回集まった人達よりも多くの人間がこの場に居た。特に増えたのは軍事産業を手掛けている企業の代表達だ。彼らはナイトメアの活躍で徐々に経営が傾いてきている。

「如何にかしてあのアヴァロンと言う戦艦や、紅蓮式、蒼月の二体のナイトメアの情報を得られないのですか？」

企業の代表の一人が軍関係者に向かって聞いてきた。

「我々も水面下で動いている。しかし日本帝国のアメリカ派の人間はナイトメアに関わっていないし、皇重工に到ってはアメリカに対して情報を得る所か交渉さえ跳ね除けている。日本に圧力を掛け様にもこれ以上やるとサクラダイトが輸入出来なくなり、さらには技術を得る機会さえ失ってしまう」

その話しに企業の代表達も何も言えなくなる。

その後幾つかの事を話し合い企業の代表達は会議室を出て行き、残った者達は前回と殆ど同じメンバーだった。

「しかし本当にどうする？ このままでは色々和不味いぞ？」

「判っている。それに手がまったく無いわけでもない。今、日本の佐渡島にBETAが侵攻して来たのは知っているだろう？ 我々は同盟を結んでいるのだから後に進行してくるBETAと戦う事になるだろう。そこで我々の戦術機の凄さを世界に見せ付け、BETAから日本を守る代わりに技術提供をもらいチャンスがあれば神風 翔の暗殺も行いたい」

「成る程……確かにそれならまだ確立はありますな。日本も守って

貰ったら嫌とは言えないでしょうし、これ以上神風 翔に挺子摺らせられるのは嫌ですからな、やってみましょう」

「全ては我々アメリカの為に！」

「『『『『アメリカの為に！』『』『』『』』』』』」

こうして裏で計画が動き出した。

S i d e O u t

一人研究室の椅子に座りながら先程送られてきたデータを見て薄っすらと笑っている女性が居た。

「ふふふ、とんでもないわねこの戦艦と二体のナイトメアは。私の研究の為に是非とも手に入れたい所ね……やっぱり神凧 翔に早めに会うことにしましょう。あの技術是非とも手に入れたい！」

目を光らせ怪しく笑っている様子に研究室に入ってきた部下は体を震わせていた。

「あら如何したの？」

「はい。実はアメリカの方に動きがあるみたいです」

何事も無かったかのように部下は返答を返した。

「ふふん、皇 神楽耶にあれだけやられてまだ何かするつもりなのね……救い様が無い馬鹿ね。恐らく同盟を盾に技術提供しろだの言つて、裏では暗殺でもしようとしているのかしら？」

余りにも単純すぎるアメリカの行動に香月 夕呼は溜息を吐いていた。

「でも私の邪魔はさせないわよ！ 邪魔してくるのなら……ふふふ」

不気味な笑いを浮かべ部下に退出を命じ、パソコンの画面へと向

き直った。

17・各国の動き2（後書き）

アイデアア募集しています！

18・日本への帰還

補給を済ませた翔達は現在日本に戻って来ていたのだが、休む間もなく直ぐに殿下に呼び出され、帝都城謁見の間へ来ていた。

謁見の間には翔、唯依、可憐、朱雀の四人。

当たり前だが部屋は、静かだった。

流れてゆく静かな時間、時計の針の音だけが流れる。

謁見の間は皆緊張している為か、沈黙の世界が続いていた。

暫らくしてから謁見の間に殿下に護衛の月詠大尉、紅蓮大将が入って来た。

部屋に殿下が入って来た時に、全員が頭を下げて殿下の言葉を待っていた。

「面を挙げて下さい」

その言葉に全員が顔を挙げ殿下を見た。

「この度の光州作戦、ご苦労様でした。既に聞いている事と思います
が、佐渡島にBETAが侵攻して来ました……」

その言葉で謁見の間に暗い沈黙が流れた。

「しかし今現在我が帝国軍や他の国々では、光州作戦に兵力を送っ

ている為、直ぐに攻める事は出来ません。かと言って手を拱いている訳にもいきません。ですのでナイトメア開発局には、以前に話していた紅蓮式式量産型の開発等準備を急いで欲しいのですが現在どうなっていますか？」

『以前言われていた紅蓮式式量産機である月下の設計図はラクシャータ博士と共に作り上げ出来ています。元々光州作戦後に作る予定でした』

翔は既に依頼されてから時間を見つけては、コツコツと紅蓮式式量産機月下の設計図を書いていた。さらに此方の戦術機のノウハウもラクシャータ博士の協力により取り入れられ、それにより前の世界での月下よりも攻撃面で優れた物になっている。

「そうでしたか。なら試作機が出来たらやってもらいたい事があります」

『やってもらいたい事ですか？』

「実は富嶽重工と遠田技研が中心となって以前から作っていた、武御雷の量産試作機が完成したのですがコストは高く整備性も良くないのですが性能は高いのです。そこで何人かの者達が武御雷の方がいいのではないかと言う意見も出てきています……私としては幾ら性能が良くてもコストと整備性が悪い機体を作りたくはありません。そこで紅蓮式式量産機と武御雷でトライアルを行ってもらい武御雷に勝って欲しいのです」

翔達もその言葉に納得していた。現場にとっては整備性が良くなければ命取りになる場合があるし、コストがかかり過ぎればまず数をそろえることが出来ない。だからこそそのトライアルにはある意

味現場の未来がかかっていると言ってもいいかもしれなかった。

『分かりました、ご期待に沿えるよう頑張ります』

「そう言えば一つ気になっていたのですが、舞鶴をサザールランドと呼ぶナイトメアがあるのに対し、紅蓮二式等は名前が一つなのは如何してなのでしょう?」

『すいません説明していませんでした。以前話しをした前の世界での事なんです。日本が開発していたものは名前がそのまま一つで、それ以外は外国で作られていて日本名が無かったので自分でつけました』

翔が異世界の人間だと知らない可憐と朱雀が居たが、パソコンの画面に打った返事を相手に見せるだけなので問題なく説明できた。

「納得しました」

翔の返事を見て殿下は月詠大尉と共に謁見の間を出て行ったが、紅蓮大将だけは一人残っていた。

「この度の任務ご苦勞であった。特に枢木少尉は特に色々とためになる事もあったであろう」

「は、はい！ 自分の力がまだまだ足りないのを実感いたしました。それに最新鋭ナイトメアを実際にこの目で見て、どれだけ凄い物か知ることが出来ました」

朱雀は緊張しながら紅蓮に返事を返した。

「そうか、所で篁中尉に紅月少尉、枢木少尉の實力は二人から見てどうであつた？」

「枢木少尉は十分に高い實力を持っていると思います。不知火で私と紅月少尉にきちんと着いて来て、合わせられた事から本人の能力も紅月少尉と同等近くのを物を持っていると思われます」

「私も篁中尉の意見と同じです。特に枢木少尉の反応速度はかなり高い物だと思います。突撃級等を紙一重でかわしていた所は凄かったです」

「そうか！ そうか！ 随分と高評価じゃないか枢木少尉？」

紅蓮大將が豪快に笑いながら朱雀に問いかける。

「はい、これからも精進したいと思います」

「そこでだ神風大尉、ナイトメア開発局に枢木少尉を置いて貰えないだろうか？」

その言葉には四人全員が驚いていた。

翔自身後でその話を朱雀に話してから、ナイト・オブ・ラウンズ十二の剣に引き抜こうと
していたのだから。

『それは構わないのですが、何故急に？』

願つても無い事なので反対する理由は無いが、疑問があるため翔は紅蓮大將に理由を聞いた。

「うむ。枢木少尉は身体能力が高く斯衛軍でも上位に食い込む程だ。だがこれからの日本を担って行く為にはまだまだ成長をして貰いたい。そこで同年代で同等の実力を持つ紅月少尉と言うライバルが居るナイトメア開発局で頑張って貰いたいと思ってな」

「……………えっ!?!」

朱雀と可憐の二人は紅蓮大将のその言葉にお互いの顔を見合わせ固まった。

『成る程、理由は良く分かりました。此方からも是非お願いしたいと思っていましたので是非お引き受けします』

「そうか！ そうか！ ではよろしく頼むぞ」

「ガハハ！」と豪快に笑いながら紅蓮大将は謁見の間を出て行った。

『と言う訳で朱雀さん、これから宜しくお願いしますね』

「はい、宜しくお願いします」

かくして、ナイト・オブ・ラウンズ十二の剣に三人目が加わる事になった。

Side 翔

謁見から戻りナイトメア開発局自室内に響くのは、僕がキーボードを叩く音だけ。

カタカタカタカタ、独特の音が鼓膜に伝わり、同時に画面がスクロールされて打ち込んだ文字の羅列が表示されていく。

ナイトメアの開発、武装や追加装甲をゼロから作り出す作業。まず初めに行くことは莫大なデータの入力。

唯依姉さんや可憐さんが蒼月や紅蓮二式で収集してくれた武器情報为基础とし、それを一般用に改めて調整し直し、現在開発中の紅蓮二式量産機月下の細かいデータを加味した上で導き出された結果

を武器基礎情報として入力していきます。

やること自体はそれ程難しくないのですが、いかんせん量が多過ぎます。そろそろ他の作業に移りたいのですが、これから先他の作業が追加されることはあってもこの作業が無くなることは無いと思われまます。

今の作業がどういう内容であろうと、情報を入力するという作業がこの先無い訳じゃ無いのです。と言うよりナイトメア開発局ではこれがもつ当たり前です。

つまり、最初から最後まで僕はひたすらキーボードを叩き続けま
す……

まあ、昔の仕事でも似たようなことしてたから別に文句は皆無ですが。

既に帝国技術廠で働くようになって約一年。暇な時にディスプレイを前にしてキーボードを叩き新しいナイトメアや装備を作るのが日課になりつつあります。

もつ一端の研究者ですかね？

そんな事を考えていると不意に部屋のドアが叩かれました。

ん？

僕は手の動きを止めずに画面の端に表示されている時間を確認すると、深夜午前一時過ぎ。

もうこんな時間になっていました……って言う事はもう終わらせる時間ですね。

僕は声が出せないので部屋には普通に入ってきてます。

「翔君今日は終わりにしましょう」

入ってきたのは唯依姉さんでした。その手には湯気を上げるカッブが二つ載ったお盆。

「まったく……私が止めないと頑張りすぎるんだから」

呆れたような、諦めたような、どっちとも取れる溜息を唯依姉さんは吐き、お盆を机の上に置きました。

『ごめんなさい唯依姉さん、でも今は出来る事をやって置かないと何時何があるか分からないから……』

「もう翔君は……はい！ 今日のもうお終い、無理をしても効率は悪くなるだけ、続きはまた明日にしましょう！」

唯依は腰に両手を当ててから少し前傾姿勢になって小さい子どもを優しく叱る姉のようだった。

『分かりました、唯依姉さん』

僕は言われた通りに作業の手を止め、作業内容を保存し、机のパソコンの電源を落としました。

「翔君は一つのこと集中するとそれだけしか見なくなってしまう

みたいね。時間間隔すら無くなるその凄まじい集中力には素直に感心するけど、無茶は駄目よ」

そうすると唯依姉さんが「私もよく根を詰め過ぎると同僚やおじ様から言われるけど、翔君も私と同じね」と優しく言われました。

「誰も睡眠時間を削ってまでして作れなんて言っていないのだから、毎日コツコツ少しずつやっていきましよう？」

こうして僕は今日の仕事を終わらせました。

先程唯依姉さんが持って来たカップの中身はホットミルク。

コーヒーや茶だと眠れなくなるから、唯依姉さんが気を利かせて淹れて来てくれたようです。

二人でカップを手にホットミルクを飲む空間は静寂で、僕にとっては一日の終わりを穏やかに告げる時間。

会話は無いに等しいが、僕は別に唯依姉さんとならそんなものは必要無いと思っています。

僕は喋れないのでそんな僕と二人つきりで居ると、誰もがこういう感じに会話が無い状態になるのは必然です。

唯依姉さんの方はニコニコしながらカップに口を付けてホットミルクを楽しんでいる様です。時折視線が合つと、優しく微笑んでくれます。

『楽しそうですね？』

「ん？」

気が付けば僕は問い掛けていました。

『なんか、嬉しそうだから』

一瞬、何を言われたのか理解出来ずにキョトンとしていた唯依姉さんだが、意味を理解すると誰もが見惚れる極上の笑みを浮かべています。

「勿論楽しいわよ」

『何で？』

「だって……最近忙しくてこうして二人でゆっくりとした時間を過ごせなかったでしょ？ でも今こうしている間は、私が翔君を独り占めしてるみたいじゃない」

どう返せばいいのか分からず僕は固まってしまい、何とも言えない沈黙が降り立ちました。

「さあそろそろ戻りましょう」

沈黙を破り、立ち上がって僕の手からカップを取るとお盆に載せて唯依姉さんは僕の手を取って部屋の外に出ました。

Side Out

翔も唯依も共にこの少しの幸せが、少しでも長く続くようにと切にそう願った。

18・日本への帰還（後書き）

アイデアを募集します！

兵器だけではなく人物から設定なども募集します！

19 光州作戦の悲劇（前書き）

お気に入りか500突破しました！皆さん有り難う御座います！
これからも頑張って書いていきたいと思えます！

19・光州作戦の悲劇

1998年1月28日

翔達が一足早く朝鮮半島から引き揚げて、日本に帰って来てから途轍もない激震が日本を襲った。

光州作戦の為に外向していた彩峰中將が、非難を拒む現地住民の救助を最優先する大東亞連合軍に協力。

彩峰中將は帝国派遣部隊の指揮を任されていた為、結果的にその行動が国連軍司令部の陥落と指揮系統の混乱を誘発し、国連軍は大損害を被ってしまった。

しかし実際には彩峰中將率いる帝国派遣部隊が、国連軍司令部の守備にまわっていたとしてもこの結果は変わらない筈だった。

だがこれを好機と思ったのが現在日本にいい感情を持たないアメリカや、アメリカの傀儡国連軍は敵罰を下すか彩峰中將を国際軍事法廷へ引き渡すよう要求してきた。

それに従えば軍部の反発は必至。逆らえば第四計画が失速という難局を、アメリカや国連は分かっていたのか内閣総理大臣榊 是親に、神風 翔が作る新型ナイトメアアウアロンに高天原をアメリカや国連に提供すればこの事は問題にしないと云ってきた。

最前線を預かる国家の政情安定を人質に取られ、如何し様もなくそれを受諾するしかなかった。

S i d e 翔

現在謁見の間には僕、ナイト・オブ・ラウンズ十二の剣、殿下、紅蓮大将、月詠大尉、巖谷中佐、榊総理、殿下寄りの政府高官、軍部高官、城内省、国防省、五撰家が集まり榊総理からアメリカと国連から告げられた要求について話している最中です。

「……と言う訳で御座います殿下。この要求は受けなければ我々日本は拙い状況に陥ることになります」

榊首相の説明が終わり現状の日本の立場がいかに拙い状況かが皆理解したようです。

「くっ！ アメリカめ！ それに国連はアメリカにこうする様に要求されたか！」

「しかしこの要求を呑まなければ第四計画も拙い状況に陥ることになる！」

「それだけじゃない！ 親アメリカ派の者達もこれを機に動き出すぞ！」

「そんな事になったら！？」

「中将を軍事法廷に引き渡すのは？ 此方のナイトメアの技術情報を漏洩させる訳にはいかないでしょう？」

政府高官の一人が急に軍事法廷に渡せばと言い出した瞬間に軍部高官からは怒声が響き渡りました。

「ふざけるな！ そんな事を認められるか！ それにそんな事をしてみろ、軍部の反発は必至だぞ！」

政府高官のその案に軍部高官は出来ないと理由を話し反発しているのです。

「ならやはりナイトメアと高天原アウァロンを提供するしかないのか……」

政府高官と軍部高官が言い争いを始めてしまいました。

「落ち着けい!!」

紅蓮大将の一喝でその場が静まり返りました。

ですけど大声を出すときは一言言っただけです……耳が……

「皆の者少し冷静になりなさい。翔殿、あなたはこの件どの様に思われますか？」

急に殿下に声をかけられたので吃驚してしまいました！

「殿下、いくらナイトメアの開発者と言えど今回の件に子供の言う事など」

政府高官がそう言い出すと

「いいえ、翔殿は当事者です。提供するとしたら翔殿にアメリカ、国連用のナイトメアを作ってもらわなければならないのですから」

殿下が政府高官の言葉に反論しました。

「そうですね、今回はアメリカの要求に従うしかないですね……高^ア天原にかんしては大事な部分はブラックボックスにして、ナイトメアは随分前に作った銃砲犬^{ガン・ルウ}を提供と言うのは如何でしょう？」

以前交渉用にナイトメア、銃砲犬^{ガン・ルウ}を作っておいてよかったです。

「銃砲犬^{ガン・ルウ}? 初めて聞く名前ですね? どの程度の性能を持っているのですか?」

やはり気になっているのか皆此方を注目しています。

『そうですね、舞鶴並位サザールランドです。ただ舞鶴サザールランドと違い砲撃戦が主となっている機体です』

「成る程、それなら問題はありませんね。銃砲犬ガン・ルウの詳細は後で提出してください」

謁見の間にいる全員が舞鶴並位サザールランドのナイトメアならと納得しているようです。

『分かりました』

それにしても結果として国連軍の陥落変わらない筈だったのに、彩峰中将の取った行動でこうなってしまうなんて誰も思わなかった筈です。

まんまとアメリカにしてやられましたね、損をするのは此方だけですか……

これから大変です……

Side Out

S i d e 唯依

「……と言う訳で御座います殿下。この要求は受けなければ我々日本は拙い状況に陥ることになります」

榊首相の説明を聞いて私は愕然とした。

あの状況では国連軍司令部の陥落は時間の問題だった筈！

それを彩峰中将に責任を押し付けたうえに、ナイトメアアヴァロンに高天原の提供迄してくるとは何処まで卑怯な奴等なんだ！

それに政府高官が彩峰中將を軍事法廷へ引き渡すのは？　と言いつ出したが軍部高官が反発したのは当たり前だ。

「そうですね、今回はアメリカの要求に従うしかないですね……高ヴァロン天原にかんしては大事な部分はブラックボックスにして、ナイトメアは随分前に作った銃砲犬ガン・ルウを提供と言うのは如何でしょう？」

翔君は銃砲犬ガン・ルウを提供すると言っているが成程、確かにあれなら提供しても問題ない。高天原ヴァアロンに関してはブラックボックスにして諦めるしかない。

だがこの借りは必ず返すぞアメリカ！

S i d e O u t

S i d e 可憐

ふざけるな！ 何故現地住民の救助を行った彩峰中將が責められなければならないんだ！

そのうえナイトメアアヴァロンに高天原の提供をしるだど！？

何処まで此方を馬鹿にすれば気が済むんだ！

篁中尉も手を強く握り締めているせいか小刻みに震えている。

政府高官は彩峰中將を軍事法廷へと言っているが、軍部高官の反論でそれはなくなった。

「皆の者少し冷静になりなさい。 翔殿、あなたはこの件どの様に思われますか？」

その後殿下が翔君に意見を聞いてきた。

『そうですね、今回はアメリカの要求に従うしかないですね……高ア天原ヴァロンにかんしては大事な部分はブラックボックスにして、ナイトメアは随分前に作った銃砲ガン・ルウ犬を提供と言うのは如何でしょう？』

以前翔君に見せてもらった銃砲犬^{ガン・ルウ}、あれは確か以前何かあったときの為に作っているって翔君が言っていたけどこういう時の為だったのかも……

銃砲犬^{ガン・ルウ}は火力重視の砲撃ナイトメア、アメリカなら喜ぶような機体だ。

だからと言って陥落した国連軍司令部を彩峰^{アウアロン}中将の責任にして、自分達はその罪を許す代わりにナイトメアと高天原の提供しろなんて！

そんな恥知らずの血が半分流れているのが嫌になる！

絶対に此の儘では済まさないぞアメリカ！

S i d e O u t

謁見が終わりナイトメア開発局に戻ってきた翔達。

「おかえり〜って何かあった？」

ラクシャータが出迎えながら翔達の顔色を見て何か有ったのかと思いを聞いてきた。

『実はアメリカと国連が彩峰中将の身柄を軍事法廷に差し出さないのなら、高天原とナイトメアを提供しろと言ってきました』
アウアロン

ラクシャータはその翔の打ち込んだ文を見ただけで、何が話し合われどの様な結果になったのかが分かった。

「はあー成程ね〜結果は何をしても変わらない筈だったのに、過程で日本側がつけ入れられるミスをしてしまい無茶な要求を受けたって事ね〜」

「何を暢気に言っているラクシャータ！」

唯依がラクシャータの暢気な返答に怒声をあげた。

「暢気にと言われても之ばかりは如何し様も無いじゃない？ 所でナイトメアは何を相手に送るの？」

「うッ！？ 確かに如何し様もないが……ナイトメアは銃砲犬ガン・ルウを提供する事になった」

その話しを聞いてラクシャータは笑い出した。

「アッハッハッハッハ！ 銃砲犬ガン・ルウにしたの？ 成程、いい選択ね」

未だにラクシャータは腹を抱えて笑っていた。

「ラクシャータさん、何故そんなに笑っているんですか？」

朱雀は笑っているラクシャータを不思議に思い問いかけた。

「そっか、朱雀君は銃砲犬ガン・ルウの事知らないんだっけ？」

「はい」

「銃砲犬ガン・ルウはね、量産はし易いけどナイトメアとしては何て言うかポソコツ？ って言うような奴なのよね。以前は何故こんなを作るのかと思って翔君に聞いたんだけど、交渉に使う為に作ってるって言うってたのよ。それが今回役に立ったわね」

「ポソコツ……ですか？」

「そう、ナイトメアのような機動力はなく、銃火器と数で攻めるよ

う作った機体。はつきり言ってアメリカが欲しがるような最新技術が詰まった機体じゃないわ。でも銃火器しか使わないアメリカにはピッタリと言えばピッタリかも」

「成程、良く分かりました」

「でも問題は高天原アサアロンよね〜ブラックボックスはきちんとしないと」

『ラクシャータさん、アメリカに高天原アサアロンを提供する事になってしまったので、もし何かあった時の為に高天原アサアロンを停止させる為、ラクシャータさんに任せていたゲフィオンディスターバーを造っておきたいんですが今どうなってますか？』

「翔君からある程度、理論から色々聞いていたから試作物は直ぐに開発に取り掛かれるわよ」

『ならお願いします。僕はこれから月下の開発を地下の研究員と話し合い、他の武器開発等を皇重工に任せたいのでその話し合いや、殿下へ銃砲ガン・ルウ犬の詳細が書かれた資料を送らなければならぬので』

「了解〜」

『唯依姉さん達は新装備のシミュレーションをお願いします。後で意見を聞いて作る時の参考にしたいので』

「了解、私達に任せて」

それぞれ皆動き出しナイトメア開発局も忙しくなりだした。

19 光州作戦の悲劇（後書き）

最近忙しくて更新が遅れそうですが必ず書くので安心しててください！
遅くならないかも知れませんが……
アイディア募集します！

20・新型武器シミュレーション

1998年2月5日 ナイトメア開発局研究室

ナイト・オブ・ラウンズ

十二の剣の三人は、研究室にある二台のシミュレータを交代で使いながら翔やラクシャータ、研究員の作った武器のデータ取りをしていた。

シミュレーションは実戦と同じ方式でBETAが出て来るようになってる。

紅蓮二式と蒼月の二機には跳躍ユニットを強化した物を脚に装着させ、さらに手、腕、肩、腰、脚、背中には新装備が着けられていた。

『こちらラウンズ1、ラウンズ2、これよりハドロンスナイパーライフルを使い、BETAの殲滅を開始する』

唯依がそう言い終わると研究室の画面に蒼月と紅蓮二式が現われ、ハドロンスナイパーライフルを構えてBETAを撃ち始めた。

一発一発が強烈な威力を誇りBETAを簡単に貫いていった。勿論高天原に搭載されているハドロン砲には遠く及ばないが、その分連射が可能で電気エネルギーが蓄えられたエネルギーファイラーを取り替えるだけで、また直ぐ撃てる為使い勝手がとてもよかった。ただエネルギーファイラーを高エネルギーに転化するユグドラシルドライブと、核のコアルミナスがハドロンスナイパーライフルには大きさに搭載できなかった為、エネルギーの消費が激しかった。

唯依はハドロンスナイパーライフルの威力、性能に心が波立つのを感じた。

だがそれも一瞬のこと、すぐさま感情を制御して平常心を取り戻した。

このように瞬時にそれを可能とする唯依の意志力は並大抵ではない。だがそれは、武家に生まれ、幼少から精神鍛錬を重ねてきた唯依にとっては造作も無い事であった。

『……これは状況に合わせて使いこなす事ができればかなり有効な武器になりそうだ』

その呟きは、機体を介して低く唸る主機駆動音にかき消された。

『ラウンズ0よりラウンズ1とラウンズ2。BETA群の存在を確認。前方11時の方向、距離約8000!』

ヘッドセットのスピーカーから、戦域管制官の声が響く。唯依はゆっくりと深呼吸をした。「気持ち熱くなっても、心は常に冷たく保て」 彼女にそう教えた古参衛士の、大きな傷跡のある顔が脳裏に浮かんだ。

『ラウンズ2、直ちにハドロンスナイパーライフルを投棄。前に出てBETAを潰すぞ!』

二機は強化された跳躍ユニットで一気に前方へ跳んだ。

『ラウンズ0よりラウンズ1とラウンズ2。大規模BETA群が其方へ移動中。近いぞ、注意しろ!』

警告を受け唯依は自機の索敵情報へ目をやると、其処には数え切れない程の敵影があった。

『こちらラウンズ2。これより拡散輻射波動を撃ちます！』

『了解、着弾と同時に1500まで進出し攻撃を開始する。可憐も発射ご此方の支援を』

唯依のレシーバーに可憐の『了解』が聞こえてきた。

それと同時に紅蓮二式の右手から機体の色に相応しい紅い輻射波動がBETAに向かって放たれた。

爆発。瞬間、輻射波動が着弾した場所から来た爆風が機体を揺さぶる。

『行くぞ可憐ッ！』

噴射跳躍によって一気にBETAとの距離を詰める唯依と可憐。

それをめがけて殺到するBETAの群れ 戦力比は優に100対1以上。だが、そのような状況にあっても、少しも怯む事無く攻撃を開始する唯依と可憐は、瞬く間に死骸の山を築き上げて行く。

36mm砲を撃ち屠っていくが続々と押し寄せてくるBETA郡。

だがそれに怯む事無く立ち向かって行く。

膝と腰につけられた四つのスラッシュハーケンで近くにいた突撃

級を貫通させていった。だがこのスラッシュハーケンが先がMVSの剣と同じようになっていて、新兵器だった。名前は『M V S H』とあっており、使い勝手がかなり良かった。さらにこのスラッシュハーケンを回転させて円盤状にし、打ち出し、『チャクラムスライサー』として切り裂く事も可能としていた。

『ラウンズ0よりラウンズ1、ラウンズ2、後方に光線級を確認した。至急迎撃に当たれ』

『了解』

直ぐに二機は自分達の移動に邪魔なBETAだけを倒し、光線級迎撃に向かった。

『ッ!? 思ったより光線級の行動が早い! 可憐レーザーが来る、ブレイズシールドを使うぞ!』

『了解! 直ぐに準備します!』

二人は肩の後方に付けられていた盾を取り外し、正面に展開させた。展開させた盾はナイトメアをも隠れる程の大きさになり、スイッチを押す事でブレイズルミナスを展開する事が出来た。

そこに光線級からレーザーが放たれ、ブレイズシールドに着弾した。しかしそのレーザーは盾を貫通する事はなく消滅した。

『……凄いなこの盾は、普及すれば必ず役に立つだろうけど、翔君が言うにはかなりのコストが掛かるから全軍には無理と言っていたしな』

『本当に凄いです！ これならナイトメアや戦術機単位で持たせる事でかなり被害が減らせる！』

レーザーを防ぎきった二人は盾を元に戻し、すぐさま光線級に向かい撃ち殺していった。

『ラウンズ1、ラウンズ2に告ぐ。最後の新兵器を使うぞ 今回はその場に兵器を出現させる』

出現した大型コンテナを可憐は唯依の機体に接続し、唯依の後方に下がり正面から敵を迎え撃つ体勢を整えた。

本来なら最低小隊で運用する兵器なのだが今回は二機での運用だ。

この兵器は突撃級正面の頑強な装甲殻を戦術機で破るための物でもあった。戦術機第三世代の不知火の最大火力である120mm砲の至近距離砲撃ですら容易には貫けないからだ。

コクピットに起動回避を促す警報が鳴り響く。だが、唯依と可憐の二人の衛士は微動だにせず、網膜に映る虚像を睨み付けていた。

『可憐……準備は良いな？』

唯依は可憐にそう呼びかけると、残弾僅かな87式突撃砲を投棄。機体の右肩に固定された異形の兵器、蒼月の全長ほどもある大型砲の安全装置を解除した。

『試製八ドロン照射砲』 帝国軍技術廠ナイトメア開発局や第壹開発局が準備した新型に火が入り、甲高い充電音が鳴り響く 突撃級の群れを表す光天が危険領域に侵入する 機動回避はもう間

に合わない。

『撃つぞッ!』

その瞬間、通常のものとは明らかに異なる砲声と閃光が周辺に充満した。

ハドロン照射砲は、背後に設置されたコンテナからエネルギーが絶え間なく供給され、遠雷に似た不吉な響きが、機体を介してコクピットに伝わる。

唯依は歯を食いしばり、ターゲットサイトに集中した。すると、敵を表す光天は先程と同じ場所で点滅していた。

ライブカメラに焦点をやる。唯依は思わず「凄い……」と小声をもらしてしまった。高天原のハドロン砲で見慣れた筈だったが、一ナイトメアがこれほどの光景を作り出すと改めて凄いと思ひ直す程だった。

そこには、次々に当たった部分が抉られ消滅していき、残りは余波で次々にミンチと化してゆく突撃級の補正映像が映し出されていたのだ。

あの頑強な装甲殻が、まるで粘土のようにひしゃげ、飛散しているではないか。新兵器のテストは成功。いや、大成功と言ってよかった。津波のように押し寄せていた突撃級の大規模集団を、たった二機のナイトメアが完全に堰き止めているのだから。

『ふっ……』

制御のトリガーを必要以上の力で握り締めている自分に気付き、唯依ははにかみ笑いを浮かべた。前なら新型兵器等と言う代物を押し付けられたら、苛立ちや不安が募る物だが照射砲の威力が吹き飛ばしてしまっていた。

『可憐！ 兵器使用自由！ 一匹残らず片付けるぞッ！』

『了解！』

唯依の号令に呼应し、後方にいた可憐が側面に廻り攻撃を開始。

このまま押し切れれば 唯依がそう思った瞬間、目の前に警告ウインドウが立ち上がり、警報が鳴り響いた。反射的に目をやった振動センサーは、攻撃と爆発を拾って真っ白に振り切っている。

『なにいッ!?!』

唯依は我が目を疑った 後方に無数の要撃級が姿を現したからだ。このままではやばいと一瞬で我に返った唯依は、可憐に矢継ぎ早に指示を出しながら、右翼の敵集団を照準する。

『このおおおおッ!』

次々に襲いかかってくる要撃級を薙ぎ払うかのように、可憐の紅蓮二式は近くの敵はMVSやMVSHで屠り、遠くの敵は輻射波動を使い消滅させていった。

唯依の方もハドロン照射砲を撃ち、突撃級の装甲殻を撃ち貫いていき唯依はさらにトリガーを引き続けた。

不意に、機体の異常を知らせるメッセージが表示された。

『 エネルギー切れに砲身過熱……！？ 』

大口径ハドロンを連射するハドロン照射砲は、小型したために通常よりも比較にならないほど砲身が過熱される。そのため大型の強制冷却装置が装備されているのだが、警報はその機構になんらかの不具合が発生した事を知らせていた。今やハドロン照射砲は安全装置が作動し、完全に沈黙してしまった。

唯依は咄嗟に、射撃管制を予備の突撃砲に切り替えようとしてハッ息を呑む。

『 ツ！？ 』

目の前に現われた、顔に見えるおぞましい巨大器官に唯依は戦慄した。

要撃級の腕が振り下ろされる。唯依は素早くMVSHを発射したが、僅かに遅かった。

『 ラウンズ1、戦闘継続不能と判定 』

赤灯に照らされたシミュレータのコクピットを背景に、「仮想戦闘プログラム 終了」と書かれたダイアログが浮かび上がった。

「やっぱり新型だけあって作動不良ですか？」

シミュレーター1号機を降りた唯依に、2号機から降りてきた可憐が話しかけてきた。

「可憐それは違うよ……要撃級の破片で冷却装置をやられたんだ。作動不良じゃない」

そこに朱雀がやって来て説明をした。

「何時の間にか名前と呼ぶようになっていたんだな」

「はい、同じ階級なのでお互い遠慮は無しにしようと話したんです」

「そうか、それは良い事だ」

「それよりも朱雀さっきの話だと、防御力に難ありって事？」

「いや、あそこまで敵の肉迫を許してしまえば、防御力以前の問題になるね」

「最後と言えば最後のMVSH、使い慣れていれば間に合っていたと思いますよ」

「言つな……対応できなかったのは私だ。使い慣れていないと武器のせいにするほど堕ちてはいない」

結局唯依がやられた事により可憐もその物量にやられてしまった。唯依が無事だったのなら生還も可能だった筈であった。

「不覚だ。あそこでの接近に対応が出来なかった……」

「中尉に今すぐ新型等を完璧に使いこなすなんて出来るなら、世界は当の昔にBETAを滅ぼしていますよ」

「そうですね」

「……可憐、枢木」

唯依は可憐の屈託の無い笑顔を見て、自分が部下達に掛けている負担を認識した。そして心の中で「またやってしまった」と呟き、

己の浅薄さを後悔した。本人にもわかつてはいるが、父親譲りの性の性分、なかなか直せるものではない。

「ふッ……上官をバカにするな」

可憐の心配りに、唯依は笑顔で応じた。

20・新型武器シミュレーション（後書き）

関係ないですが、はやく原作に入りたいですねー

今回は色々感想に書いてもらった武器等を登場させてもらいました！
！アイデアをくれた方々有り難う御座いました！
引き続きアイデア募集！

21・極東の魔女と万能侍従（前書き）

思ったよりも早く書けました。

21・極東の魔女と万能侍従

「初めまして香月 夕呼よ、神凧 翔大尉」

そう言い翔に右手を差し出してきた人は、極東の魔女と言われし人物であった。

翔は何故自分は今、色々と有名なこの人物と会っているのかと右手を出しながら呆然としていた。

S i d e 翔

シミュレータで唯依姉さんや可憐さん達がデータ取りをしている時、僕は自室でパソコンの改造を行っていました。

これで入力した文字は言葉として音声出力出来るようになりますね！ 後はこれを左腕に装着して……よし！ これで一々パソコンを持ち運ばなくてもよくなりましたね。パソコンと同様の機能なのでデータもこの左腕に付けた装着型パソコンに入ったのです！ これで両手が自由です！

僕は一息ついていると、自室の出入り口の方からノックが聞こえてきて、研究員の一人が入って来ました。

「失礼します。翔君、お客様が来たのだけど如何しましょう？」

客？ 予定に入っていない筈ですが誰でしょう？

『誰が来たのですか？』

翔の左腕に付けられた装置から声が出たのに研究員は驚きながらも返答を返した。

「それが香月 夕呼博士だそうです」

っえ！？ 何故極東の魔女が！？ ううー色々な噂を聞い

ているので会うのは怖いです……

『わかりました……ではここにお呼びして下さい』

「わかりました」

研究員が部屋を出て行ったのを確認してから、溜息が出てしまったのです。一体何の用事でしょうね……気合を入れないと！

・
・
・
・
・
・

そして改めてノックが部屋に響いてきました。

『どござ』

部屋に入ってきたのは紫色の髪に目がキリツとしていて、体系も細身ながら出るところは出ていると言う誰が見ても美女と呼べる人が白衣を纏いながら入って来ました。

「初めまして香月 夕呼よ、神凧 翔大尉」

右手を差し出ししながら挨拶してきました。

『初めまして、神凧 翔です。香月博士』

僕も右手を差し出しながら挨拶を返しました。

香月博士の目を見ると何処か此方を観察？ しているかのような目をしています。

ううーだから会いたくなかったのに……

「急な訪問にも関わらず御免なさいね。此方に来るついでに如何しても会ってみたくてね」

『そうでしたか、香月博士にそう言ってもらえて光栄です』

「あら？ 私の事知っているの？」

『色々有名ですから香月博士は。極東の魔女と呼ばれ、詳しくは知りませんが日本が主導の極秘計画の中枢を担っている方……』と言う事は知っています』

「あら？ そんな事まで知っていたのね。ならお互い少し話しましょうか」

こうして極東の魔女との話し合いが行われました。

Side Out

「あなたが国連とアメリカに鉄砲ガン・ルウ犬と高天原アウアロンを提供する事になった
そうだけど、どんな物が詳しく聞いてなかったから教えてくれない
？」

『別に提供する事になる物なので構いませんよ』

翔が机の上に置かれていた書類の一部を夕呼に手渡した。

手渡された夕呼は一枚一枚目を通していくと口元を吊り上げて二ヤリと笑った。

「へえ、あなたの造った紅蓮二式、蒼月、サザードネグロスター舞鶴、紫炎とは随分と違
うじゃない？」

『まだ自国にも他国にも出していなかったナイトメアなので違うのは当たり前ですよ』

そう言う翔に夕呼は更に口元を吊り上げて笑った。

「そうじゃないわよ。あれだけのナイトメアを作っておいて何でこの鉄砲犬ガン・ルウだけは欠陥品のような物になっているのかよ。それにアメリカと国連に条件を出されてからこのナイトメアを完成させるだけの期間が短すぎるのも気になる点ね」

翔は少し目を通してただで鉄砲犬ガン・ルウを欠陥品と言い、開発期間の短さを指摘した夕呼にやはり凄いと思う反面油断できない人だと判断していた。

『流石ですね……欠陥品と言いますが元々これは交渉用に作っていた試作品でしたし、アメリカなどの戦法には合っている機体ですよ。なので開発期間についても以前から作っていたからと言う事です』

翔は少しの嘘を混ぜながら本当のことを話した。

「成程ね、まあ私にはアメリカの馬鹿がどうなるのが知ったこつちやないけどね」

余りにも堂々としたアメリカ力否定発言に翔はポカンとしてしまった。

「なによゝそんな驚いた顔をして、ちよつと本当のことを言っただけじゃない」

『いえ、余りにも堂々と言つてのけたのでちよつと吃驚してしまっただけです』

「あらそう、そう言えば以前からあなたにあつたら聞いてみたいと思つていたことがあるのよ」

『何でしょうか？』

翔はこの時嫌な予感がしたがそのままその質問を聞いてみた。

「なぜサクラダイトと言うレアメタルをいきなりナイトメアの駆動系やエナジーファイラーに使おうと思つたのか？ それとなぜナイトメアには開発過程が存在しないのか？ この二つはどうしても普通にはありえない事よ？」

その質問を聞いて翔は驚きで一杯だった。たしかに普通ならいきなり発見されたサクラダイト等を駆動系やエネルギー関係に使おうとは思わないし、ナイトメアに関しては行き成り開発過程なしで完成させたら確かに怪しむには十分の事だった。

『サクラダイトは発見して調べた所、電気を蓄える事が出来ることが判明したのでそれをエネルギーにした方が良いと思つたので、エナジーファイラーを開発しました。唯それだけでは最新型のナイトメアにはエネルギー不足だったので、さらにエナジーファイラーから供

給されるエネルギーを高エネルギーに転化する為に、サクラダイトで作ったユグドラシルドライブ機関を作って効率化を図りました。ナイトメアの開発過程に関しては、戦術機等参考に出来る物が沢山あり参考に出来たためですよ」

咄嗟に出た言い訳だったが夕呼の方は目を細めながら聞いていた。

「そう、まっそう言う事にして置いてあげるわ」

『はは、わかりました』

「それじゃ今日は失礼するわね。そうそうアメリカがキナ臭い動きをしているから身の回りには気をつけなさいよ？　じゃ、今度何かあった時には手伝って頂戴」

そう言いながら後ろ向きに手を振って部屋を出て行く夕呼を見ながら、翔は改めてこの人は敵に回したくない人だと思った。

「失礼します」

ノックされ部屋に入ってきたのは、殿下の護衛の月詠大尉だった。

翔は何かあったのかと思い内心びくびくしていた。

『今日は一体どうされたのですか？』

「殿下がお会いになりたいそうです」

月詠は淡々と用件を翔に伝えた。

「その際篁中尉にも同行してもらってくださいとの事です」

『わかりました、直ぐに篁中尉と向かいます』

「翔殿、篁中尉、急な呼び出し申し訳ありません」

今謁見の間では悠陽、月詠大尉、唯依、翔の四人がいた。

「実は今日翔殿達に会ってもらいたい方がいるのです」

『会ってもらいたい方ですか？』

翔の返事が聞こえてきたのに悠陽が驚いた顔をした。

「音声が出るようにしたのですか？」

『はい。今のままでは何かと不便でしたので』

「私も先程此処に来る途中に急に音声を聞かされ驚きました」

唯依も此処に来る途中に腕につけられている機械から声が出ることに驚いていた。

「そうでしたか、では続きを。その方の一族は代々五摂家を守ってきた一族であり、その当主に至っては自身が相手を認めない限り、將軍ですら守護することはないと言われています」

「殿下、その方が何故翔君に？」

そのような人物が急に翔に会いたいと言う事実には唯依は驚きを見せた。

「それはこれから説明します。咲世子さん入ってきてください」

殿下がそう呼ぶと温和で物静かそうな感じの女性が部屋へ入って来た。

「お初にお目にかかります。篠崎流37代目篠崎 咲世子と申します」

現われた人物は翔にとっては驚きを隠せない人物であった。かつての世界で共にルルーシュ陛下に最後までついて行き、その忠誠心はかのジェレミア卿をも唸らせた程の人物だったからだ。さらに言うなら戦闘や諜報は勿論の事、炊事、洗濯もプロ級にこなせる人だ

った。

『僕はナイトメア開発局局長 神凧 翔大尉です』

「私はナイトメア開発局副局長 篁 唯依中尉です」

「お互いに紹介が終わった所で本題を。実は咲世子さんを翔殿の護衛兼侍従をやって貰いたいと思い、こうして翔殿とお互いお会いさせるためにお呼びしました」

その事に翔と唯依両名が驚き、その様子を咲世子は笑顔で見えていた。

「元々翔殿に護衛は考えていたのですが、この度どうも他国が色々怪しい動きをしているので直ぐにでも護衛をつけたいと思います。それに咲世子さんは有能ですよ？ 篠崎一族で未だに自分の護衛対象を持っていませんし護衛は勿論の事、炊事、洗濯、戦術機やナイトメアにも乗る事ができこれ以上の方は護衛として滅多にいませんよ？」

『ですが自身が認めた方しか護衛をしないのでは？』

「その心配には及びません。私は翔様の事を既に認めていますので」

そこで咲世子自身が話し始めた。

「えっ！？ ですがまだ今日出会ったばかりで何故？」

唯依が咲世子にその疑問をぶつけた。

「確かに今日出会ったばかりですが、以前から殿下よりお話しを聞かせて貰い、他の方々からもお話しや噂も聞こえて来ていました。そして実際日本人にお会いして私が護衛するに十分値する人物だと思いました」

翔は咲世子に真正面から褒められ、顔を赤くしていた。

『有り難う御座います。ではこれから宜しくお願いしますね』

翔は唯依に身体を支えてもらいながら頭を下げた。

「はい。翔様、唯依様、これから宜しく申し上げます。お二人とも私の事は咲世子とお呼びください」

咲世子も翔の目の前に来て綺麗に頭を下げた。

「これからお互いに翔君を守って行こう。咲世子さん」

唯依は咲世子に右手を差し出した。

「はい。宜しく申し上げます唯依様」

お互いに握手をして守る者を確認し合った。

21・極東の魔女と万能侍従（後書き）

アイディア・感想募集中！

22・各々の思惑（前書き）

恐らく書き直す事になります。最近忙しくて中々書けないので変になったりしてますので……

22・各々の思惑

1998年2月10日

翔は現在日本帝国の第三地下格納庫で月下の作製や、殿下の許可を得て統一中華専用サザランドに舞鶴の改修を行っていた。今では此処で独自の裁量を持ってナイトメアを造る事が出来る様になっていた。最初、紅蓮二式を造ったときは殿下の許可を得て漸く此処で造る事が可能だったのだ。だから蒼月等は皇重工に頼み造っていた経緯があつた。それが今は斯衛軍等が使う最新鋭の物は此処等で造り、サザランド舞鶴や紫炎サザランドの様な外国にも売却する機体は皇重工の工場等で造り輸出するようサザランドにしていた。だがアメリカはこれには手を焼いていた。斯衛軍等が使う物は手に入れる事は愚か、情報さえも中々手に入れられず이었다。さらに手に入れやすい舞鶴サザランドでさえ皇 神楽耶の手腕により入手しにくい状況だ。それでも同盟を結んでいる為日本帝国に圧力を掛ければまだ舞鶴等のナイトメアは皇重工から知られない様に何とか手に入れる事は出来る、が、サクラダイトは完全に皇重工が握っている為、未だ手出しが出来ないでいた。

だがアメリカや国連は光州作戦において思い掛けないチャンスが巡って来た。日本帝国軍の彩峰中将が現地住民を助ける為に勝手な行動をし、国連軍に壊滅的な被害をもたらした。だがそれは時間の問題だった筈なのだが、日本にその責任を押し付けアメリカと国連は新しく造られていたとナイトメア鉄砲ガン・ルッ犬と光州作戦アで使われた高天原ヴァロンと言う艦を、彩峰中将の罪を無くす代わりにと行って手に入れた。

そして翔は先日、前の世界で中華連邦が使っていたナイトメア「鋼體ガン・ルッ」を、銃火器に特化し造り直していた新生「鉄砲犬ガン・ルッ」に改修し、

ブラックボックスを付けた「高天原^{アウアロン}」と共に国連とアメリカに送った。

S i d e アメリカ

「漸く日本帝国から神風　翔が作ったナイトメアガン・ルウとアヴァロンが送られて来ましたな！」

一人の政府高官が先日送らさって来たガン・ルウとアヴァロンについて話し出した。

「しかし調べさせた所、ガン・ルウのOSやアヴァロンに至っては殆どがブラックボックスになっていて、無理に解析しようとしたらどうなるか判らないそうだ。だから今の所動かすことは出来ても、解析には危険が伴うな」

軍部高官が顔を顰めながらブラックボックスの存在に苛立ちを見せていた。

「それだけではない。ナイトメア等にはサクラダイトが使われているのは知っているだろう？ アヴァロンを動かすにはエナジーファイラーが多く必要になる。だがアメリカのサクラダイトの輸入はご存知の通り日本帝国ではなく皇が主導で行っている為、少量しか輸入出来ない。自国でエナジーファイラーを多く造るのは無理だ。このままではせつかくのナイトメア等が宝の持ち腐れになってしまう」

まったく忌々しい限りだと呟いている。

「エナジーファイラー以外では駄目なのか？」

「好ましくは無いな……あれらはユグドラシルドライブ機関によって、エナジーファイラーに蓄えられている大量の電力を高エネルギーに転化させている。もしそれ以外の物を使うとすればエネルギー不足でハドロン砲を撃つたり、ブレイズルミナスの展開に不備が生じる可能性が高くなる……そうなってしまうては宝の持ち腐れだ」

「くそッ！ せつかく日本帝国から最新鋭技術を手に入れる事が出

来たのに、エネルギーで問題が出てくるとは！」

机を思い切り叩き顔を顰めさせていた。

「仕方が無い。エネルギーに関しては今現在あるエナジーファイラーを使いながら考えていくとしよう」

「そうだな……今回は楽に事が運べて幸運だった。もう一つの件はどうなっている？」

「それについても準備が整ったら直ぐに行動に移すそうです」

「そうか、我々アメリカの為に必要な犠牲だ。何としても成功させなければ！」

「全ては我々アメリカの為に！」

「「「「「アメリカの為に！」「「「「」

Side Out

S i d e 夕呼

「香月博士にはこちらのガン・ルウとアヴァロンについての解析をお願いしたい」

まったく……私は暇じゃ無いつての！ 解析ぐらい自分達でなさいよ！

「お言葉ですが解析なら私じゃなくて他の技術仕官でもよろしいのでは？」

「それが……ガン・ルウのOSやアヴァロンに至っては殆どがブラツクボックスになっていて、下手に弄って問題が出たら困るのだよ」

それこそ汚いまねしたあんた達の責任でしょうが！ 私は研究で忙しいし、あの神凧 翔やラクシャータ・チャウラーが態々ブラツ

クボックスにしたのならどんな仕掛けがあるかわかったもんじゃない！ 私は勝てる勝負しかしたくないのよ！

「だとしたら私としましても無理ですわ。なんて言っただってかの天才神風 翔と同じく天才のラクシャータ・チャウラーの二人が手掛けたであろうブラックボックスですよ？ 問題が出るどころか下手したら再起不能やウィルスの類が入っている可能性もあります」

「なッ！？ 謝罪として送られてきた物にそんな事をすると言っのか！？」

何が謝罪よ……偶々上手い具合に罪を擦り付けて強奪したような物じゃない。私だったら爆弾を詰め込んで送ってやるわ！

「ええ、私も今回謝罪としてこれらが送られて来た経緯を知っていますので、可能性としては無いとは言いません」

私が経緯を知っていると目の中の男は黙り込んだ。

「しかしそんな事したら、それこそ日本帝国は不利になると分かっているのでは？」

「それを分かっているでやるとしたら？ 証拠が残らないようになっている可能性が高いですね……解析した瞬間に全てのデータを消去デリートしてしまえばこちらからは何も言えません。例えブラックボックスを解析しようとして全てのデータが消えたと相手に言っても、勝手に解析をしているこっちが悪い相手はそれこそ知らないと言っているでしょう」

「くッ！ ならこのまま運用するしかないと言っのか……」

まったく、それ位誰にでも思いつくことでしょうに……これだから何も考えていない連中は嫌になるのよ。

ぶつぶつまだ何か言っているけどさっさと出て行ってくれないかしら……

「仕方が無い。今日はこれで失礼する香月博士」

やっと出て行ったか……はあ、神凧も色々と大変ね〜でもアヴァロンの方は私が使わせて貰おうかしら？ ガン・ルウは要らないけど、アヴァロンは神凧自身が使っているから安全や保障もばっちりだろうし。

そうと決まれば私の下に来るように色々と手筈を整えないといけないわね。

Side Out

Side リー 黎・星刻 シク

「星刻様、日本帝国の神凧大尉より連絡があり統一中華戦線用にサザerlandを改修し送るそうです。そしてブレイズルミナスの方はまだこちらに提供するには時間が掛かるそうです」

「そうか……報告ご苦労、香凧」

ブレイズルミナスはやはり簡単にはいかないか……それに国連とアメリカに日本帝国はしてやられた為、今は色々大変か……今迄のサザerlandを統一中華戦線用に改修して貰えるだけありがたいと見るべきだな。

「所で星刻様、近々日本へ行かれるのは本当なのでしょうか？」

「そうだ、元々行くつもりではあったのだが、神凧はこちらへ統一中華戦線用に改修したサザerlandを送ると言っているのだ。ならば我々も約束通り日本への援軍を出すのは当然だろう。恐らく次の

BETAの目標は日本になるのだから」

「確かに朝鮮半島も墮ちた今、次は日本になる確率が高いですね」

「それにこれは好機でもある。ここで日本帝国に貸しを作れば色々と便宜を図ってもらえるかも知れん」

天子様を大宦官の手から救う為には、奴等の持つ数だけはい多い部隊とやり合わなければならない。

其の為には神風の持つ技術が必要になるからな。

Side Out

S i d e 咲世子

今日も私は可愛らしい主のお世話をしています。

しかし部下の報告では、最近翔様の周辺で怪しい動きを見せている者達がいるとの報告が挙がって来ていましたので調査をさせました。が、どうもアメリカの影がチラついていきますね……一応同盟を結んではいますが、あの国は自国の為なら暗殺等も行いますからね……日本の政治家や国民は親米派が結構いますから色々干渉もしてきますし、翔様には何の負担もかけないように注意しながら排除しなくてはなりませんね。

『咲世子さん、何か考え事ですか？』

いけません！ 翔様に心配を掛けてしまうなど、従者としてやってはいけない事です！

「はい、今日の夕食の献立を考えていました。翔様に喜んでもらえるように」

『心配しなくても毎日美味しいですよ。唯依姉さんもととても褒めていましたし』

「そう言って貰えまして恐悦至極です」

きちんと戦闘や諜報だけではなく料理等の修行もしておいて正解でした。主の為に役に立つ事こそ私の喜びです！ 今迄は主に相応しいと思えるほどの方はいらっしやいませんでした。殿下ならとも思いましたが既に護衛がいたのでそれも無理でした。ですが今は翔様にお仕える事が出来て幸せです。今迄主が居なかつた事が翔様への出会いを作ったと考えられますね。

「翔様、この月下は斯衛軍だけに配備されるのですか？」

『そうですね、当面の間はそうなると思いますけど……』

「どうかいたしましたか？」

『一人日本帝国等に貸しを大量に作っている人がいるので、もしかしたら交渉次第ではそちらに数台程提供する事になるかも知れませんがね』

成程、かの極東の魔女ですね……確かにそれなら可能性としてありますね。

『でも將軍や将官用に作るうと思っっている月下の上位機種の新月や暁は完全斯衛軍専用になりますよ』

「そうでしたか、そう言えば翔様がお部屋で設計をされている機体の方は、斯衛軍では使われないのですか？」

『白兜トッコウですか？ あれは朱雀さんに乗って貰おうかと思っています』

「あれ程の性能を誇る機体に唯依様や可憐様じゃなくても乗れるの

ですか？」

『はい。朱雀さんは二人に負けない程の実力があるんですよ？ただ、今迄彼の能力についていける機体が無かった為にそれ程の戦果を残してはいませんでした』

三人とも凄いですよね？ と、翔様が苦笑しながら話してくださいました。

「そうだったのですか」

「翔君〜！」

あら、唯依様と可憐様が迎えに来ましたね。

「翔様、迎えも来た事ですし今日は戻りましょう」

『そうですね！行きましよう咲世子さん！』

私は翔様の車椅子を押しながらお二人の所へ向かった。

さあ、翔様の為に今日も美味しい物を作りましょう！

Side Out

22・各々の思惑（後書き）

感想・アイデア募集してます！

23・トライアル(前書き)

遅くなりましたが改めて続きをどうぞ！

23・トライアル

1998年2月25日

Side 翔

うーん最近は何が疲れていますね。ここ数週間の平均睡眠時間は一日あたり4時間を切っているのですから仕方が無いですね。咲世子さんに優しく起こされた僕は、大きな欠伸を一つして今日も地下格納庫に咲世子さんと唯依姉さんとの三人で向かっています。しかし今の季節は未だに冷たい空気が頭に凍みますね。

Side Out

「翔君、遂に今日は月下のトライアルの日ね。殿下もお見えになる
って言うし頑張らなきゃね」

『はい。今回のトライアルで武御雷よりも良い成績を出せば、次期
斯衛軍主力機になりますから！武御雷も性能は悪くは無いみたいで
すが、余りにもコストが掛かりすぎますし、整備性が悪すぎますか
ら量産には向いていません』

「そうね……って、今日はまた随分皆格納庫へ集まるのが早いじゃ
ないか？」

「お？ 篁中尉に翔君じゃないですか」

『班長おはよう御座います。それにしても皆さん今日は何時にもま
して早いですね？』

「おはよう御座います。皆が早いのは当たり前ですぜ！今日は俺
達は何日もかけて作り上げた月下のトライアルの日なんですから！」

やる気の入った班長と話をしていると奥から二人の男女がやって
きた。

「おはよう翔君！ 私達ナイト・オフ・ラウンズ十二の剣も色々とシミュレータや実機でテ
ストしたりしてたから、今回のトライアル楽しみで早く来ちゃいま
した！」

「おはよう御座います」

班長と話していた翔達に話しかけて来たのは可憐と朱雀だった。

「おはよう二人とも。しかし可憐に朱雀、二人も随分早いじゃないか？特に可憐は何時も朝は眠そうな目をしているのに」

「朝早くに目が覚めちゃいました」

アハハツと頭をかきながら可憐は誤魔化していた。

「僕の方は可憐に叩き起こされました……」

朱雀はジト目で可憐を見つめた。

「うッ！？ べ、別に少し早く起こされたくらい、いいじゃない！」

「まあ別にいいけどね」

やれやれと言った風に朱雀は肩を竦めた。

その後班長は冬の早朝に頭から水をかぶっていた。そこに他の整備士もやって来て班長に挨拶をしながら声を掛けて来た。

「皆さんおはよう御座います。所で何してんですか班長？ こんな寒い日に頭から水をかぶるなんて？」

「……目を覚ますためだよ、今日のトライアルの準備が終わったのが3時間前なんだよ」

それはそれだと、整備士の彼女は笑っていた。

「……お前もこんな時間に来るとは随分と気合が入っているみたいじゃないか？」

頭を振って水滴を飛ばしながら班長は聞いてみた。

わかります？ と彼女はその場でストレッチをしながら返事をした。整備士にしては鍛えられたその体はしなやかだった。

「私が初めて造るのに携わったこの月下が次期斯衛軍主力機争いとして、同じ候補の武御雷と争うんですよ？ それも殿下の前ですよ？」

次期主力機に選ばれると言うのは名誉な事だ。その機体が一級品である事を世界も認めるといふ事なのだから。彼女に気合が入るのも無理はなかった。

「それに今日のトライアルは翔君やナイトメア開発局所属の私達の威信がかかっていますからね」

可憐なんかはその通りだと頷いていた。

ストレッチを続けながら彼女が言ってきた。威信ね 確かに。

世界中で今話題の神風大尉が設計した機体なのだから、失敗など出るはずもなかった。

「ああ、そうだな。俺達全員で睡眠時間を削って造った傑作機だからな」

そうして話していると回りが騒がしくなってきた。どうやら殿下や偉い方々が来た様だった。

「翔様、そろそろ……」

『わかりました。では唯依姉さん、可憐さん、朱雀さん、そろそろ行きましょう。では班長また』

「はい」

咲世子が声を掛け促して来たので、翔は唯依達と共に殿下達とトリアルを見る見学場所へ向かった。

見学場所では直接目で見ることや、大型ディスプレイにトライアルの映像が表示されて、見る事が出来た。

そこにはナイトメアと戦術機の派手な市街戦の様子がディスプレイに映っていた。

翔の直ぐ隣には殿下が座り、トライアル場を見ながら翔から月下の扱う武器の説明を受けていた。

「翔殿が造られた月下は素晴らしいですね」

殿下がディスプレイを見ながら翔へ話しかけた。

『有り難う御座います。ですがナイト・オブ・ラウンスの剣や整備士の皆が頑張ってくれたおかげでもあります』

「そうですね、これが量産されれば何とか……」

そしてその頃、格納庫は格納庫でディスプレイの前で皆が騒いで応援していた。

翔やラクシャータ、ナイト・オブ・ラウンスの十二の剣だけでなく整備士もが、自分が担当しているナイトメアや戦術機に相当な愛着を持っている。

そしてそれを駆る衛士にも。だから自分の担当する機体の衛士には何かと優遇したりしている。

だからこそ、機体をミスで壊す奴は勿論嫌われ、逆に操縦が上手い奴、ナイトメアや戦術機の能力を使い切れる奴は整備士達に好かれる。だから十二の剣は絶大な信頼を整備士達からは得ていた。

特にナイトメア開発局は他の部署よりその傾向が強かった。

そしてそんな連中に、月下がナイトメア武御雷に圧勝している様子を見せたらどうなるだろうか？

案の定予想は大正解で、整備士連中は作業を軽快にこなしていた。

整備士の作業確認の音が普段の倍以上にデカい。そして全ての行動が通常の倍くらい素早く行われていた。

班長は呆れながらも普段からこれだったらと溜息を吐いていた。

午前中の結果は予想通りだった。

整備士の連中の手がける月下は破竹の勢いでスコアを重ね、武御雷を跳ね飛ばし最高の成績で午前中を終えた。

補給の為の休憩は凄まじいものがあった。

月下の素晴らしさを体験した斯衛軍衛士達は、関係者に話しを聞きに詰め寄ったり、衛士同士で此処が良い等と凄まじい勢いで話していた。

ナイトメア開発局が開発と整備を担当していることは周知の事実だったので、整備士の皆は整備補給作業中にもかかわらず質問攻めにあっていた。その様相はまるでBETAが戦術機に群がっているかのようだ。

整備士の連中は作業に大わらわでとても応対できる状況ではなかった。

群がる衛士達を次々に追い払っている。

しかし、この成功を本当に喜んでいることを翔達は感じていた。

「衛士達は執拗に整備士の連中に喰らいつき、少しでも月下の情報を引き出せればと離れない様子が見えた。」

「仕方がありません。咲世子さんお願いします」

「畏まりました」

そう言うと咲世子はディスプレイの方へ向かって行った。

月下と言う準第四世代ナイトメアの圧倒的反響を予想した翔は、整備士達と一本のビデオを作製していた。

「パンパカパーン！！ 実践！ これが月下だ 月下マニュアル
く！！」

『これを見れば月下の全てが分かる！！』

ハンガーの奥から移動式大画面モニターを引っ張り出しビデオを再生する。

途端にそこは黒山の人だかりになっていった。集まった衛士達が食い入るようにビデオを見ている。

今公開しているのは整備士の皆が撮り貯めた、ナイト・オブ・ラウンズ十二の剣の演習の模様をもとに製作したビデオだった。

ナイト・オブ・ラウンズ十二の剣らは毎晩遅くまで、実機やシミュレーターに張り付き頑張っていた。

それを見た整備士の若い人達が何とか彼女らの力になれないかと神凧大尉と話し合ったのだ。

実機演習場に普段の倍以上の記録カメラを設置し全てを撮影した。

勿論訓練後の整備もきちんとしていた。

彼女らナイト・オブ・ラウンスの剣が部屋に帰った後、夜通しで作業を行い翌朝には元の状態にして引き渡す。

嵐のように睡眠時間が取れなく整備士達には大変な日々であった。

だがその日々は充実していて、皆で何かを協力して作っていると
いう感覚が全員にはあった。

そんな時、翔は唯依達と話していると、そこに一際大きな歓声が
モニターの前でおこった。

輻射波動ですね……と翔は思い苦笑していた。

モニターを見なくてもわかる。そこには間違いなく月下の輻射波動が再生されている筈である。一般衛士にも輻射波動が撃てると知れば喜ぶに決まっている。まあ紅蓮二式や蒼月と違って、コストの問題で拡散型か収束型のどちらかの固定にはなるが、それでも凄い事に違いは無い。

初めて紅蓮二式や蒼月の機動や輻射波動を見せられた時、一般衛士は戦術機がナイトメアに変わり新しい歴史に突入したのを感じた。

もともとナイトメア開発局に来た者達は今迄のアメリカ主導の戦術機の開発の流れが気に入らなかった。明らかに最近の米国の戦術機は対戦術機、対ナイトメアだからだ。だからこそ新しい可能性を求めてナイトメア開発局に来たのだ。

BETA相手にステルス等は必要無いのに、強化しているのが良い例だ。

そうなるならレーダーにはせいぜい小さく何かが表示されるくらいだ。

米国が何を考えているのか分かりやすすぎる。

アメリカに比べ翔やラクシャータ達が開発しているナイトメアはどうだ？ たとえ型遅れの撃震でさえナイトメアの部品を使い半ナイトメアの五月雨へと改造し、OSもナイトメア用に変えてやれば二割は性能が向上する。

開発はこういう方向でやらなければ衛士は生き残れないと整備士達は思っていた。

Side 翔

「翔殿、これで正式に月下が次期斯衛軍主力機になります。これからもそのお力を私にお貸しく下さい」

殿下直々にこう言われるのは吃驚です！ 幾ら慣れたと言っても未だに少し腰が引けてしまいます……

『はい。これからも殿下の為に精一杯努力させて頂きます』

「有り難う御座います。それではこれで失礼いたします」

そう言い殿下は月詠大尉達と帰って行きました。

「翔君やったわね！これで月下の量産を出来るようになるわ！後は翔君やラクシャータが言っていたBETAの日本侵攻に間に合えば

いいけど……」

確かに唯依姉さんの言う様に月下を次期斯衛軍主力機に出来たのは嬉しいですが、BETAの日本侵攻に間に合うかどうか不安です……もし侵攻規模が予想よりも早かったり大きければ月下の量産にも影響が出てしまいますし……

『そうですね……こればかりは願うしかありませんね』

「翔様」

部下から何か連絡を受けていた咲世子さんが戻って来ましたね。

「日本に來日していた星刻様から連絡が入り、今回の政府との会談の結果を直接話したいそうです」

星刻大将がですか？ 丁度いいかもしれませんね。

『わかりました。直ぐに会う手配をお願いします』

「はい」

統一中華戦線、アメリカ軍、国連、日本の軍がこの日本に集まればBETAの被害を何とか最小限に防げるかもしれませんが……しかし星刻大将要望のブレイズルミナスを提供出来なかった為、政府との会談が失敗して統一中華戦線の協力が無くなっていなければいいのですが……

ううー色々な問題があります……ルルーシュ陛下なら不敵な笑みを浮かべて「全ての問題はクリアした」と言い問題を解決する

のでしょうが、僕は凡人だから無理です……なので出来る事をこつこつとするだけです！

S i d e O u t

23・トライアル（後書き）

感想・アイデア募集中です！

24・星刻の願い

「神凧大尉、久しぶりだな」

星刻は政府との会談を終わらせ、直接翔の下へやってきた。普通なら統一中華戦線の大将が出向くなんて事はありえないのだが、その相手がナイトメア開発責任者となると話しは変わってくる。

『久しぶりと言っても一ヶ月くらいですよ？』

「ふっ、それもそうだな。それにしても君に会うための手続きや、此処に来る迄の検査にと色々大変だったぞ？」

星刻は此処に来るまで色々と検査やらを受けさせられ、会うまでに二時間はかかった。

「それは仕方ありません。幾ら統一中華戦線の星刻上将と云えど日本帝国の最重要人物の一人である翔様に会うのには、それだけの検査等が必要です。むしろ星刻上将は会うまでの時間は掛かっていないくらいです。他の者達なら倍の時間は掛かります。星刻上将は日本と相互協力をしている相手なのでそれだけの時間ですんだのです」

翔の後ろに静かに立っている咲世子が星刻に理由を語った。

「まあ私も仕方が無いとは思うがな……君は今や日本の要でもあるからな、暗殺など避ける為にはこれ位はしないとイケないのは当然だしな」

『そう言えば会談はどうだったんですか？』

「ああ、丁度との話しをしようと思って来たのだ。結果だけを言うと我ら統一中華戦線は一部の部隊だけ日本防衛に当たることになった」

『一部ですか？』

翔は一部と言う部分に疑問を覚えた。

「そうだ。私としては一部ではなく全軍とは言わないまでもそれに部隊を派遣したかったのだが、会談前に大宦官から指示がくだりナイトメアの提供だけでブレイズルミナスの提供をしないのなら、一部だけと決められてしまったのだ。幾ら私でも如何し様もなかったのだ。すまない」

星刻は苦虫を噛み締めたような表情をしながら謝った。

『そうでしたか……』

翔はその話しを聞いて難しい顔をしていた。

「すまないな……だが送る部隊は精鋭を送らせてもらう」

『わかりました。後星刻大將が帰られる時に改修した舞鶴Type
サザード00Cを持っていてください』

「完成したのか、わかった。有り難く貰っていく。それと如何しても神風大尉に協力して貰いたい事がある」

星刻は先程よりもさらに真剣な表情をし、翔を見詰めてきた。

『な、何でしょう？』

翔もその余りにも真剣な星刻の表情にびくりとしながらも話しを促した。

「出来れば人払いを……」

「申し訳御座いませんがそれは出来ません。それに私は翔様に使える者……決して秘密を口外することはありません」

咲世子は翔が何かを言う前に星刻に反論した。

「……わかった。協力して欲しい事と言うのは大宦官の排除だ」

『なッ！？』

この一言には流石に翔と咲世子も驚きを表した。確かに翔も大宦官は前の世界の時同様邪魔な存在として認識していたが、まさか此処で排除すると言う話しが出るとは思っていなかった。

「今の統一中華戦線は奴等の私物となっている……おまけに天子様に無断でアメリカとも色々と勝手に話しを進めている。だか奴等を倒そうにも奴等は独自の私兵部隊を持っている。私に協力してくれる部隊の戦力では倒すには未だ足りない……だが神風大尉に技術を提供して貰えれば話しは別だ。部隊が相手より少なくともそれを覆せる可能性が高い。勿論それが叶ったのなら天子様に頼み日本に部隊を派遣するよう頼むことも可能になる」

『……成程、少し他の人達と考えさせて貰っても良いですか？』

「勿論だ。だが信頼できる者だけで頼む」

『勿論です』

「では返答が決まったら此方へ連絡を」

星刻は機密性の高い自身への直通アドレスを翔へ渡した。

『わかりました』

「ではこれで失礼する。良い返事を期待している」

そう言い星刻は部屋から去って行った。

咲世子は星刻が部屋から出て行った後、翔に問い掛けた。

「翔様、流石に此度の件は殿下への報告が必要かと……」

『はい。報告はするつもりでした。恐らくは国としての協力は出来ないが、個人としての協力は許可が出ると思えます』

「そうですね、国で動けば何処からか情報は漏れてしまいますからね」

『では格納庫に行きましょうか』

「はい」

1998年3月1日

「翔君、ナイト・オブ・ラウンズ十二の剣、ラクシャータ、咲世子さんだけをこの部屋に集めてどうしたの？」

唯依が翔の自室に集められた理由を翔に問い掛けた。

『実は統一中華戦線の事で皆さんに相談があります』

「相談？統一中華戦線の事で？」

『此処で話す事は外では口外しないでください。実は統一中華戦線の星刻上將は近い内に大宦官相手にクーデターを起こすつもりです。前に日本に会談しに来た時に星刻上將本人から技術提供の協力要請がありました。そこで皆さんにも意見を聞きたくて』

「……翔君、この事は殿下は知っているのかい？」

朱雀が一番の疑問を問いこの返答は咲世子が行った。

「はい。きちんと殿下からは個人としての協力なら構わないと……ただし翔様の安全と一応日本が協力していると思われないうちが裏で動くことになります」

「それでどんな物を提供するつもりでいるの？」

ラクシャータは自分も関わるであろう提供する物が気になって翔へ聞いた。

『一つは先日統一中華戦線専用^{サザード}に改修した舞鶴Type00Cを先に星刻上將の部隊だけに配属してもらい、後は星刻上將専用^{サザード}に機ナイトメアを造ろうかと思っています』

「それはどの程度のナイトメア？」

『紅蓮二式、蒼月と並ぶ準第四世代機体』

「「「「!?」「」」」」

「ちよつと待つて翔君!? 流石にそれは拙いんじゃ!?!?」

『ですが一機でも戦場を一変させる力を持つ機体となるとこれくらいの機体は必要になります。それに考えている機体は統一中華戦線では恐らく星刻上将位にしか乗りこなす事は不可能だと思います』

「どう言う事?」

『元々何時か造るうかと思つて設計図だけは白兜ランスロットと同じく作つていた機体なんです、体に掛かる負担が紅蓮二式とかと比べて遥かに高い機体になりそうで……』

その言葉に唯依や可憐、朱雀は額から汗を浮かべた。唯でさえ今の機体の体に掛かる負担は高いのにそれ以上の機体と言うのははつきり言つて乗りたくはないと三人は思つた。

「ん? 翔君……もしかして前に私に意見聞いてきた神虎シエンフーの事じゃ……」

ラクシャータが冷や汗をかきながら翔に聞いてきた。ラクシャータが冷や汗をかいていたのには理由があつた。翔がラクシャータに見せてきた機体の設計図は余りにも人が乗るには無理があつたのだ……この神虎シエンフーの能力をを100%引き出すには強烈なGを耐えなければならぬ。それに武装と言う面でも紅蓮二式や蒼月の輻射波動に負けない、天愕霸王重粒子砲を初め凄まじい威力の兵装を持つ機体でもあつた。その為翔はラクシャータにこの機体を造るかどうか相談していたのだ。造つたとしても誰も乗れなければ意味が無いし、ナイト・オブ・ラウンス十二の剣は乗れるだろうがそれでも体にかなりの負担が掛かる為乗

せたくはなかったからだ。

『そうです。星刻上将ならあれに乗れると思ったので……それにデ
ータは送って貰えるようにすれば損ばかりでもないですし』

「けど翔君！ それもかなりの機密が高いんじゃない……それにもし何
かしらの理由で敵対したら……」

『其処は大丈夫です。既に対処できるように紅蓮二式と蒼月にそれ
を装備させています』

「えっ！？ 私の紅蓮二式や蒼月に!?!」

可憐はまさか自分の機体に既に装備されているとは思っておらず
驚いた。

『はい。なので其処は心配しなくても大丈夫です』

「……そこまで考えられているなら僕はいいと思っけど?」

朱雀は既に此処まで準備され殿下の許可もあり、さらには咲世子
さんが動くなら問題無いと思っていた。

咲世子にとって主である翔が危険に晒されるような事は、必ず咲
世子本人が翔本人に進言して止めていると思ひ、その進言が無いと
言う事は朱雀は大丈夫だと確信して賛成した。

「私もいいと思う。翔君は何時も先の事を考えているし、今回は裏
方で咲世子さんが殆ど行い翔君への危険も少なそうだからいいかな」

朱雀がそう言つと可憐も自分も賛成だと翔に言った。

「枢木や可憐もそう言っているし私も賛成よ」

唯依も朱雀や可憐の賛成の理由を聞いて問題は少なく、さらに翔の危険はなく、あの咲世子が動くとわかり唯依も賛成にした。

「私は神虎シエンフーを造つて弄れるのなら何も問題ないわ」

ラクシャータは自分が最新のナイトメアに関われるのなら関係が無かった。

「翔様どうやら皆様も協力には問題ないみたいですね」

『はい。では咲世子さんお願いしますね』

「畏まりました」

翔は咲世子にその後直ぐに星刻に連絡を頼み、自分はラクシャータと共に神虎シエンフーを開発する為に格納庫へ向かった。だが今翔達は朱雀の専用機白兜ランスロットを開発中である為、神虎シエンフーの開発はラクシャータに任せ自分は白兜ランスロットを開発することになった。

24・星刻の願い(後書き)

感想・アイデア募集中!

25・EU最強の騎士(前書き)

何時の間にやらお気に入りが入りが700件突破していました!こうして見ると嬉しいですね!さて今回はEU最強が出てきます!楽しんで貰えたら幸いです。

25・EU最強の騎士

Side イギリス

今此処に居る者達はイギリスの象徴にして政治から軍事まで全てを取り仕切る皇族や側近達だった。その部屋の中央には階段がある。その上には王が座る椅子があり、其処には一人の男が座っていた。そしてその王に片膝をつき頭を垂れる一人の男が居た。

「お呼びでしょうか陛下」

椅子に座っている陛下と呼ばれた男はこのイギリスの統治者だ。大柄な身体に髪はクルクルしていて顔は厳つい。だが目は為政者としての風格を持っていた。

「うむ。ビスマルクよ、どうやらリヨンハイブからBETAが迫って来ている為、防衛戦線に応援が欲しいそうだ。そこでお主に行つて貰いたい」

ビスマルクと呼ばれたこの男は正式にはビスマルク・ヴァルトシユタインと言い、現在イギリス皇族を守る近衛騎士筆頭ロイヤルガードの地位に就き、大軍を陣頭に立って敢然と指揮する者であった。その姿は鋭い眼光に幅の広い肩の上にある顔は彫りが深く、いかにも武人らしく精悍とし、全身からは重厚な騎士と言ったイメージを漂わせていた。

「了解しました陛下」
イエス・コア・マジエステイ

「それとコーネリアとその部隊も連れて行け」

「コーネリア殿下達もですか？」

「そうだ。コーネリアには前線で兵士の士気を高める役割をやってもらう」

その言いようが気に食わなかったのか、その場に居たコーネリアは顔を不機嫌に歪めていた。

「父上！ 私は兵士の士気を高めるだけの情弱な女ではありません！ きちんとBETAを屠って見せましょう！」

堂々と声を上げたコーネリアは鋭い目付きに鍛えられた体だが、出るところは出ている女性だった。髪もロングで見る人見る人が足を止め見入るだろう女性だが、しかしその迫力は一般兵等なら逃げ出すような気配を漂わせていた。

「お前が強いのは判っている。だが最近のお前は慢心がある。ビスマルクの戦闘を直にその目に焼き付けて来い。そうすればお前も慢心が無くなるだろう」

「……わかりました」

コーネリアは不満そうな顔を見せながら渋々頭を下げた。

コーネリア執務室

コーネリアが執務室に戻って来ると部屋には三人の男がいて何やら色々話し合っているようだった。

「今戻った」

コーネリアがぶつきら棒に部屋に入ってくると三人は同時にコーネリアの方を見て、二人は立ち上がった。

「お帰りなさいませ殿下」

「その様子ですと何か言われたようですね」

二人の男、ギルバート・G・P・ギルフォードとアンドレアス・ダールトンがコーネリアに一礼をした。

ギルフォードは眼鏡をかけていて、長身でクールな装いをしている誰から見ても美形な人で、ダールトンは顔に大きな傷があり、いかにも歴戦の勇士で武士もののふと言ったいでたちをしていた。

「今の私は慢心しているからビスマルクの戦いをその目で見るとの事だ」

先程の事を思い出したのかまたしても不満そうな顔になった。

「姉上、慢心はともかく我が母上を除けば現在EU最強の騎士の戦いを見る事が出来るのは幸運ではないですか？」

「ルルーシュ」

コーネリアの事を姉と呼び、椅子に座りながら話してきたルルーシュと呼ばれた男。

端正な顔立ちで瞳はアメジストの色をしており髪は黒で手入れがきちんとされており、体は細くスラットした体型だ。だが女性から見たら必ず振り返ってしまうであろう美形だった。

「あの父上の下から離れる事の少ないビスマルクの戦いが見れるなら、姉上にとってプラスになりますよ」

「ああ、そつだな」

コーネリアはルルーシユの隣の席に座り、優しくルルーシユの髪を撫でながら微笑んだ。

「ルルーシユ様は如何なさるので？ 姫様の軍に配属されているとは言え、ルルーシユ様達皇族は陛下の命令で無い限り出撃は自由ですからね」

皇族であるルルーシユ達は陛下の指定する戦場には拒否権は無いが、それ以外では比較的自由だった。

「そつだなルルーシユは如何する？」

「姉上、実は一度日本に向かいたいと思っけています」

ルルーシユがそう言うとコーネリアは成程と言う顔になった。

「……神風 翔か？」

コーネリアは静かに呟いた。

「はい。彼には是非会っておきたいのです。ナイトメアにアヴァロン、それに放射波動やブレイズルミナス等の武器防御兵器の数々……必ずこの先、鍵となる人物です」

ルルーシユが手にした資料には日本帝国が今迄戦場に出してきた兵器の詳細が書かれていた。これらは特別戦術機開発部のロイドやセシルが直ぐに集めてくれた。

「確かに……サザールランドは確かに素晴らしい。それにあの脱出機構等も今迄にない考え方だ。だが神風は日本帝国のトップシークレットの為情報がまるで無い。突発的なアクシデントに弱いルルーシュには大変かも知れないぞ?」

「姉上……それは言わないでください」

何時も突発的な事で失敗しているので、ルルーシュは何も言い返せなかった。

「はっはっは！ な〜にルルーシュ様なら大丈夫ですよ」

「ふふ、ダールトンの言う通りだな。ルルーシュ頑張れよ」

「はい。姉上」

ダールトンは腰に手をあてながら豪快に笑い、コーネリアはルルーシュの頭に手を乗せ微笑み、ルルーシュもつられて微笑んでいた。

Side Out

S i d e コーネリア

流石はイギリス……いやEU最強の騎士、その姿はまさに英雄。

試作機EF-2000タイフーンに乗り、特別戦術機開発部の口イド達が面白半分に作り上げたエクスカリバーで意図も容易くBETAの群れを捌いていく姿は、まさに万人にその言葉を口に出させる。今も隣で私の護衛として共に戦っているギルフォードやダールトンもそれは例外ではないようだ。

普通戦術の基本としては銃撃戦がメインだ。

それは当たり前前の事だ。誰が普通好き好んでBETAの群れに飛び込んで行くというのか。私は白兵戦は得意ではあるがそれは銃撃戦で近づかれた時だけだ。だから此処まで徹底的な白兵戦など知りはしなかったし見た事もなかった。

父上が私に言った慢心と言う意味が納得できた。

これを見てしまえば確かに私は慢心していただろう。私の白兵戦での技術などこれに比べれば、何の変哲も無い物だ。だからこそこれを直に見れて良かったと言える。滅多にこれは見れる物ではない。恐らくギルフォードやダールトンも思っているだろう。これを見逃してしまっていたら後悔する事になると。

突撃級の突進や要撃級の拳が振るわれる中、それらの攻撃を紙一重でかわし、巧みに機体を滑らせ背後を取る。

突撃級は無防備な背後を取られ、その身体は簡単に切り裂かれた。要撃級も振るった拳は掠る事も無く、通り抜けるのと同時にその身体は切り裂かれていた。他にも危なくやられそうな味方には突撃砲を用いて確認もせずに発射し、難なく味方を助け、ビスマルクはもう片方の手に握られたエクスカリバーで自分の目の前のBETAを切り裂いていた。

まるで未来が見えているかのようだ。

一体幾つの戦場を経験すれば此処までの神技を身に着けることが出来るのか。

この幾つ物BETAとの攻防で判らされる自分とビスマルクとの力量の差。

ビスマルク一人居るだけで戦場に居る衛士達は心に余裕が生まれる。唯一人の存在が戦場を支配している。

背後に居るだけで判るビスマルクの存在感。恐らく目を瞑っていてもわかるだろう巨大なプレッシャー。

これが……これがEU最強か……！

私も幾多の戦場を渡り歩き、経験を積み、生き残ればこれだけの力を身に付ける事が出来るのだろうか？

一体世界でこの先何人がこの領域に来れるのだろうか？

私は必ずこの領域に来てみせる！ だからこそ今は一時も見逃さずこの光景を目に焼き付ける！

『さあかかって来い！ 私は陛下の剣！ 私が敗れるとは即ち陛下の恥となる！ 即ち私は負ける事が許されないのだ！』

その言葉を吐いたのと同時にBETAが群れをなしてビスマルクに群がっていく。

戦場にいたBETAが、目の前に居た戦術機を無視してビスマルクに群がっていく様は、正しくビスマルクを敵と認識したのだ。

私の前からBETAは進路変更をしてビスマルクのもとへ向かっていく。その光景に私は敵と認識されていないと思ひ知らされ、怒りが沸いた。

何時か必ず その思いだけが心を埋めていった。

Side Out

S i d e ビスマルク

「フン、この程度か……」

エクスカリバーを手に要撃級を切り裂いて行く。もう既にビスマルクの機体はBETAの返り血で赤黒く変色していた。

『しかし今回数だけは何時もより多いな』

そこにビスマルクも乗っている試作機EF-2000タイフーンが一体やって来て、一瞬にして数多くの突撃級や要撃級を屠りだした。

試作機EF-2000タイフーンはいまだ試作機だけあって配備数が少なく、コーネリア等はサザランドを好んで使っている為、現在試作機EF-2000タイフーンを使っているのはこの戦場ではビスマルクだけの筈だった。

『その機体一体何者だ？』

『何者とは失礼ねビスマルク？ 私の戦い方忘れちゃったの？』

その声を聞いたビスマルクは驚きと恐怖が顔に出ていた。

『マツマリアン又様！？ どうして此処に！？』

『EU最強の騎士の戦いを見に来たのよ？』

『冗談を……マリアン又様に比べたら私などまだまだです』

そんな会話をしながらも二人は息の合ったコンビネーションでBETAを駆逐して行く。そのスピードはそこ等辺の一個中隊よりも早かった。

特にマリアン又の操縦技術はビスマルクをも圧倒していた。ビスマルクと同じ機体の筈なのにビスマルクよりも早く動いて見えていた。その姿はまさに『閃光』だった。

『ですがよく陛下が許可いたしましたね?』

『えっ? 許可なんて貰ってないわよ?』

『なッ!?!』

『心配しなくても大丈夫よ』

『はあ〜そう言う所は近衛騎士ロイヤルガードの時から変わりませんね』

『人はそう簡単には変わらないわよ。さて無駄話はこれくらいにしてさっさと片付けてしましましょう』

『そろそろしましょ』

二人の機体はさらにペースを上げてBETAを駆逐し始めた。

S i d e O u t

S i d e コーネリア

まさかマリアン様が来るとは思っていなかった。私も以前手解きを受けた事があったが正に手も足も出なかった。以前は近衛騎士ロイヤルガードに居た事も勿論知っていたがこうやって戦うのは初めて見る。あのビスマルクとコンビを組んでBETAを蹂躪する様を見せ付けられるといかに凄い人かと改めて思わせられる。

『コーネリア貴女も頑張りなさい』

『はい！』

目の前にウジャウジャと沸き上がる戦車級の群れへと36mm弾を撃ち込み続ける。

だが突撃砲に装填された2000発の弾を撃ち尽くし、補助腕による最後の弾倉を装填している隙に突撃級BETAが距離を詰めて

来る。

『ちッ!』

思わず舌打ちをしてしまった。

ギルフォードとダールトンも急いで私のフォローに向かおうとしているがBETAが邪魔をしてなかなか近づけないようだ。

まずいと思ったその時にはもう既に目の前に要撃級が迫ってきていた。

慌てて避け様としたが要撃級の拳がサザーランドの左腕を抉って行った。

『ぐうッ!?!』

『『姫様!?!』』

ギルフォードとダールトンの焦った声が通信機越しに聞こえて来た。

何とか一撃をかわしたものの次の一撃が迫って来ていた。

『しよ〜がないわね〜』

マリアンヌ様のそんなのんびりとした声が聞こえて来たと思った時には、目の前に居たBETAが斜めにずれていくのが見れた。

斜めに切れ崩れ落ちたBETAの後ろには両手に長刀を持ったマ

リアン又様の機体が佇んでいた。

『コーネリア、油断しすぎよ？ 今回の戦いが終わったらまた鍛えてあげる』

『ひッ！？ スミマセンッ！ ですがお忙しいリアン又様のお手を煩わせるのも悪いので！』

『気にしなくて良いわよ？ コーネリアの為だもの』

きっと今の私の顔は青くなっているのだろうな……前に訓練をつけて貰った時には……思い出したくもない……

リアン又様はそう言い残したBETAの群れに突っ込んでいった。

Side Out

戦い始めて既に数時間の時間が経った。

一面にはBETAの死体が辺りに散らばり、死体が重なった山の上には二体の機体が辺りを見渡していた。

既に敵の数は2000を切っている。

光線級は最初のうちにビスマルクが徹底的に切り裂いていたので存在していなかった。

だから残りは要撃級、突撃級、戦車級だけだった。

マリアンヌとビスマルクの二人は、死体の山の上に立ちながら笑っていた。

この状況下で笑っていられるのは、普通の衛士達からしたら狂っていると思われるに違いないだろうが、コーネリアは逆に頼もしく感じていた。

『ビスマルク楽しいわね〜！ 敵の数は物足りないけど、あなたとこうしてまた戦場で共に戦えるのは楽しいわ』

マリアンヌの機体は一気に死体の山から跳躍して、BETAの群れに二刀の長刀を手に持ち向かって行った。

『私もですよ！』

ビスマルクもエクスカリバーと突撃砲を手に持ち、マリアンヌの後を追って行った。

マリアンヌのEF-2000タイフーンは、一気にBETAの横を通り過ぎたと思った瞬間にBETAは切り裂かれていった。まるで風のように自由に戦場を舞い、閃光のように素早く戦場を蹂躪していく。後ろから迫るBETAも独楽の様に回転しながら駆逐していった。

後方のビスマルクの方からも派手に聞こえる爆音。

そして辺りには飛び散る鮮血と舞い散る肉片。

マリアンヌとビスマルクは笑う。

その様はまさに狩人の如く。

二人の機体は地を跳び、手に持つ長刀とエクスカリバーで突撃してきた突撃級を無防備な背後から切り裂いていく。

こうして殆どこの二機に殲滅させられていった。

コーネリアは勿論の事、ギルフォードや古参の衛士であるダール
トンでさえ今回の戦いは目に焼きついて離れることはなかった。

そして今回の戦いで犠牲者は余りにも少なく終わり、各国にイ
ギリス軍の勇猛さを知らしめる事になった。

25・EU最強の騎士(後書き)

感想・アイディア募集中です！

26・ランスロット完成(前書き)

やっと投稿できました。何回か書き直していたので予定よりも遅くなりました。

では続きをどうぞー！

26・ランスロット完成

「翔君、ランスロット白兜が完成したようだね」

巖谷中佐は現在、翔のナイトメア開発局自室にやって来ていた。

『はい。これで現在ナイト・オブ・ラウンスの剣に所属している全員に専用機を用意する事が出来ました』

「そうか。所で最近の唯依ちゃんはどうだい？」

『何時も通り頑張っていますよ』

「まあーそうだろうな……だが私が言いたいののはだな、こつ、出会いとかはどうかなと」

なんとも歯切れが悪い言い方だった。

『僕の知る限り特定の人と懇意って言うのは無いと思いますよ？
食事は何時も一緒に取っていますし、寝るのも一緒なので』

「はっはっは、唯依ちゃんには翔君には過保護だからな〜そうだ！
何なら翔君が唯依ちゃんを貰えばいいじゃないか！」

そんな事を言っていると突然ドアが勢いよく開け放たれた。

「叔父様！ 行き成り何言っているのですかー！」

うがー！ つと勢いよく巖谷に詰め寄って行った。

「おっ 落着け唯依ちゃん！ だが翔君の事嫌いじゃないだろ！？」

「当たり前です！ むしろ好きですって何言わせるんですか！」

「ぐお！？今のは唯依ちゃんが自分で……」

唯依に掴み掛かれ巖谷中佐は首をかくかくと揺らしていた。

「別に歳の差なんて今の時代あってないような物じゃないか？元々それ程離れてもないのだから」

ぼろぼろになりながら唯依に問いかけた。

「それはそうですが……とっとにかく今はその事いいですから！」

唯依はそう言い無理やりに誤魔化し、仕事モードに戻った。

「それより中佐は白兜ランスロットの事を聞きに来たのですよね？」

「そうだ。それでどんな感じになっているんだ？」

先程とは違い軍人の顔つきになり真剣に聞いてくる。

「そうですね、白兜ランスロットは紅蓮二式や蒼月に比べれば火力は劣るかも知れませんが、その代わり紅蓮二式や蒼月よりも遠近中満遍なくどのポジションもこなせる機体になっています。特に白兜専用装備であるヴァリスが大きく役割を果たしています。紅蓮二式や蒼月は接近戦を得意としているので、二機をサポート出来る機体になりました」

「そのヴァリスと言うのは？」

「ヴァリスは可変弾薬反発衝撃砲とも言います。弾薬の反発力を制御できるライフルになっています。インパクトレールの換装により様々な戦況に対応し、ノーマルモードとバーストモードの切り替えが可能となっています。」

「成程……確かにあの二機は接近戦が得意だったな。サポートが出来る機体ならバランスが丁度いいな」

「丁度今、紅月少尉と枢木少尉の二人は実機で模擬戦しているので見に行きますか？」

「おおそれは丁度いい！ 直接確かめてみたかった所だ」

三人は模擬戦場に向かった。

その頃模擬戦場では、二機の機体が戦っていた。

その戦いは各国の衛士達が見たら卒倒するような戦いだっただ。

恐らくこの戦いについて来られるのは、世界各国の中でもトップクラスだけである事は容易に想像できる。

そして徐々に戦いは激しくなっていく。

建物の外壁を蹴って突進してきた紅蓮二式を、ランスレット白兜がその身を左右に振って軽やかに受け流した。

肩先をかすめる紅蓮二式の模擬刀。

それに白兜が自らの模擬剣を合わせて弾き飛ばしてしまう。

『可憐、今日は勝たせて貰うよ！』

『やらせない！』

ランスレット白兜の剣によって失った自らの長刀の代わりに、今度は紅蓮二式が肩の背後から先程の長刀と変わらぬ模擬刀を引き抜いた。

二機は先程の場所から自分が有利に戦えるよう高速で牽制しながら移動していた。

壊れていた建物の壁をぶち破って、建物の中も上手く使っている。

壁を蹴り宙で反転した紅蓮二式が再び突っ込み、ランスロットが剣を構えなおした。

ナイト・オブ・ランス
十二の剣の紅月 可憐。そして枢木 朱雀

この二人の力量を計ってみると、純粋なナイトメアの操作能力に限っては伯仲していると言ってもいいだろう。

今迄は機体性能の差で可憐が圧勝していた。

だが条件が翔が作った同レベルのナイトメア同士であれば、ほぼ実力は互角。

『…ッ』

ランスロット
白兜が紅蓮二式に向けて加速する。

尋常な速度ではない。

大空に走る雷光のごとき速さ。

だが紅蓮二式もスピードには優れた機体だ。

その速さは決して負けてはいない。

軽やかに戦場で舞う姿は音楽を奏でるようだ。

まさに紅き旋律。

凄まじいばかりの金属音が模擬戦場に響いた。

懐に飛び込んだ白兜フランスレットと、それを迎え撃った紅蓮二式の剣と刀がぶつかり合い、共に折れた音であった。

上下に真つ二つになる剣と刀。

白兜フランスレットと紅蓮二式は互いに距離をとっていた。

『今日はここまでね朱雀』

『そつだね可憐』

流石にこれ以上は戦えない為、二人は戻って今回の模擬戦の総評や問題点を話す為に戻る事にした。

「……凄いな、まさかあれ程とは」

先程の模擬戦を見て巖谷中佐はしきりに感心していた。

『性能面では紅蓮二式や蒼月に決して負けていませんし、衛士の腕も同じくらい凄いですから』

「確かにな……紅月少尉の腕は知っていたが、枢木少尉の腕もここまで凄いとは思っていなかったな」

咲世子も途中から統一中華戦線への用事等を済ませ戻って来て、四人で話し合っていると可憐と朱雀の二人も部屋に戻って来た。

「「巖谷中佐!?!」」

可憐と朱雀は部屋に入ってくると巖谷中佐が居た事に驚き、慌てて敬礼をした。

「二人とも先程の模擬戦見せてもらった。素晴らしい操縦技術だった」

巖谷中佐も敬礼を返し二人を労った。

「有り難う御座います」「」

『朱雀さんジュンスロット白兜はどうですか？』

翔は朱雀にジュンスロット白兜の不具合を尋ねた。

「自分の反応に機体がついてきて、まるで自分の身体のように動かしやすかったよ！」

唯依や朱雀に可憐は反射神経が良すぎる為、今までの機体では反応速度におおいに不満があったのにジュンスロット白兜は自分の言う通りに動いた為、朱雀は驚いていたのだ。

『朱雀さんは可憐さんや唯依姉さんと同じく、反応が普通の人よりも凄いですからね。なので普通の機体を使うと余計に鈍く感じて、逆に上手く扱えなかったりしますからね』

前の世界で翔がスザクから始めてサザールランドに乗った時の話を聞いた時に、言っていた事を思い出していた。

「確かにサザールランド舞鶴や不知火では避けれると思っても、機体がついて来れなかったからね」

「ナイトメア開発局は何と言うか、凄い者達の集まりになっているな……」

今迄の話を聞いて巖谷中佐は冷や汗を掻いていた。

だがそれも仕方が無い事ではある。

普通なら白兜フランスロケットを乗りこなせる衛士なら、前線でエースを張っている筈だからだ。

だがここに居る者達は皆、そのレベルのナイトメアを乗りこなす事が出来る。

エースが一箇所に固まる等、普通は有り得ないのだが、翔が訓練兵だった可憐を引き抜いたり、紅蓮大將からの頼みでナイトメア開発局へ所属する事になったりと言った具合だ。それにエースだった人が来たわけではなく、ナイトメア開発局に来てからエースになったのでこう言う事になっていた。

『はい……確かに十二の剣は勿論ナイト・オブ・ラウンスの事、ラクシャータさんに咲世子さん、所属している研究員や整備士等、皆さん凄い人たちばかりです』

「だけどそのトップが翔君で要だつて事を忘れちゃいけないわ」

唯依が翔の頭を撫でながら言う。

その場に居る皆が確かにと行って笑っていた。

S i d e 国連基地

「まりも」

「何の御用でしょうか香月博士？」

まりもはピシッとした敬礼で応じた。

「相変わらず固いわね〜普通でいいって言っているでしょ？ 敬礼とか無駄な事は嫌いなものよ。それにそんなんじゃ男に逃げられるわよ？ って言うか男は居ないか〜」

「博士！」

「ああーはいはい、そう怒鳴らないの」

手をひらひらさせて溜息を吐いた。

だがまりもの表情は此方が溜息を吐きたいという顔をしていた。

「はあ〜それで何の用、夕呼？」

何を言っても無駄と悟ったのか、何時も通りの碎けた対応になった。

「まりも舞鶴サザールランドに乗った事あったっけ？」

「ええ、一応少しだけは。でもほんの数回だけだけど」

「まりもならその数回で大丈夫ね。でも丁度良かったわ。これから午後の空いた時間は伊隅達サザールランドに舞鶴で扱い方の訓練してあげて」

あっさりと言われた事にまりもは少しの間固まってしまっていた。

「ええー！？ 脅迫して奪った不知火は如何するのよ！？ それに舞鶴サザールランドだって国連にはまだ数機しか無かったんじゃ！？」

「脅迫とは心外ね、ちょっとお願いしただけじゃない。舞鶴サザードもお願
いして数機貰ってきたわ。それを以前の数機と合わせて運用しよう
と思ってるね。それに不知火は第三世代だけど安全性は舞鶴サザードの方が上
だし、あの神風の事だからその内改修もするだろうから、今の内に
慣れていた方が何かとお徳でしょ？」

あれをお願いと言えるのは世界でも彼女だけだと思つまりもであ
ったが、決して口には出さない……被害が自分に来るのが嫌だから
だ。

「……確かにそうかも知れないわね」

うーと唸りながらも渋々頷いた。

「とつ言う訳で宜しくあつ訓練時は少佐権限をあげるから確り扱
いてあげなさい」

「は〜わかったわ」

これからの事を思うとまりもは苦悩を隠せなかった。

Side Out

S i d e 伊隅

「伊隅大尉！ 舞鶴を我が隊で運用するって言うのは本当ですか！？」

ブリーフィングルームに集まっていた通称ヴァルキリーズ。

相変わらずこの手の事が好きな奴等だなと私は思った。

「落ち着かんか」

私は何時ものように、冷徹で完璧主義的な印象を持つ隊長の顔で隊員を嗜めた。

「そつだよー」

部隊員の一人も嗜めた。

「うっ」

そこにいつも朗らかな印象を受ける隊員も一緒になって止めていた。

暴走しがちな隊員を止めるストッパー役で彼女以上の者はいない。

「それだから男女と言われるんですよ？」

「くそー！ 好き勝手言っつて！」

「全くお前らは……さっきの話なら本当だ。香月博士がそう決められた」

「やった！ 不知火もいいけど舞鶴サザランも前々から乗ってみたかったんだよね！」

私は相変わらずだなと思っていると、部屋に一人の女性が入って来たのを見て私は硬直してしまった。

「そんなに張り切っているのなら私が直々に鍛えてやるぞ？」

情けなくも背筋に震えが走ってしまった。あの香月博士のニヤリと笑った顔と同じくらいの恐怖が、あのニヤリと笑った顔から感じる。

「じ、神宮寺教官!？」

「違うぞ。お前達を鍛え上げる間は少佐だ」

少佐!？ それに鍛え上げると言う事は……周りを見回してみても皆が冷や汗をダラダラと垂れ流している。

だがそれも無理は無い……ここに居る者達は皆、神宮寺教官の教え子であり、あの扱きを受けた者達なのだから。

「まさか神宮時少佐が我々に舞鶴サザーランドの扱い方を？」

「そうよ、あなた達にはこれから舞鶴サザーランドを乗りこなしてもらおうと思つてね。だから特別にまりもを貴方達の教導官にしたのよ。それに貴方達の事をよく知っているまりもが一番の適任でしょうしね？」

「……博士!？」

楽しそうに入って来た香月博士の登場に私達は一斉に敬礼した。

「あー私に一々敬礼なんて必要ないって言っているでしょう？ 無駄な事は嫌いな」

博士は鬱陶しいと言わんばかりに手をひらひらと振っていた。

「とにかくあんた達には早くこの舞鶴サザーランドに慣れてもらおうよ!」

「これからは私が扱くから覚悟するよ」

博士と神宮寺少佐の笑顔がとても笑顔に見えない。

「ひいー!」

部屋には私も含めヴァルキリーズの悲鳴が響き渡っていた。

26・ランスロット完成（後書き）

感想・アイデア募集！

注意事項

あらすじにオリジナルの設定等が嫌な人は見ないでくださいとあるのに、色々と設定や人物の文句だけを言う人がいます。こちらも感想からの意見で、設定に関しては参考にさせてもらい直したりする事もあります。明らかに人物等への暴言等があったのでもう一度あらすじの注意事項を確認してください。こう言うのが増えるとはつきり言って書きたくなくなるので。ですがここは変なのでこうした方がよいのでは等、そう言うのは是非書いて下さい。以前もそれで直したことがあるので。

27・ルルーシュ来日(前書き)

お気に入りか1000件突破しました！有り難う御座います！

27・ルルーシュ来日

1998年5月24日

イギリスから一台の航空機が日本へと向かって飛んでいた。

その航空機にはイギリス皇族の一人であるルルーシュが乗っていた。

本当ならもつと早くに来日する予定ではあったのだが、翔に会う為の交渉に時間が掛かったのだ。

「ふうーまさか神凧大尉に会うのにここまで時間が掛かるとは思わなかったな……」

溜息を吐きながら、今までの過程を思い返していた。

「ルルーシュ様、それは仕方がないと思いますよ？」

呑気そうにロイドは返事を返した。

「まあ確かに……神凧大尉は今や世界の中心と言ってもいいからな」

「僕も今から楽しみで楽しみで」

「全く……無理やりついて来るのだから、ロイドの行動力には驚かされる」

ロイドは何時の間にか特別戦術機開発部に休暇届を出しており、ルルーシュが乗り込む航空機に一足先に乗り込んでいた。

「ルルーシュ様、本当に申し訳御座いません。ほらロイドさんも！」

ルルーシュに謝りながらセシルはロイドに注意する。

セシルは無理やりロイドのお目付け役として特別戦術機開発部より派遣されて来ていた。

「ええ〜何で〜？」

「教えて差し上げましょうか？」

拳を握り締めロイドを威嚇する。

「結構です！」

それはもうキツパリと首を振って返事をした。

「セシルいいんだ。ロイドにはナイトメアの事で色々聞いてもらわなければならぬいな」

「はい〜言われずとも色々聞きますよ〜」

「はあー」

セシルは深く溜息を吐いた。

ナイトメア開発局執務室

今執務室には七人の人間が集まっていた。

「初めまして神凧 翔大尉、私はルルーシュ・ブリタニアと言っ
そこには王族として堂々とした格好だった。」

『初めましてルルーシュ殿下、お会いできて光栄です』

二人は静かに握手をし挨拶を終えた。

「忙しいなか時間を作って貰って感謝する。それと此方の男性の方がロイド・アスプルンド博士、女性の方がセシル・クルーミー博士だ」

「今ご紹介にあずかりました、ロイドです」

手をひらひらと振って翔に挨拶をするロイド。

「もうロイドさん！ 真面目にして下さい！ ……あっすいません！ 私はセシル・クルーミーです」

ロイドに怒りながらも自分は丁寧に挨拶をするセシル。

「すまない神風大尉、ロイドはこう言う人間で……」

ルルーシュも流石にロイドの適当さに呆れたのか、ロイドの変わりに謝罪をした。

『いえ、気にしてませんよ』

「ロイド、あんた相変わらずね」

そこにラクシャータがロイドに親しそうに話しかけた。

「そう言うラクシャータこそ相変わらずだね！ いつも最高の研究場所に居るんだもの」

「当たり前じゃない〜どうせ働くなら最高の現場で働きたいに決まっているでしょ〜」

ラクシャータは羨ましいかとロイドに笑顔を向けた。

『お二人は知り合いだったんですね』

「そのセシルも知り合いよ翔君。私達三人は同じ研究所で働いていた事があつてね〜」

『凄いですね、大東亜連合、EU、世界でも名を馳せている研究者達が一緒に研究所にいたなんて』

「いや〜あの頃は僕達もまだまだ新米だったからね〜有名になつたつて言つても僕もセシル君も、そしてラクシャータも好きな事を好き勝手やった結果、役に立つ物が出来たと言う話しだしね〜」

セシルとラクシャータは二人揃つて確かにと頷いていた。

「さて神風大尉、本日はナイトメアの事で来たのだが」

『何でしよう?』

「統一中華へ送られたナイトメア、我々イギリスにも欲しいのです
」

「!?!」

唯依は何故知っている、目を見開いて驚いた顔をしていた。

それもその筈、普段統一中華への連絡等は咲世子が全て行っていた。

彼女の能力は皆が認める高さだ。

だからこそこの事を知られているのに驚愕してしまっていた。

「この事を知ったのは偶然だった……元々統一中華の上将が日本へ行くと言う事で注意はしていたのですよ。しかし日本帝国は簡単に情報を得ることが出来なかった。だが統一中華の方で偶々情報を得る事が出来たのですよ。そこで星刻上將が神風大尉と会っている事、そして統一中華の内部で色々な動きがあると言う事、この事を繋げていくと星刻上將が何しに神風大尉に会いに来たのかは予想がついたのですよ」

その事に翔達は驚きで何も言えなかった。

まさかそれだけの情報で此処まで把握出来るなんて思っていなかったからだ。

S i d e 翔

まさかルルーシュ陛下……いえ、今は殿下でしたね。

それにロイドさんにセシルさんまで来るとは思っていなかったです。

それに……

「この事を知ったのは偶然だった……元々統一中華の上将が日本へ行くと言う事で注意はしていたのですよ。しかし日本帝国は簡単に情報を得ることが出来なかった。だが統一中華の方で偶々情報を得る事が出来たのですよ。そこで星刻上將が神凧大尉と会っている事、そして統一中華の内部で色々な動きがあると言う事、この事を繋げていくと星刻上將が何しに神凧大尉に会いに来たのかは予想がついたのですよ」

と、聞かされた時、流石はルルーシュ殿下と内心納得もしていたのです。

ルルーシュ殿下が前の世界と同じくらいの能力を持っているのなら、調べられない事の方が少ないのです。

以前イギリスがヨーロッパで唯一、BETAに侵略されても跳ね除けている事から優秀な衛士や政治家等がいると思っ調べてたら、ルルーシュ殿下がいて吃驚です……

しかしこの三人とは色々と手を結んでおきたいです。

絶対に損にはならないですから！

Side Out

「それでどうでしょうか？」

ルルーシュは見る人皆が見惚れる様な笑顔を見せていた。

『まさかただでは言わないでしょう？』

「勿論、ロイド達が所属する特別戦術機開発部が開発したデータ等を提供する」

「ロイドにセシル、あんた達の作った物って、ナイトメアと対になるほどの価値があるの？」

ラクシャータがナイトメアを提供する価値があるのかを尋ねた。

「あは、そう言うだろうと思ってここにその一部のデータを」

ロイドが持ってきていたデータを部屋のスクリーンに映すと、そこにはエクスカリバーのデータや、ナイトメアや戦術機に使えるブースターや間接部の耐久を上げる為の追加装備などが表示されていた。

「……へえ〜一つ一つではナイトメアの価値に敵わないから、複数の研究結果での取引ね」

ラクシャータは真剣にスクリーンに目を通していた。

「僕やセシル君、ルルーシュ殿下にだってナイトメアの価値はわかっているさ〜だから役に立つ物を集めたんだよ」

「どうですか神風大尉？」

『……そうですね、これならイギリス用に改修したサザerlandでどうですか？』

「ふむ、最新型は流石にこの条件じゃ無理か……しかし条件的には統一中華よりは良いと思っていたのだがどうして我々には最新型は無理なのですか？」

『統一中華に渡した機体はじゃじゃ馬でして、それに逐一データを送る事も条件となったりしていますので』

「成程……それに先の事を見据えてとなると……そうなりますか」

ルルーシュは顎に手をあて考え込んでいた。

だが翔にはプレッシャーだけが押し寄せてきていた。

翔と星刻との取引を少しの情報だけで看破し、今の日本や統一中華の状況から未来の状況まで見越していそうだからだ。

翔には流石に未来の状況までは見通す事が出来ない。

出来るとしたらルルーシュや香月博士くらいだと翔は確信していた。

「ふむ、イギリスと同盟といっても今はアメリカが日本に常駐しているし、イギリスから日本までの距離に現在の我々の状況からあまり意味は無いな……かといって其方が欲しい物となると人材か……」

『そうですね……今は優秀な人材が欲しいですね。朝鮮半島が墮ちた今、時間が無いですからね』

翔やラクシャータは既にBETAが、何時来てもおかしくないと思っっているため、優秀な人材は研究者だろうが、衛士だろうが喉から手が出るほど欲しかった。

「ならばロイドとセシルをお預けしよう」

「「!?!」」

ロイドとセシルは驚きで声も出せなかった。

『いいのですか？ お二人は其方にとっても重要な方達なのでは？』

翔側にとっても願っても無い条件であったが、そう簡単に手放せる人間で無い事もわかっていた。

「勿論そうだ。だからこそ条件に見合う価値がある」

『わかりました。そちらにはサザーランドの改修型と高天原を……
そして新型装備でどうですか？』

「まさかアヴァロンを出してくるとは……これは姉上にいい土産が
出来たな」

ルルーシュもまさかアヴァロンを出してくるとは思っていなかつ
た為、内心驚いていた。

『こちらこそ優秀なお二人をお借り出来るので助かります』

後にイギリスはこの会談で手に入れたアヴァロンや新型装備を使
い、圧倒的戦果を挙げていく事になる。

これによりイギリスはEU最強をさらに強めていくことになった。

27・ルルーシュ来日（後書き）

アイディア募集中！

次回

遂にBETA襲来！そして原作キャラも活躍するかも？

28・襲来（前書き）

んー直すかもしれません。

28・襲来

1998年7月7日

遂に翔が恐れていたBETAによる日本侵攻が開始された。

最初にBETAが日本に上陸してきたのは、翔達の予想とは違い中国地方からだった。

翔達は九州からだと思っていた為、九州に戦力を集めるように上に進言し、翔や十二の剣も九州で準備をしていた。

だが、それが仇となってしまった。

直ちに中国地方へと赴こうとした翔達だが、更に運悪く大型台風が日本に上陸していた為すぐさま向かう事が出来ないでいた。

そのせいで中国地方には元々居た帝国軍しか残っておらず、戦力が不足していた。

「紅蓮、九州に居る帝国軍や翔殿達は直ぐに中国地方へと行けないのですか？」

「はい殿下……運悪く強力な台風が上陸してしまして、準備や移動に何時もの倍以上の時間が掛かっています」

紅蓮は表情を曇めながら悠陽に現状を報告した。

「真耶さん、国連軍とアメリカ軍はどうなっているのですか？」

「はい、既に応援を要請しております。国連軍は迅速に動き出して行動しているのですが……アメリカの動きはどうにも鈍いです」

真耶の方も何時も以上に、表情が引き締まっている。

「恐らくは日本がピンチになってから動き出そうとでも考えている

のでは……」

この事に部屋に居て現状の事を確認していた者達は、一斉に顔を強張らせた。

「くそッ！ 何の為の同盟で、幾らアメリカに金を払っていると思っ
っているのだ！」

「奴等は更なる技術を今回のBETA侵略から日本を守る事で手に入
れたいのだろう」

「神凧大尉の技術か……」

「彼の技術は何処の国でも欲しがる物だ……現にイギリスから態々
皇族が来たではないか」

部屋に集まっている者達もアメリカの対応への不満が噴出した。

「皆の者落ち着きなさい……真耶さんもう一度政府に話しを通してア
メリカ軍に要請を」

「かしこまりました」

静かに真耶は悠陽に一礼し静かに部屋を去って行った。

現在の悠陽には実権が殆ど無い。

その為、政府に話しを日々通さなければいけない状態だった。

政府高官や政治家に役人達は、一応お伺いを悠陽に立てには来る

が殆どは彼らが決めていた。

政府高官や政治家の中には悠陽へ恭順する者達もいるが、それは少数だ。

今は翔達のおかげで日本独自で動くことも多くなったが、今でも政治家や政府高官の多くはアメリカの言いなりになる者達も多い。

アメリカはナイトメアの情報も流せとその政治家達に言い放ったが、流石にナイトメアの技術は殿下自身が注目しているので、政府も好きには出来ていないのが唯一の救いではあった。

「殿下……」

「今は一刻も早くBETAの殲滅と国民の避難を」

「はッ！ かしこまりました！」

紅蓮も確りと頭を下げし部屋を去って行く。

「私に力があれば……いえ、今は何としてでも被害を最小限にしながら……」

悠陽は静かに部屋で呟いていた。

国連軍は既にヴァルキリー隊や他の部隊迄も、香月博士がお偉方を脅して戦場へと送っていた。

当初国連軍もアメリカからの圧力があり直ぐに軍を出すつもりは無かったのだが、香月博士はそれを予期していたのか、お偉方へメーイルを送りつけた。そうするとお偉方は手の平を返したかのように軍の出撃を認めだしたのだ。

『ヴァルキリーマムよりヴァルキリー隊に伝達！！ 現在師団規模のベータ郡が進撃を開始。其方に向かい進行中。現在帝国本土防衛軍が接敵、交戦を開始した。ヴァルキリー隊はこれより本土防衛軍を援護する………』

徐々に現われる無数のBETA。

それに向けて二人一組でハドロン照射砲を構えるヴァルキリーズ。

『貴様らが下手な銃撃も今は何処に撃つても外す事は無い！ 安心して撃て！』

『了解』

『カウントを始めるぞ！』

『5』

『4』

『3』

『2』

『1』

『全機撃てえええー！』

伊隅からの命令でヴァルキリーズの面々は一斉にハドロン照射砲

を撃ち放った。

ヴァルキリーズから放たれたハドロン砲は赤い筋を戦場に残し、一直線にBETAへ向かっていく。

その後には轟く轟音。

一瞬にして数多のBETAを葬り去った。

『凄い……』

『ああ、本当にこの舞鶴サザランドやこのハドロン照射砲を造った神風大尉には感謝だな』

『そうだな。だがここからが始まりだぞ？ 油断するなよ！』

『『『『『了解！』』』』』

周りの国連軍も同時に動き出し、ミサイルや銃弾が雨の様にBETAに降り注ぎ、それにより突撃級や要撃級はミンチになっていた。

それを確認するとヴァルキリー隊はMVSの刀を構え、一気にBETAへと突撃を開始した。

『はあああああ！』

叫びと声と共に伊隅は刀で突撃級を両断し、さらにすぐ近くに居たもう一体も刀で叩き切る。

他の隊員も伊隅に続き、要撃級や突撃級を薙ぎ払っていった。

S i d e 沙霧 尚哉

ちッ！ やはりBETA共の数が多いな……

これで佐渡島のBETA共まで来たら持ちこたえる事は不可能だ

S i d e
O u t

戦闘開始から、4時間以上が経過した。

B E T Aの上陸後も、一気の突破を許さず、何とか海岸線から1
0 k mラインを死守している。

勿論その間は長い休息など全く取れていない。

防衛ラインの後背に設置された補給コンテナから、エナジーフィラーや武器弾薬と推進剤の補給を行うだけだ。

機内備え付けの水分と栄養剤を補給し、直ぐに動けるようにしている。

味気ない事この上ないが、文句を言っではいられない状況だ。

今は戦闘直後の補給をしながらの小休止、錠剤のみ込む以外は、水は僅かに喉を湿らす程度に済ませる。

ヴァルキリーズの後方からは帝国軍のナイトメア舞鶴サザランの駆動音が鳴り響き、帝国軍も休み無く動きBETAを屠っている姿が見える。

だがヴァルキリーズの面々も何時までも止まっている訳にはいかなかった。

そこには突如前方のBETAの群れの中から光線級が出現したからだ。

『ヴァルキリーズ各機！ 光線級を確認したな？ 直ぐにあの鈍間共を殲滅するぞ！』

ヴァルキリーズが動き出すのと同時に、高天原アヴァロンが前方に出て、ブレイズルミナスを展開した。

するとそこに光線級から数十本のレーザー照射がアヴァロンに向かっていく。

だが、レーザーはブレイズルミナスによって防がれた。

『よし！ 次の照射までに光線級を蹴散らすぞ！』

『『『『『了解』』』』』』

ヴァルキリーズ隊が光線級に向かい突撃していくが、光線級を守るBETAの数もかなりのものだった。

『ちッ！ 思った以上に数が多いな……ヴァルキリー1よりヴァルキリーマムへ。高天原のハドロン砲で一掃出来ないのか？』

『こちらヴァルキリーマム。ハドロン砲はエネルギー消費が多く、未だ戦場がどうなるか判らない為、多様は避けたいとの判断です』

『くッ了解！』

『仕方が無いですね大尉、私達だけでやりましょう！』

ヴァルキリーズ隊は気にした様子は無く、何時もの様にBETAへと切り込んで行っている。

『そうだな、だが無茶だけはするなよ？』

『それは無理な相談ですって！ この数相手には！ っと！』

喋りながらも次々と要撃級や突撃級を切り裂いていく。

『全く……』

伊隅はそう言いながらも、内心此処まで状況の悪い戦場でこんな話しを出来るメンバーを、心強いと思っていた。

28・襲来（後書き）

アイディア募集中です。

29・横浜ハイヴ（前書き）

遅くなったうえに、短いです……すみません。次はもう少し早く投稿できるようにしたいですが忙しくてどうなるかわからないですが頑張ります！

29・横浜ハイヴ

BETAが日本に上陸して既に一週間の時が流れた。

この一週間徐々にBETAの物量に押され、既に中国地方はBETAに蹂躪されてしまっていた。

帝国軍、国連軍、双方共に奮戦したがそれでもBETAの圧倒的物量には歯が立たなかった。

日本政府はアメリカへ同盟の事で問い詰め、アメリカにさらなる援軍を要請したがアメリカは急に同盟を一方的に破棄し、日本から撤退していった。

その事でアメリカの戦力を考えていた日本は混乱に陥り、アメリカに担当して貰う筈だった地域はどうしても戦力不足に陥り、被害が拡大してしまっていた。

だがこの一週間で天候も回復し、九州に送っていた帝国軍や一部の帝国ス衛軍、星刻が日本へ派遣した部隊にそして十二の剣も戦場に参戦することが出来た。

しかし日本にとっての不幸はそれだけではなかった。

中国地方からのBETAの進撃に加え、佐渡島からのBETAの進撃、そして最悪なのは横浜にBETAが侵攻して来てハイヴが出来た事だった。

さすがに多方面からの攻撃に、日本が世界に誇る紫炎や舞鶴を用

グロースターザランド

いようとも、簡単に防ぐことは不可能だった。

だがそれでも帝国軍は自分の国と言う事もあり、国連軍よりもBETAの迎撃数が圧倒的に上であり、損耗率も低くすんでいた。

それにナイトメア全部に採用されているサバイバルコクピットの御蔭で、人的被害が普通の半分以下にまで下がっていた御蔭でもある。

更に斯衛軍の誇る最新型ナイトメアであり、準第四世代月下の奮迅振りが凄まじかった。

一機一機に簡易型の拡散型か収束型の輻射波動が付いており、腕にはガトリング、腰にはMVS H等最新の装備で圧倒的な戦果を挙げている。

『ヴァンガード小隊各機へ、武器、弾薬等の残りはどうですか？』

『こちらヴァンガード2、残りは突撃砲とランスと65式近接戦闘短刀1本のみ』

『こちらヴァンガード3、残りは突撃砲と支援砲とランスだけ……』

『こちらヴァンガード4、Mk 57とランスだけです』

その後次々とヴァンガード各機から報告が挙がるが、どの機体もぎりぎりの状態であった。

だが隊長であるモニカはその事を表情に出す事無く、的確な命令を出していく。

「このままでは拙いわね……如何にかして一回後退して補給しなくては持たない……かと言って他の部隊も余裕がある訳でもない……」

機内で呟きながらも、モニカはBETAをサザーランドのランスで貫きながら解決策を探していく。

『司令部よりヴァンガード小隊へ！ エリアA-8-3のシャムシル中隊がBETAにより壊滅！ それによりBETAが其方に方向を向けた！ 接触は約500秒後！』

司令部の方も予想外だったのか慌てふためいた声で通信が入る。

『くッ！？ このタイミングで！？』

こればかりはモニカも顔を顰めてしまった。

ただでさえ機体も残弾数もギリギリだと言うのに、此処に来てBETAの増加、はつきり言って絶望的だ。

だが、それでも諦めると言う選択肢は勿論無かった。

『がッ！？』

声が聞こえてきたほうへモニカは機体を向けると、そこには左腕を粉碎されているサザランダが居た。

『ヴァインベルグ！？』

『はああああー！ー！ー！』

すぐさまカバーに入ったアーニヤによって、ジノの周りにいたBETAは撃ち殺された。

『ジノッ！？ 大丈夫ッ！？』

『ああ、助かったアーニヤ』

『そう……ならよかった』

アーニヤはそう言うど焦っていた表情は普段の表情に戻り、モニカも安堵の息を吐いた。

だがそうしている間にも次々とBETAが接近して来る。

『大尉！ 後方よりアヴァロンが！』

『何ですって！？ 国連の！？ それとも日本の！？』

『待ってください………アヴァロンに剣のパーソナルマークがあります！ あれは日本のです！』

『と言う事は神風大尉が……また助けられる事になるなんて思いもしなかったわ』

その表情は柔らかい笑みを浮かべていた。

Side 神風 翔

『ハドロン砲発射準備お願いします!』

「了解です」

僕の指示で皆さんテキパキと動いていきます。

皆さん優秀なので僕がする事など殆ど無い状態ですね……

『唯依姉さんに可憐さんに朱雀さんも準備をお願いします』

「了解!」

敬礼とともに三人は急いで格納庫へと向かって行ったのです。

「翔君、あの小隊前に助けたことのあるヴァンガード小隊みたいよ

「？」

ラクシャータさんからの報告に僕はびっくりしてしまいました。

『モニカ大尉達ですか、まさか日本に派遣されていたとは思っていませんでした』

「でも彼女達優秀みたいね〜損傷は激しいけど未だにあのBETA達相手に健在なんだから」

確かにその通りです。小隊規模で一人も欠ける事無くいるんですから。

『確かにそうですね……是非ナイト・オブ・ラウンズ十二の剣に欲しい人達ですね』

「う〜ん普通の方法ではそれは難しいわね〜まあ〜絶対出来ないって訳ではないけど」

そこにハドロン砲の準備完了の音が艦内に響き渡り何時でも撃てる状態へとなりました。

「翔君、ハドロン砲発射準備完了です」

『了解です。5秒後に発射します』

『5』

『4』

『3』

『2』

『1』

『ハドロン砲発射!』

その合図と共に高天原からハドロン砲の一筋の赤黒い光がBETAを消滅させていき、それと同時に紅蓮二式、蒼月、白兜の三機が
アウマロン
ランスロット
出撃したようです。

『光線級の確認は取れていますか?』

「いえ、光線級はいない模様です」

光線級が居るか居ないかでは戦術から戦略まで変わってしまう為、一番に確認しなければならぬのです。

『それなら此方も後方から援護ミサイルを』

「了解です」

これでこの戦闘域は何とかかなりそうですが、全体的に見てやはり劣勢ですね……

佐渡島方面からも来ていると言いますし……でも今はその事を考えるよりも目の前のBETAの殲滅ですね。

Side Out

『可憐、枢木、兵装は自由！ 前方のBETAを蹴散らしあの部隊を救出するぞ！』

『了解！』

返事と同時に三機が一斉にBETAの群れに蒼月と紅蓮二式は八

ドロン照射砲を、白兜からは突撃砲が放たれBETAを次々と殺していく。

後方の高天原アヴァロンからのミサイルでの援護攻撃で次々とBETAは吹き飛んでいく。

それを機にヴァンガード小隊も体勢を立て直していた。

『ヴァンガード小隊は補給しに後方に下がってください』

『しかしたったの三機では！』

『問題ない、私達ナイト・オブ・ラウンス十二の剣なら』

自信満々に言う唯依の言葉にモニカ達は直ぐに覚悟を決め後方へ下がった。

『了解した！ 直ぐに戻る』

ヴァンガード小隊は一斉に後方へ下がっていく。

『さて二人とも当分は三機でのみここをあたる……だが無理はするなよ？』

『了解』

三機は散開し、どんどんBETAを殺していく。

こうして三機はヴァンガード小隊が補給するまで粘り、合流したヴァンガード小隊と共にBETAを何とかくい止めることに成功し

た。

だが他の部隊等の消耗が激しい為、一度撤退する事となった。

30・引越し

BETAが日本に上陸して二週間。

この間に日本は中国地方が壊滅状態に陥り、京都目前まで迫られた。

BETAの思わぬ奇襲のせいで国民1000万人以上の被害が出ってしまったが、帝国軍、国連軍、斯衛軍等の活躍により何とか今回は撃退する事に成功した。

今回の事で京都にある帝都を一時的に仙台に移す事が決定し、色々忙しい事となっている。

しかし問題はこれだけではない。

アメリカの同盟破棄に今回の戦いの最中に出来た横浜ハイヴ……色々と問題が山積みで翔もその手伝いに奔走していた。

「翔君、こっちはデータとか必要な物は纏め終えたけどそっちはどう？」

『こっちも殆ど纏め終わりました』

翔は咲世子に車椅子を押されながら色々と整理している。

「翔君、あっちの部屋は終わったわよ」

ラクシャータは煙管を啜えながら部屋に入ってくる。

『あれ？ ロイドさん達は？』

「ああ、ロイドとセシルは整理している最中に、色々な研究データを見つけてそれを見てるわよ」

「はあーあの二人は……」

唯依は額に手を当てながら溜息を吐いた。

「翔君、ちょっと注意しに行つて来るわね」

唯依はそう言い部屋から出て行つた。

「そう言えばさ〜翔君、新しい帝都ではナイトメア開発局の研究室はどうなっているの？」

『最優先で造つてくれているらしいですよ？』

「やっぱり最優先なのね。まあ〜当たり前よね〜今回の日本防衛はナイトメアがなかったら帝都は陥落確実だっただろうしね〜」

ラクシャータはソファーに横になりながら頷いていた。

『ですがこれから大変になります……………』

翔は顔を俯かせていた。

「そうね〜横浜にまでハイヴが出来てしまったしね〜」

『はい………… 最優先で潰したい所ですが、直ぐには無理ですね』

「恐らく半年くらいは動けないわね〜アメリカのせいで損害が激しいもの」

『まさか同盟を一方的に破棄するとは思いませんでした……………』

「まったくよね〜でもこれで日本はアメリカにお金を払う事もなく

なるし、これはこれで良いんじゃないかしら？」

ラクシャータは内心ではこっちの方が良かったと思っている。このままズルズルとアメリカの動きを警戒しながらなんて面倒臭いだ。

『そうですね……これでアメリカは日本に表立って干渉できなくなりますし』

「まあ、食料やらで無理矢理言ってくるかもしれないけど、今回の事で世界中で立場は弱くなるでしょうね」

『食料ですか……そちらも考えなくてはいけないですけど、恐らく神楽耶さんが手を打つと思いますけど……』

翔はあの神楽耶が何の手も打たないとは考えてはいなかった。

唯でさえ皇家は日本古来の考え方をしている家だ。

それが裏切ったアメリカにこれ以上日本に付け入らせるとは思えない。

「神楽耶と言うとあの皇グループの？」

『はい、そうです。神楽耶さんは有能ですから』

「へえ、私は会った事はないけど、翔君が言うならそうなんでしょうね、まああの世界的に有名な皇グループを率いているくらいだしね」

『ですのでアメリカが食料で言ってきたても、ある程度は何とかなる
と思いますよ?』

神楽耶なら世界中に色々とパイプを持っているだろうし、特にア
メリカから食料を買えなくなっても、オーストラリア等のルートも
ある。

「それなら私達は今と変わらず、ナイトメアの開発に打ち込めば大
丈夫かしら?」

『そうですね。他にやりたい事があれば言ってくれば検討します
よ?』

ラクシャータなら好きな研究を任せていけば、必ず利益となって
帰ってくるからだ。

「今の所はないわね?それよりも翔君、今週の身体の検査をしまし
ようか?」

『わかりました』

「咲世子さ〜ん、翔君を私の部屋にお願い。私は後から向かうか
ら」

「畏まりました。翔様行きましょう」

『はい。お願いします』

S i d e
唯依

まったくロイドとセシルの二人は忙しいって言うのに！

確かに研究者の二人にとって、此処にある物は宝の山なのは判るが、もう少し自重して欲しい……

来たばかりの二人にまだ見せていない、翔君やラクシャータが現在造っている最新の物を見せたらどうなる事やら……

「ロイドにセシル！ 二人とも整理は終わったのか？」

私に背を向け何かの資料を読んでいた二人は、私に急に声をかけられた為か背筋を一気に伸ばし、ブリキの人形のように首を此方に向けてきた。

「あッ……ははは…… 篁中尉」

「いや〜整理しようとしていたら、次々に興味深い物が見つかったよ〜、ついつい読んじゃったよ〜」

「はぁー……」

私は額に手を当て、俯いてしまった。

セシルはバツの悪そうな顔をしているが、ロイドは呑気そうに笑っている……

「まったくお前達は……」

「御免なさい篁中尉……どうしても気になってしまって」

「そうだよ〜これだけの物が目の前にあつたら見ちゃっつよ〜」

確かに私だつて目の前にこれ程の研究データがあつたら見てしまつかもしれないけど……

「はぁ……後で幾らでも見れるんだから、今は整理を終わらせる」

「わかりました。ほら、ロイドさんも」

「はい」

二人は今迄呼んでいた資料を片付け始め、動き出した。

さてと、私も翔君の所に戻らないと。

Side Out

『ラクシャータさん、検査の結果は如何ですか？』

翔は咲世子に車椅子を押ししてもらい、ラクシャータの研究室へと来ていた。

そこで翔は周一に行われている体の検査を行っていた。

「うーん、やつぱり足の方は特に変化は無いわね……でも声帯の方は徐々によくなって来ているわよ？」

『声が出せるようになりますか？』

「私に任せて頂戴」

ラクシャータはデータを見ながら、胸を張って応えた。

ラクシャータは戦術機を研究開発するまでは、医療の方で有名だった。

その頃の経験や治療の為に作った道具が、今の翔の治療に使われている。

どれもこれもラクシャータオリジナルで、最新設備が整っている医療関係施設でも中々お目にかかれる物ではない。

「今日はこれくらいでいいわよ」

『有り難う御座います。ラクシャータさん。それでは失礼しますね』

「また後でね」

ラクシャータは手をひらひらと振りながら作業に戻って行った。

翔と咲世子はラクシャータの部屋から出ると、こちらに向かって

来ている唯依を見つけた。

「あつ翔君！ 咲世子さん！ こんな所に居た！」

『唯依姉さん、ロイドさん達は？』

「あの二人は資料の片付けに戻ったわ。まったくあの二人は……」

ブツブツと文句を言う唯依。

『あの二人、特にロイドさんは自分に興味のある物しか目に入らないタイプですからね』

前の世界でもそうだったと翔は思い返していた。

「本当に……優秀なのは認めるけどね。仕事も楽になったしはかどるし」

二人がいる御蔭で全ての作業が、スムーズに行くことは確かだった。

特に実験ではロイド、書類関係はセシルが優秀だった。と言うよりロイドが書類関係の仕事を全くしないので、セシルが仕方がなくやっていると言う訳だが……

『二人にしたら研究者としての血が騒ぐんでしょうね』

「確かに……さて、それじゃ食事にでも行きましょうか」

『はい』

三人は食事を取りに部屋へ向かった。

31・香月 夕呼の企み(前書き)

遅くなった上に短いです。すみません……

31・香月 夕呼の企み

今、国連本部では日本で起こったBETAとの戦いの事が話し合われていた。

「この度の日本に侵攻したBETAに、横浜に出来たハイヴと事態は深刻になりつつある」

「その通りだ。大陸も既にBETA共に奪われ、今回は日本……このままでは」

「各国代表の言う通りじゃ。何より今回問題なのはアメリカの一方的な同盟破棄であろう」

日本の代表席に座る一人の老人が静かに声をあげた。

「確かに！」

「そうだ！」

「今回のアメリカの行動は目に余る！」

「世界が協力して行かねばならぬ時に！」

アメリカに良い感情を持っていない各国が、アメリカに対して非難の声をあげ始めた。

「各国が何と言おうとも我々はアメリカは今回の行動を間違っているとは思わない。今回我々が日本で担当する戦闘区域は日本にいた

戦力では対応できる物ではなかった。さらにはG弾や核も使用してはいけないとまで言われたのだ！　だが日本はアメリカにそれでも守れと、更に無駄死にしろと言ってきたのだ！　我がアメリカ国民を無駄に死なせるわけにはいかない！」

「ふん、詭弁だけはたつようじゃのう」

「何だとツ！」

「貴様らアメリカは元から日本を助けるつもり等無かったのであるう？」

「何を馬鹿なことを……桐原殿、アメリカは今回の同盟破棄は決してしたくてした訳ではない」

「ふん……我々日本は今回の事で今後アメリカに技術等は一切提供はしない。詳しく言うならナイトメア関連はアメリカには何一つ提供される事は無い。他にもこれまで其方に色々と便宜を図っていた事も全て無くなると思え」

「その場合食料などの支援は要らないのだな？」

嘲笑めいた笑いを浮かべ桐原を挑発している。

「それしか言えんのか？　それに貴様等に心配される必要は無い。それよりもアメリカはこれからの事を考えるのじゃな」

「くツ！」

アメリカは悔しそうに齒噛みをしていた。

『此処が新しいナイトメア開発局ですか』

翔は研究室に入ると周りを見渡しながらそう言った。

「だけどこれは思っていた以上に広いわね翔君……」

唯依も周囲を見渡しながら言葉を発した。

二人の後に入って来た可憐や朱雀、ラクシャータやロイドにセシルも後から入って来て思っていた以上の広さに驚いていた。

「これは凄いですね。篁中尉！」

「たしかにこれは凄い」

「本当にねえ〜これなら色々を持ち込んだり、研究とかもしやすそうね〜」

「うんうん。これは世界でもトップクラスの研究室だね」

「そうですね、ロイドさん」

可憐達も部屋の中を見渡し興奮していた。

これから自分達の生活する空間なのだから、出切るだけ過ごし易い所が良いに決まっている。

『それじゃ皆さん荷物を部屋へ入れましょう』

「そうね。力自慢の朱雀と可憐は重い物よろしくね」

「はい」

「私力自慢って思われてたんですか!？」

朱雀は素直に頷き、可憐はショックを受けていた。

1998年10月10日

香月 夕呼は政府の重鎮が集まる会合の場へと来ていた。

「それで香月博士、今回のこの会合に来た目的は何か？」

「このたびは時間を作って頂き有り難う御座います。今回は少々提案したい事があります」

「提案か……博士が態々来て言うくらいのも物だ。さぞ重要な案件なのだろう」

「そうだな。博士自身が来る時点で重要な事だろうな」

政治家達が香月博士を見ながら話し合っていた。

「それで博士、その提案とは？」

「はい。今回のBETAの日本侵攻で日本は大変な立場に陥りました。このままでは軍事に政治にと日本は発言力を無くしてしまいます」

「それは……確かに……」

「このままではな……」

「そこで私は横浜に出来たばかりの横浜ハイヴの制圧とG元素取得こそ、オルタネイティブ計画を飛躍的に進展させ、世界的な政治的劣勢を覆す唯一の策であると断言します」

香月博士の真剣な目や雰囲気呑み込まれ、周りの政治家達も真剣に話し合いました。

そこから少し時間が経ち政治家達の意見も纏まってきた。

「確かに帝国軍からも若い段階で叩くべしと言われている。国連を

介して横浜ハイヴの攻略を働きかけよう」

こうして香月博士の目論見どおりに事が進み、帰りの車中笑い声をあげてまりもに絡んでいた。

32・翔の周囲

ナイトメア開発局

咲世子は自身の主である翔の元へ書類を運んでいる最中だった。

その書類の量はとんでもない量で一開発局が見る量ではない。

だがそれは、ナイトメアと言う現在世界で一番注目を浴びている物を造っているせいでもあった。

「咲世子様」

そこに侍従姿の女性が、咲世子の後ろに突如現われたかの様に出現した。

「どうしました？」

「アメリカからと思われる工作員が侵入してきていたのでその処理の報告を」

「そうですか……此方へ引越してきて早々来ましたか」

「それと城内省の一部で不穏な動きがあるとの報告が……どうやら米国に通じてる者が居るようです」

「『日米安保条約』を一方的に破棄した国に未だに通じているとは……分かりました、其方は私が動きません。ですが私が動かなくとも恐らく鎧衣が動くでしょうが」

咲世子は最初から分かっていたと言っ様に普段通りに微笑んでいた。

「他の者達にも当分の間は現状の警戒態勢を維持するようにと伝えておいて下さい」

「了解しました」

侍従姿の咲世子の部下は音も立てずにその場から姿を消した。

「翔様へ害をなす輩が増えて困りますね」

咲世子は呟きながら研究室へと足を進めた。

だがその目は決して普段翔に向けているような目ではなかった。

ナイトメア開発局の自室にて、翔は何時もの様に仕事をしていた。翔がやっている仕事は多岐にわたっている。

ナイトメアの新規開発は勿論の事、既存のナイトメアの改良から戦術機の改良もしている。

他にもサクラダイト関連から武器の開発、世界中の各企業との交渉等もして忙い状況だ。

そんな中、何時も仕事を唯依と可憐が積極的に手伝ってくれている。

勿論他の人達も手伝ってくれているのだが、科学者であるロイド、ラクシャータはナイトメア関連の事で忙しいし、態々他の事に手を出す事はしない。

セシルはロイドの書類の処理で忙しくそれどころではないし……

朱雀は残念ながらこう言うことにはまったく向いていない。

なので後は唯依と可憐の二人が翔の手伝いをしている。

それに二人は頭もよくナイトメア開発の初期からいる為、何も問題なく手伝えている。

そんな中部屋にノックが響き渡った。

「翔君」

『どござ』

翔の返事が返されると部屋に、唯依と可憐の二人が入って来た。

「翔君一休みしましょう?」

「お茶も持ってきたし」

可憐の手には湯気を上げている湯飲みが乗った御盆があった。

『そうですね。丁度区切りもいいですしそうします』

唯依と可憐は翔と向かい合いで座り、お茶を飲みお菓子を食べました。

「それにしても忙しいですね……」

可憐がくたびれた様に声をあげ肩を叩きだした。

「そうだな。だがこれは我々ナイトメア開発局しか出来ない事だ」

「それは分かってはいるんですけど……」

『ごめんなさい……可憐さんや唯依姉さんには衛士だけをやっていて貰いたいですけど』

翔が気落ちしたのを見て、二人は椅子から慌てて立ち上がった。

「翔君が謝る事じゃないわ！」

「そうそう！ 私達が好きでやっていることだし！」

二人は一生懸命に問題ないと言い張った。

『有り難う唯依姉さん、可憐さん』

翔の笑顔を見た二人は幸せそうに微笑んだ。

「そう言えば翔君、その机に束になっているの何？」

可憐は部屋の隅に束になっている物を見つけて翔へ質問した。

『ああ……それですか』

翔はどうにも困った顔をしながら、見てもいいですよと二人に見せた。

「えッ！？」

「嘘ッ！？」

二人が手にとって見た物は如何見てもお見合い写真だった。

翔の名前は世界的に有名でとにかく売れている。

軍関係者で知らないものなんて誰もいない。

それ故に味方に引き込みたいと何処の国もが画策している。

その一つがこのお見合いの様な形だった。

これで翔が気に入った相手がいれば、最低でも接触を図る事が出来ると考えているのだ。

世界各国の社長令嬢や政府高官の娘。

他にも軍高官の娘や、軍人もいる。

そして写真に映っている者達は全員見た目が良く、身体つきも女性らしく、現在結婚していない男達が見たら泣いて喜んでお見合いをするだろう。

「これ全部がお見合い写真なの？」

「これは凄いわね……」

二人はパラパラと幾つものお見合い写真を見ていく。

「何を考えているか分かりやすいわね……」

「本当に……あつ 図々しくもアメリカ高官の娘もいますよ!？」

可憐はアメリカのお見合い写真を見つけ憤慨していた。

「翔君、叔父様はこの事は知っているの？」

『勿論知ってますよ。おじさんがこの写真全部持って来たんですから』

「えッ!？」

「なッ!？」

二人はまさか巖谷中佐がこの話を持って来たとは思っていなかった。

勿論巖谷中佐が進んでこの話を持ってきた訳ではない。

巖谷中佐も頼まれて仕方なく、翔の下へと持って来たのだ。

まあそれ以外にも唯依に発破をかける為でもあった。

翔は将来有望と言う事で、何処もが自分達の所へ引き入れたいと思っっているからだ。

巖谷中佐は勿論翔にも唯依にも幸せになって貰いたいと思っっているし、唯依が翔の事を憎からず所かかなり思っっていることも分かっている。

その為今回のような事を行い、もっと自覚させようと思っ た訳だ。

だが……

「叔父様……」

「巖谷中佐……」

二人の目付きが変わり、拳を握り締めている。

最後に自分がどうなるかは考えてはいなかったみたいだ。

日本は現在ナイトメアやそれを造りだした神風 翔、そしてサク
ラライトが特に有名だ。

しかし名を広めたのは皇グループの御蔭でもある。

ナイトメアを造りサクラライトを一手に販売し、世界に普及させ
ているのが皇グループだからだ。

その御蔭で皇グループも以前よりも有名になり、欧米の一般人や
アジアにもその名が更に知られるようになった。

その皇グループが現在ナイトメア事業以外にも力を入れているの
が合成食品だった。

今迄は軍人や難民キャンプで食べられていた合成食品が余りにも
不味かった。

だが翔が戦場に行く事になった事で唯依が皇 神楽耶へ美味しい
合成食品を作れないかを依頼したのが切欠だった。

「これなら翔殿にも満足して頂けますわね。貴方達もご苦労様でし
た」

神楽耶は皇食品が完成させたサンプルを食べ、満足そうに微笑ん
でいた。それを見た皇食品の責任者達は胸を撫で下ろした。

「有り難う御座います。今迄の軍の食品などは栄養が取れる事を第一とした物で味は二の次でしたので、味も楽しめるように開発しました」

「ええ、この味が戦場で食べられるのなら士気も上がる事でしょう」

「はい。ですが少々製造におけるコストが高くなってしまいました
が……」

少々残念そうな顔で話す責任者。

「それは仕方ありません。それに其れだけの価値があります」

後に前線ではこの皇食品の合成食品が人気になり、製造が追いつかなくなる事態になるとは神楽耶も、そしてそれを翔の為に依頼した唯依でさえも思ってもいなかった。

久しぶりに家でのんびりとしていた唯依と翔は、自室にてテレビを見ていた。

だがそこで緊急速報でテレビの内容が急に変わった。

「日本国民の皆様方に報告しなければならぬ事があります」

テレビに映ったのは現在日本を動かしているさかき榊 是親これぢか首相だった。

「この度我が日本はついにBETAの侵攻を受けました。そして中国地方が侵略され多くの日本国民の命が奪われてしまいました。ですがッ！ 我々は黙ってBETAにやられる訳にはいきませんッ！ そこで皆様方からは賛否両論がお有りとは思いますが、帝国議会で兵役法改正が可決されました。内容は徴兵対象年齢を16歳に引き下げる事となりましたことをご報告させていただきます」

翔と唯依はとうとう兵役法も改正されたかと思いテレビを見ていた。

「こればかりは仕方が無いわね……」

『そうですね……何処も余裕が有る訳ではないですし、日本は自国にハイヴがある国ですから』

「そうね。でも翔君の場合は今の兵役法でも当て嵌まらないけどね」

唯依はそう言って苦笑していた。

『でも唯依姉さんも本当なら当て嵌まらなかったんじゃない？』

「斯衛や武家は殆ど関係ないわ。皆幼少から訓練を受けさせられ、いち早く戦場に立つことになるの。だから私の様な歳でも早々と中尉へとなれたの」

『ふあゝそれは凄いですね』

目を大きく見開いて純粹に驚いていた。

「私達武家の人間はそれが当たり前だからそんな感じは無いんだけどね」

唯依は翔を膝の上に乗せながら頭を撫でていた。

「彩峰中将お久しぶりです」

巖谷中佐と藤堂中佐の二人は彩峰中将を一礼して出迎えた。

「止めてくれ巖谷、藤堂……私はもう軍を退役して中将では無いのだから」

「中将を呼び捨てるなんて無理です。なあ藤堂？」

「その通りです彩峰中将」

藤堂も巖谷中佐の言葉に同意していた。

「まったく二人して」

苦笑しながら部屋に敷かれている畳に座った。

「しかしこうして三人で会うのも久しぶりだな」

「そうですね」

「今ではそれぞれ立場があり中々会う事が出来ませんから」

藤堂の言葉に二人も確かにと頷く。

「だが巖谷も藤堂も随分と活躍しているみたいじゃないか？」

「私ではなく翔君と唯依ちゃん達が頑張ってくれているんですよ」

「ナイトメア開発局局長の神風 翔大尉だったな……」

「ええ、彼の御蔭で私も含め多くの命を救って貰いました」

藤堂もナイトメア開発局の活躍を身にしみて分かっている一人だった。

「今では斯衛軍専用機『月下』をも造り上げてしまったからな」

巖谷中佐は息子を自慢するかのようには話した。

「それに今も新しいナイトメアや兵器も開発中だし、唯依ちゃんとの仲もいいし言う事無しなんだよ」

それはもう良い笑顔で二人に話し続ける。

「落ち着け巖谷」

「分かった分かった」

藤堂も彩峰中將も苦笑していた。

「そう言えば巖谷は今や第一開発局の局長になつたらしいな」

「ははは、それも翔君の御蔭ですよ。まだまだ現役で動いている戦術機の方で色々アイデアを貰ったりしているので」

「そうだったのか。しかしその内ナイトメア開発局と第一開発局は一緒になりそうだな」

「恐らく何れはそうなるかと」

「やはりそうか。所で今ナイトメア開発局は何を手掛けているのだ？」

「唯依ちゃんに聞いた所、今は新型武器の開発と新型ナイトメアの開発、後は舞鶴サザランと紫炎ドロスターの改修を行っていると聞いています」

「ほう、それはいい。我が隊はどちらのナイトメアも使っているからな」

「不知火は使っていないのか？」

「確かに総合的には不知火の方が上かも知れないが、やはり最前線では整備性に機動性が上のナイトメアの方が好まれやすいな」

「巖谷、戦術機のOSとナイトメアのOSは同じではなかったか？」

彩峰中将が藤堂の話聞き不審に思い巖谷へと問いかけた。

「勿論同じですが、戦術機とナイトメアは造りが違う為どうしても違いが出てしまいますね。それに翔君の話ですとナイトメアの目

指す機動は現在出来ている機動所ではないそうです。ですが翔君自身が造ったOSではそれがまだまだ出せないと言っていました。『僕はOSを弄った事はあっても一から造った事が有る訳ではないので』と言って悔しがっていましたから」

「それであのレベルのOSを造っている時点で凄いがな、まさに天才と言う奴か」

藤堂も彩峰中将の意見に首肯していた。

だが巖谷だけはその言葉に首を振っていた。

「どうしたんだ巖谷？」

彩峰中将はまさか否定されるとは思ってもいなかった。

そこに静かに巖谷は語りだす。

「私も最初は彩峰中将と同じように言いました。だけど翔君は決して自分等は天才ではないと……彼が言うには『本当の天才とは世界を壊し世界を創れる者。そして自分に嘘を吐き自分自身すら壊せる者。それが本当の天才です。そう言う意味では香月博士もその一人かも知れませんか』とあの子は言っていました」

巖谷のその話しに二人は沈黙を持って応えた。

そして少しの時が経ち、藤堂が先に声を発した。

「未だ徴兵年齢にも達していない子供がそれ程の考えを持っているとは……」

「全くだ……だが何処か納得できる自分自身も居る」

彩峰中將も藤堂の言葉に首肯しながら翔の言葉に納得していた。

「将来が楽しみでしょう?」

巖谷はニヤツと二人に笑いかけ、二人も

「ああ」

「本当に」

と言い三人で笑いあっていた。

S i d e 可憐

私は今日ナイトメア開発局ではなく、一般衛士や訓練兵が居る訓練場で訓練していた。

偶には他の人と戦い経験を積みたいから、久しぶりにこっちに来ている。

だけど今日はどうも周囲が騒がしい。

P Xに休憩しに行くかどうか今日誰かが視察に来るらしく、P Xで食事を取っていた他の人達は色めき立っていた。

聞こえてくる話を聞いてみるとどうやら武家の人らしい。

まあ私には関係無いだろうし、全然興味も無くてどうでも良いと思っていた。

今の所属している部隊に満足しているし、翔君以外の方が上司なんて考えられないし興味も無かった。

私は訓練プログラムをしていると、どうやら視察の方が到着した

らしい。

山吹色の武家の衣服を身に付けた男性。

まあ私には関係ないので順調に訓練プログラムをこなしていく。

そのまま私は一時間以上続けて行い、サザーランド舞鶴での訓練を終わらせた。

シミュレーション機から降りると、私の目の前には山吹色の衣服を身に纏った武家の男がいた。

「君が今の舞鶴サザーランドを操作していた者か」

「はい」

私は敬礼をして返事を返す。

階級章を見ると相手は中尉でもあり武家の人間である為、殆どの日本人は失礼に当たらないようにする傾向がある。

私は特にそう言うのは気にしないタイプだが、翔君の立場をこんな事で悪くさせるのは嫌なのできちんと敬礼をする。

男は静かに私に一步近づいてきた。

「私は守木 真と言う。先ほどの訓練素晴らしく、つつい見惚れてしまっていたよ」

「有り難う御座います」

「君の名前は？」

「はッ！ 自分は紅月 可憐少尉でありますッ！」

彼の護衛に付く後方に居る者達が私の事を睨んで居る事に気付く。

どうやら容姿を見て私が純粋な日本人じゃないと気付いたようだ。

「実は今日来た視察には私の部隊に腕の良い者や将来性のある者を
探しに来ていたのだ」

「中尉の部隊にですか？」

「ああ、そこで訓練場の中を探していたら君を見つけた。どうだろ
う私の部隊に来ないか？」

「「守木様!？」」

後方で護衛の女性二人が声を上げているのが聞こえる。

昔だったらいざ知らず今の私には何も心に響くことは無い。

「申し訳ありません。私には今の部隊が合っています」

「今は何処の部隊に？」

「ナイト・オブ・ラウンズ
十二の剣です」

「「「!？」」」

三人は驚いた顔をしていたが、やはりうちの部隊は有名みたいで嬉しかった。

「そうか……それなら仕方が無いな」

彼は笑ってその場を去って行った。

・
・
・
・
・
・
・

ノックをし私は返事を待つ。

『どござ』

「失礼します」

ドアノブを回し室内に入る。

扉を閉めてから翔君の傍へ近づく。

「休憩中だったみたいね」

『はい』

私は笑いながら翔君の頬を優しく撫でる。

本当なら私は一衛士としてこんなに待遇の良い部隊になんか居れる筈じゃなかった。

特に今ではアメリカが条約破棄をしたため日本人のアメリカへの感情は悪化している。

さっきの守木中尉の護衛の態度が正にそれだった。

だけどナイトメア開発局の人間は誰一人そんな人は居ない。

それに翔君は今では世界でも重要な人間になっている。

その翔君にハーフの私がこうして一番近くにいる事を許されている。

そう、今では誰よりも大切な人の側に。

『可憐さん？』

翔君は不思議そうな顔でこっちを覗き込んでくる。

覗き込んでくる黒い宝石の様な瞳はやっぱり何時見てもとても綺麗で、いつい見惚れてしまう。

「何でもない」

私は笑って翔君の頬を撫で続ける。

本当に此処に来て良かった。

それは胸を張って言える。

だから此処を、翔君を守る為にBETAに何か絶対に負けない！

翔君を守る事は私や『ナイト・オフ・ラウンズ十二の剣』だけに許された事だから。

翔君が笑顔いてくれるなら私は何処までも強くなれるしなってみせる。

Side Out

34・日常2（前書き）

遅くなりましたーすみません！

34・日常2

「久しぶりだな枢木よ」

目の前に現われた男は紅蓮大将だった。

朱雀は今日斯衛軍専用訓練場へと足を運んでいた。

その理由は可憐と同じで、偶には他の人間との訓練をしようと考えていたからだ。

「お久しぶりです紅蓮大将」

瞬時に敬礼を返す。

「うむ。お前の活躍は聞いているぞ、神凧にお前を推薦して良かったわッ！ わっはっは！」

豪快な笑い声を上げ朱雀の肩を叩く。

だが肩を叩くその力は人外の力で、身体能力の高い朱雀と言えど顔を歪めさせる威力だった。

「ははは……」

朱雀は苦笑するしかなかった。

その内に朱雀と紅蓮の周りには人が集まりだしていた。

それもその筈である。

紅蓮は勿論の事、朱雀に到っては唯依と同じように斯衛に所属しながら独立部隊であるナイトメア開発局の十二の剣へ属している人間であり、ナイト・オブ・ラウンス服装も十二の剣専用の服装で目立っていたからだ。

「枢木、お主今日は訓練に来たのであろう？」

「はい」

「ならば一戦しようではないか」

それには朱雀自身は勿論、周囲に居た斯衛の人間も驚いていた。

「宜しいのです？」

朱雀は急な紅蓮からの誘いに戸惑っていた。

しかしそれも仕方が無い。

紅蓮は今や日本は勿論の事、世界でも認められている生きた伝説の一人であるのだから。

「無論だ。久しぶりに本気で戦えると言うものよッ！」

紅蓮から発する闘気に周囲の斯衛達は息を呑み、朱雀は真剣な顔つきに変わった。

その朱雀の顔を見て斯衛服を着た人を含め、周囲の女性が頬を染めていた事に朱雀も紅蓮も気が付いていなかった。

シミュレータに乗った朱雀は紅蓮の乗る月下と向かい合っていた。

その佇まいはナイトメアに乗っていても決して損なわれておらず、伝説の侍は今も健在だった。

緊張のせいか、朱雀は知らず知らずのうちに唾を呑み込んでいた。

『ゆくぞ枢木!』

一声その名を呼び、一気に月下が戦場を奔った。

手に持っているのは長刀型のMVS。

白兜ランスロットに乗る朱雀は剣型のMVSを手に持ち迎え撃つ。

『どれ程強くなったのか見させて貰うぞッ!』

襲い掛かってくる月下に対し、朱雀はとっさに剣を構え受け止めた。

だが受け止めた場所が悪く、そのまま押し切られてしまった。

耳障りな金属音が辺りに響き渡る。

紅蓮の操る月下は白兜ランスロットの剣を力で押し切り軌道を変え、白兜ランスロットの腕を切りつけていた。

『くッ!?!』

斬られた白兜ランスロットの左腕が垂れ下がる。

そこに二の太刀を振るう月下。

しかし今度は白兜ランスロットは右腕のMVSで何とか防ぎきった。

『やるではないか枢木ッ!』

朱雀は接近戦では分が悪いと感じ、懸命に白兜ランスロットを後退させ、武装をヴァリスへと変更させた。

中距離からヴァリスを撃つ。

だが簡単には捕らえられない。

月下はジグザグの軌道を描きながら、白兜ランスロットに再び突っ込む。

『まだッ！』

朱雀はヴァリスを棄て、再びMVSを構える。

長刀と剣がぶつかり合い火花を散らし、白兜ランスロットは月下の長刀を受け止める。

『うおおおおおおッ！』

朱雀は叫びながら長刀を押し返していく。

『むうッ！』

紅蓮も負けじと力を込めていく。

朱雀は大きく白兜ランスロットの足にあるランドスピナーを横に回し、受け止めていた月下の長刀をそらした。

一瞬、前に突っ込みながらも、すぐさま体勢を立て直す月下。

白兜ランスロットも同じように向き直る。

『やっぱり強い……』

朱雀は低く呟く。

『ふははははッ！ やはり実戦は千の訓練にも勝っていたようだな
枢木ッ！』

心底嬉しそうな口調で紅蓮は朱雀へと襲い掛かる。

斬りかかる月下。

再び受け流す白兜ランスロット。

対峙する両機。

横殴りに振るわれた月下の長刀。

それを今度は完璧な角度で受け止める白兜ランスロット。

『重いッ！』

数秒その状態のまま膠着していたが白兜ランスロットは月下を弾き飛ばす。

障害物を蹴って再び突進してきた月下を白兜ランスロットはその身を大きく跳
ばし、軽やかに受け流した。

直ぐにまた迫り来る月下の長刀。

それに白兜ランスロケットが自らのMVSを合わせて鏢迫り合いになる。

『このままッ！』

『甘いぞ枢木ッ！』

白兜ランスロケットと片手で鏢迫り合いをしながら、腰からもう一本の長刀タイプのMVSを取り出した。

月下ランスロケットは白兜ランスロケット弾き飛ばし、白兜ランスロケットはMVSを構えなおした。

両機が激突した瞬間、甲高い音が響き渡った。

懐に飛び込んだ月下ランスロケットは白兜ランスロケットを上下に真っ二つにしていた。

『白兜大破、これにて戦闘訓練を終了いたします』

CPから通信が入りシミュレータは動きを止めた。

「枢木よ素晴らしかったぞ」

シミュレータから降りてきて直ぐに紅蓮に声を掛けられた朱雀。

「有り難う御座います」

「久々に血が騒いだ」

「しかしまだまだ紅蓮大将には敵いません」

「わしとてまだまだやられはせんわ。だが、短期間でこれ程の実力を身に付けるとは」

「ナイト・オブ・ラウンズ十二の剣ではこれくらいが普通だったので」

朱雀は可憐と唯依の二人を思い浮かべた。

「ほお、あの二人もまたエース級か」

「はい」

「そうか。もっと強くなれ枢木よ、御主の守りたい者の為に」

「はいッ！ 今日是有り難う御座いましたッ！」

「うむ。それではいずれまた」

紅蓮は斯衛と共に去って行った。

「うん此処がこうだから……」

ラクシャータはその日、何時も通りにナイトメア開発局で研究をしていた。

「でもね〜」

机の上にあるパソコンの画面を見ながら悩んでいた。

「ラクシャータ未だに悩んでいるのかい？」

「ああ、ロイドかあ〜翔君だったらよかったのに」

何時の間にか背後に居たロイドに気にする訳でもなく返事を返えした。

「それで〜？ 何を悩んでいるんだい？」

まるで気にする様子もなくロイドはラクシャータに問い掛けた。

「輻射波動を応用させた武器を考えていたんだけど、どうも上手くいかなくてね〜」

溜息を吐いて煙管を咥え身体を伸ばす。

「それは僕には無理だね〜」

「そんなの分かってるわよ」

ラクシャータはロイドの返事を斬って捨てる。

「それはそれで酷くないかい？」

「輻射波動機構は、私と翔君以上に詳しい人なんて居ないんだからしょうがないじゃない」

「まあ〜ね〜」

ロイドも自分では無理だと理解していた。

「そう言うつあんたはどつなの？」

「サザランドグロースター舞鶴や紫炎の武器を丁度完成させたところだよ〜」

「へえ〜どんなの造ったのよ〜またあんたの趣味が入った物じゃないでしょつね〜？」

「今回は違つよ〜日本人は使っていなかったランスを改造したんだよね〜」

「ああ〜あのランスね〜確かに日本人は刀が主流だからね〜」

ラクシャータの頭の中に円錐状のランスが思い浮かぶ。

「だから欧州連合向けに改造したわけ」

「使えるの？」

「ふふふん。これを見てもそんな事が言えるかな」

ロイドはラクシャータに手に持っていたデータを見せ付けた。

データに載っていたランスは、円錐のランスから十字型のランスになっており、突き刺すだけでなく切り裂く事も可能なランスへと変貌を遂げていた。だが決してそれだけではなく、銃撃を発射する機構まで付いていた。

「ふふん。確かにこれなら使いやすいかも知れないわね」

「あは、これなら翔君も納得の一品さ」

そこに急に扉が勢い良く開かれた。

「ロイドさんッ！」

「あらセシル？」

「セ、セシル君？」

ロイドは頬に冷や汗を垂らしながら、一步後ろに退いていた。

「また書類仕事さぼって！ 机一杯に書類が溜まっているんですよッ！」

「でもほら、僕もランスの改造に忙しかったからさ」

「私も忙しいですッ！ 主にロイドさんの書類の手伝いでッ！」

ロイドの襟首を引っ張って部屋から出て行く二人。

「あんだ達相変わらずね」

ラクシャータだけは呑気にその光景を眺めていた。

35・篠崎 咲世子の仕事

1998年12月31日

Side 咲世子

朝食を作り終えた私は今日も翔様呼びに部屋へと向かっている所です。

「失礼します。おはよう御座います翔様、唯依様」

部屋へと入り挨拶を交わして、こうして今日も私の一日が始まります。

『おはよう御座います咲世子さん』

「おはよう御座います咲世子さん」

翔様が可愛らしく頭を下げ笑顔で挨拶を返してくれます。

唯依様も翔様の傍で翔様の世話をしています。

「翔様、唯依様、朝食の準備が出来ました」

『毎日有り難う御座います咲世子さん』

「いえ、これが私の幸せですので」

そう、翔様の為に色々な事が出来るのが私の幸せなのだから。

色々な技能を取得しておいて本当によかったと思います。

「それじゃ行こうか翔君、咲世子さん」

『はい』

「はい」

私達三人は朝食を用意してある部屋へと向かいました。

食事を終えた翔様と唯依様はそれぞれ仕事場へと向かったので、私も翔様から頼まれた仕事をしなくては。

私は翔様から渡された書類を見て何から手をつけるか考えていた。

各国や企業から来るナイトメアや武器の提供や、技術提供の交渉等をしなければならぬし、翔様の命や技術を盗む為に各国から送り込まれて来る工作員の対応もしなくてはならない。

取り敢えずは一つずつやらなくてははいけませんね。

S i d e O u t

咲世子が部屋で仕事をしていると、部屋の電話が鳴り出した。

「はい」

『咲世子様、EUのユーロファイタス社の方から衛星通信が入っております』

電話の相手は部下からで、通信が入ったというユーロファイタス社には丁度連絡を入れようと思っていた相手でもあった。

「分かりました。此方へ回してください」

咲世子が部下へ命じ電話を切った。

内心今度は何かと思いながら、映像通信のボタンを押すとそこには眼鏡をかけた体格の良い男が映った。

『お久しぶりですなMs・咲世子』

咲世子は翔に向ける様な笑顔とは違う仕事用の笑顔で相手と向き

合った。

「はい、お久しぶりですね。本日はどのような様なお用件で？」

「いえ、実は最近イギリスの近衛騎士が新型武器や日本帝国が世界に誇るアヴァロンを手に入れたとの報告が上がってきています…」

困った風に苦笑していたが、その目にはとても力強い光が灯っていた。

咲世子は笑顔を変えずに内心成程と納得していた。

相手はEUの盟主であるイギリスに新型武器やアヴァロンを提供したのなら、EUの企業である我々にも技術協力もしくは大東亜連合のように融通を効かせてくれるのではないかと考えた訳だ。

しかし咲世子は情報が漏れるのが早いとも考えていた。

翔とルルーシュとの会談に同席した咲世子としては、ルルーシュがそう簡単に情報を漏らす人間とは到底考えられなかったからだ。

だから咲世子はこれはわざとでは？ と、色々と考えを張り巡らせていた。

だとしたら利益は何か？

今のこの状況が利益になりえるのか？

翔の人物ノートにSランクで載っている人物が考える事は何だと

頭を働かせる。

(もしかして……イギリスが新型兵器やアヴァロンを持つことをEU企業が知る事により、イギリスに提供された武器の導入をEU各国に早期に実現させる為？ 皇族がまた態々出向く訳にもいかないでしょうし……既に提供されている武器ですから条件次第では早期にEUへ導入できると考えたのでしょうか？)

翔は相手国に試作品として提供した武器は、その後時間を置いてからライセンス契約をしていた。

それにルルーシュに提供された新型武器は勿論まだEUの何処ともライセンス契約を行っていない。

即ち欲しければ日本から直接買わなければならない。

それに時間を置く理由は色々であった。

交渉を上手く進める為や、相手の方から交渉に持って来させる為等。

まあこれは翔自身の考えではなかったが。

だから咲世子はルルーシュがEU各国へと新型武器を広める為にはと考えていた。

「随分と情報がお早いようですね」

『いえいえ、私達のような企業人は情報の速さで業績が変わりますか』

『はい』

「成程……ですが今回の事はユーロファイタス社には特に関係ないのでは？」

『そうでもないのですよ。何れは近衛騎士ロイヤルガードの使っている武器はEU全体に広まります。その時に先駆けたいのは何処も同じではないでしょうか？』

「直ぐにでも生産に漕ぎ付け研究や開発をし、EU各国へと広めたいと？」

『有り体に言えば……もし許可が頂けるのなら社長からはEFファイ-2000の技術を一部提供もしていいと』

「それは驚きですね」

『EFファイ-2000の事はやはり知っていましたか』

「またもや苦笑していた。」

「それもその筈である。」

EFファイ-2000は未だ試作先行型が出来、漸く量産体制に入っている所なのだから。」

「その為未だその完成された存在を知っているのはEUの軍上層部くらいなのだ。」

「此方も情報が命ですので」

咲世子は笑顔で相手に返した。

「ですが其方は最新技術を渡して大丈夫なのですか？ ユーロファ
イタス社だけで造り上げたならともかく、 たしかEF-2000タイフーン
は数力国共同で造り上げた機体ではありませんでしたか？」

『問題ありません。色々と根回しているので……それに全てを渡す
わけでもありませんから』

「わかりました。翔様からは交渉は任されているので、この条件な
ら大丈夫でしょう」

『有り難う御座います。所でパラヴィア社とも色々取引している
みたいですが……』

「パラヴィア社とも取引はしていますが、今回の様な新型武器を取
引している訳ではありませんよ」

その後他の話を少ししてから咲世子は通信を切った。

それと同時に部屋にノックが響き渡った。

「どござ」

「お疲れ様です」

咲世子の部下がお茶を持って入って来た。

「有り難う御座います」

部下からお茶を受け取りゆつくりと口に含む。

「相手も必至のようですね」

「ええ、翔様の技術を手に入れば現状よりは必ず良くなるでしょうから」

「世界各国の企業から来る贈り物とかがそれを語っていますね。御蔭でお茶請けに困りません」

「そうですね。翔様もお見合い写真で困っていらっしやいますから困った物ですと咲世子は頭を振った。

「今年ももう終わりね」

唯依は自宅の縁側で星空を眺めながらふと呟いた。

『そうですね。今年は色々な事があってあつと言つ間の出来事のように感じますね』

翔も唯依の隣で外を眺めている。

「そうですね、でも来年はもっと大変になるわ。国連が横浜に出来たハ
イヴ攻略を承認したしね」

『はい。でも結局は大東亜連合だけではなく、アメリカ軍も参戦する事になってしまいましたが……』

これが日本にとっての大きな誤算だった。

「そうですね……でも横浜は私達の手で取り戻して見せるわ」

唯依は隣に座っている翔の手を握り、空を真っ直ぐ見詰めた。

『はい。その為に今舞鶴と紫炎を改修している所ですから』
サザンランドグロースター

「イギリスと統一中華に送った改修型を元にした、舞鶴Type 0Jと紫炎Type 00Jだったわよね？」

『そうです。統一中華戦線に送った舞鶴Type 00Cとイギリスに送った舞鶴Type 00Eのデータを基にしています』

「これでハイヴ攻略戦に少しでも戦力を上げる事が出来るわね」

『少しでも成功率が上がってくれば……』

「大丈夫よ翔君。私達もその為に努力しているんだから」

『そうですね。僕も出来る事をやります』

二人は互いに微笑み再び星空を見上げた。

35・篠崎 咲世子の仕事（後書き）

次回はやっと明星作戦か作戦前辺りを書けるかと思えます。

36・明星作戦1

1999年8月5日

アジア方面では史上最大である明星作戦がとうとう開始された。

BETA大戦に於いてはパレオロゴス作戦に次ぐ大規模反攻作戦で、この作戦は横浜ハイヴ攻略が優先戦略目的とされたものだ。

そして翔達ナイト・オブ・ラウンス十二の剣も勿論この作戦に参加していたが、上の命令で後方配置での遊撃をする事となっていた。

これには色々な思惑が隠されていた。

現場の軍人の中には高天原アウアロンのハドロン砲や十二の剣ナイト・オブ・ラウンスを前線に出して一気にBETAを叩きたい者や、後方に置いて崩れそうな舞台へ救援をさせたい軍人等によって様々な話し合いが行われた。

しかし最終的には政府や殿下が、出来るだけ翔には安全な場所に居て貰いたいが為に今回の様な作戦配置へとなったのだ。

翔達は後方の高天原アウアロンの中で戦場を見ていた。

翔とラクシャータは戦域を見ながら情報を分析し、何が起ころって
も良い様に忙しく動いていた。

反対に唯依、可憐、朱雀はブリッジで身体を休めながら何時でも
動けるように準備をしていた。

「今の所はまあ順調って所かしら？」

『はい。今の所は……』

ラクシャータに返事を返す翔の顔には明るさがなかった。

二人が言ったように今の所は……なのだ。

今は順調でも何時これが覆されるか分からないのがBETAとの戦いだ。

BETAは地表に居るだけでなく未だ後方のハイヴの中にも無数に居るであろうし、地中から奇襲を仕掛けてくる場合もあるのだ。

それでも翔達は今は後方でこうしている他はなかった。

同日10時20分

A-01連隊ヴァルキリーズ中隊を率いる伊隅大尉。

硬い表情を変える事無く舞鶴サザランの速度を上げた。

自身が着込んでいる強化装備から網膜に投影される外の情景は刻々と変化している。

灰色の空にBETAに蹂躪された緑の無い平坦な大地。

その大地に転がる無数のBETAの死骸。

ここ以外でも同じ光景が見られる事だろう。

『ヴァルキリー1より各機へ』

強化装備を着た伊隅大尉が網膜に投影される。

『間もなく敵と接触する。各機陣形を維持せよ』

『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『』

全機一斉に返答を返す。

(何時も通り香月副司令の無茶な任務か……)

伊隅は重い息を吐いた。

るGの制御が戦術機よりも上と言うのも理由の一つだった。

サザーランド
舞鶴が一齐に着地し、土煙が舞い上がる。

距離1000メートル前後に赤外線モニター越しのBETA群の姿。

地平線まで溢れるおびただしい数だ。

(何度見ても嫌な光景だ)

『各機、射撃開始！ 目標、前方BETA群！』

伊隅の命令と同時に、全機が射撃を開始する。

サザーランド
舞鶴の射撃を受けた要撃級は、醜い内臓物を撒き散らしながら粉砕されていく。

弾け飛ぶ肉片と赤黒い体液。

伊隅達ヴァルキリーズの目の前にはBETAの死骸が積み上がっていく。

『出来るだけ連中を引き付けるぞ！ 各機、後退しながら射撃を継続しろ！』

各機は次々と跳躍ユニットで一瞬にして数百メートル程後退した。

着地と同時に再び射撃を開始。

この後退しながらの射撃はよく使われる基本的な対BETA戦術の一つだ。

『横浜から消えうせる　！』

伊隅は次々と姿を現す要撃級と戦車級に向け、36mm砲弾を断続的に放つ。

突撃砲は36mmと120mmの二つの砲口を持ち、当然ながら前者の方が弾数があり、速射を聞かせられる。

正面のBETA群の進撃は絶え間ない砲撃で遅延しているものの、両翼からは戦車級の赤い津波が、流れるような動きでヴァルキリーズを包囲するように迫っている。

戦車級とは言え決して油断は出来ない。戦車級の顎の力は、戦術機やナイトメアの装甲を食い破る程で、多くの衛士がその餌食となっているからだ。

（ちっ！　包囲速度が速いッ！）

伊隅が焦りを顔に出したその時

『　こちらヴァンガード1、これより其方を支援します！』

伊隅のヘッドセットに女性の澄んだ声が聞こえてくる。

視界の隅に別のウィンドウが開き、後方に四機のF15-Cイーグルが映り込む。

『ヴァンガード各機、射撃開始！ 戦車級を叩きなさい！』

ヴァンガード試験小隊隊長であるモニカ・クルシェフスキー大尉の命令を受け、ヴァンガード各機が射撃を開始する。

新たに戦力が加わり、状況は好転しつつある。

側面から包囲しつつあった戦車級が次々に撃破されていく。

(よしッ！ このまま行けば光線級からかなりの数のBETAを引き離せる！)

『支援感謝する！ 私はヴァルキリー中隊を率いる伊隅みちる大尉だ』

『私はヴァンガード試験小隊隊長モニカ・クルシェフスキー大尉です』

『このまま行けば』

だがそこに部下からの音声が入る。

『伊隅大尉！ 後方から新たな反応多数！ 要撃級の集団が接近中！』

『なッ！？』

『数は300以上！ 距離は1500……120秒後に接触ッ！』

『ヴァルキリーズ各機！ 前衛は要撃級に対して命令あり次第、攻

撃開始！ 後衛は前衛付近まで後退、前衛を援護しろ』

『ヴァンガード各機！ ヴァルキリーズの援護に当たります！ 兵装は自由！』

伊隅とモニカは素早く決断を下した。

このような突発的な事態にも決して同様を見せてはいない。

全員操縦桿を握り締めた。

皆心拍数が上がりだしていた。

だがそれも仕方が無い。

ここで食い止めなければ作戦が失敗する可能性が出てくる。

砲撃戦で食い止められるかは、やってみなければ分からないが、だが今はやるしかない。

直後、要撃級の集団が地鳴りの様な足音を響かせつつ姿を現す。

先頭集団との距離は500メートルを切った。

奇怪な姿の要撃級がこちらに突進してくる光景は、おぞましさを感ぜられる。

要撃級との接近戦は可能な限り避けたかった。

巨大な両腕の一撃を喰らえば、戦術機やナイトメアでさえも撃破

されてしまつ。

『奴等の脚を止めるぞ！ 120mm構え！ 撃てえッ！』

突撃砲を保持する機体から甲高い炸裂音が響くと同時に、閃光が要撃級に吸い込まれていく。

120mmの弾の嵐が、要撃級の先頭集団を包み込む。

着弾と同時に多数の要撃級が脚を打ち抜かれ脚を止める。

殆どの固体は絶命に至っていない。

だが行動不能に陥つたのは明らかだった。

そのせいで後続するBETA群は損傷したBETAを避け、進路を強引に変更する。

BETA全体の行き脚が大きく鈍り出す。

二人の隊長が考えていた事は同じだったようで、上手い具合にBETAは二人の思惑通りの進路を取っていく。

『各機、36mmで射撃開始！ 連中が体勢を立て直す前に殲滅しろ！』

『うおおおおおッ！』

ヴァルキリーズの面々は雄たけびを上げながら36mmによる射撃を開始した。

『ジノ、アーニヤ、キューエル、私達も行くわよ!』

『『『了解!』』』

ヴァンガード各機も射撃を開始した。

炸裂音と共に無数の36mm徹甲弾が砲口から放たれていき、要撃級の破片と共に土砂が舞い上がり、要撃級の姿を覆い隠した。

『さつさとくたばれええええツツ!』

粉塵に砲撃を叩き込みながらキューエルが雄叫びを上げている。

そのキューエルに叫びが達したのはその時だった。

『キューエル! 未だ生きているぞ!』

『なツ! 何だとツ!』

次の瞬間にはもう要撃級はキューエルの側面を急襲していた。

射撃に意識を向けすぎていたキューエルはまともに反応出来ない。

キューエルの技術はモニカ、ジノ、アーニヤに比べて未熟な為、ここから反応する事は不可能だった。

『よけるおおッ!』

ジノの自制を忘れた絶叫が響き渡った瞬間、要撃級に腕によりF

15 - Cイーグルが無数の破片を撒き散らしながら突き飛ばされた。

『キューエルーーーーーーッ!』

『くッ!』

『…………ッ!』

無残な姿となったキューエルの機体がモニカ達の視界に映る。

全身の装甲が打ち砕かれ、胸部などは装甲とフレームの殆どが歪に変形している。

幾ら経験してもなれる事の無い仲間の死。

だがこの地獄はまだ始まったばかりだった。

37・明星作戦2

オルタネイティヴ4研究室

「さて……今回の任務でA-01は何人生きて帰ってくる事ができるかしらね」

自身の研究室で椅子に身体を預けながら静かに呟いた。

「おやおや、その言い方ですと殆ど戻ってこないように聞こえますよ博士？」

部屋の中に足音も無く入って来たのはトレンチコートを身に纏ったいかにも怪しい男だった。

本来なら簡単にこの部屋へと侵入する事は出来ないうえに、この研究室への侵入者は普通射殺されても仕方が無いのだが、夕呼は一瞥をくれるだけだった。

「鎧衣、あんたねーセキュリティー無視して入ってくんの止めなさいよね。いい加減とっ捕まえるわよ？」

だが鎧衣と呼ばれた男はその言葉を気にせず、片手で帽子を押さえながら自然体で立っている。

「おぉー怖いですなあ、折角の美貌が台無しですぞ？ このアマゾンの奥地の遺跡で手に入れた光る土偶でも見て心を休めてください」

「何でアマゾンの奥地に土偶があるのよ……はああんたと喋ってる

と疲れてくるわ……」

「しかし今頃A - 01は香月博士の命令に忠実に守っているの
ような」

すぐさま話の方向を変える鎧衣にいつもの事と諦める夕呼。

「当たり前でしょう？ 私直属の部隊なのだから」

「それなのに毎回普通の部隊なら全滅するような任務ばかり押し付
けている」

「ふん。この程度まだ第一地獄程度よ。これを生き残れないような
らいらぬわ」

「いやはや、本当に怖いですなあ〜それも博士の研究の為ですか
？」

夕呼の目が細まり鎧衣を睨み付ける。

「うるさいわね！ それよりそっちの方はどうなのよ？」

「おおー忘れるところでした。博士が気になっっている神風大尉の方
は、今の所全く手が出せませんでした。このままでは上司に怒られ
てしまいますな」

「珍しいじゃない、あんたが情報を持って来れないなんて」

「元々あそこはセキュリティが高く秘密主義な部署なのですよ。現
在日本帝国陸軍技術廠の一部であるナイトメア開発局ですが、知っ

ての通り今や日本のみならず世界にもその影響力が広がっています。その為技術廠トップである巖谷中佐や殿下くらいいしか自由に動かす事が出来ない部署となっています。殿下は勿論の事、巖谷中佐も芯が強い人物ですので、中佐以上の階級や陸軍高官と言う事で彼に命令しても、技術廠のトップとしての判断で彼は拒否するのです。彼は自身の立場が悪くなるうとも己を貫き通す人物でして、帝国陸軍のお偉いさん方はその事に色々と不満を持っているようなのですよ。その御蔭で色々と此方の都合の良い様に誘導しやすいのですが……問題はあそこには怖い侍従が居ることです……もし彼に不利になる様な事をしたら間違いないで殺されてしまいますな。いや既に何人かは……」

「へえ、殺しても死ななそうなあんだが？」

「全ての面において私より上ですから。私が今こうしている事もあちらには分かっている事でしょう。まあ、あの方は自らの主に不利にならない限りは手を出してはこないでしょう」

「篠崎 咲世子だったかしら？」

「おや？ 博士もご存知でしたか？」

「名前だけはね……篠崎と言えば代々將軍家や五摂家を陰ながら守護する有名な家みたいだしね」

「その通りです。ですが今の当主は色々と変わって……五摂家の者から他の武家の者達までの要請を断り、神風大尉の護衛兼侍従をしているのですよ」

「へえ、よくそんな事が篠崎本家や武家連中に許されたわね。幾ら

ナイトメア開発の功績があろうとも、武家と言う家柄を後生大事にしている連中や、今迄武家の護衛につく事を誇りにしていた本家の連中が一般人につく事を」

「確かに不満を持つ連中はいますが、殿下の後押しもあつたと聞きますし、護衛の件はやはり新技術を生み出し続けている神風大尉だからこそ許されたとも言えるでしょう。それに彼女は歴代当主の中で最も優秀な者です。篠崎家始まって以来の天才やら麒麟児と言われていましたから。皆彼女を敵に回したくないのでしょうか。その気になれば彼女は暗殺さえも行つ冷徹さをも持っています。」

「そんな人物が神風につく……か」

「おかげで情報を手に入れにくくて困っています」

鎧衣は苦笑していた。

「それなら仕方が無いか……頼んでいたもう一つの方は？」

「どうやら『かの大国』はナイトメアや高天原アウァロンに対抗する為の”例の物”を今回の作戦で使い、威信を回復させるつもりの様でして……」

「何ですってッ!？」

机を叩き椅子から勢い良く立ち上がる。

その顔にはは驚きと怒りを合わせた表情が現われており、普段の彼女を見ている者達が居たなら驚き慌てた事だろう。

「まあまあ落ち着いて、ほら土偶を見て心を休めましょう」

だが鎧衣はそんな事気にも留めずに土偶を勧める。

「あなたは……はあーしかしそうなるとA・01への指令を変える
しかないかしらね」

「仕方が無いでしょうな」

「問題は”それ”が使われた後の対応って所かしら」

「そうですね……どれだけ早く動けるかで全てが変わりますな」

顎に手を当て確りと頷く。

「分かったわ。また何かあったら伝えに来なさい。今度は正面から
手続きして」

「はっはっは、頭の片隅に置いて置いたら置いておきましょう」

鎧衣は来たときと同じように足音を立てずに部屋から出て行った。

夕呼は鎧衣が出て行くのを確認し、パソコンに付いている通信ボ
タンを押した。

「ピアティフ、直ぐにA・01へ連絡を取って頂戴」

夕呼はいかに自分の利益を確保できるかを考え、直ぐに動き出し
た。

1999年8月6日

横浜ハイヴ攻略戦は既に二日目へと突入していた。
だが未だにハイヴ攻略への道が見えてこない。

戦場では今も爆発や悲鳴が響き渡る。

そして今、真紅色のサザンランドに乗り、大隊を指揮するフランス陸軍第27戦術機甲大隊”通称クイーン大隊”が、BETA群と戦っていた。

本来ならフランス陸軍第27戦術機甲大隊はこの作戦に参加する予定はなかったが、フランス政府の判断で派遣されてきていた。

フランスとしては此処で日本に借りを作っておきたかったのが本音であるが……

『エーデルワイス大佐！ E-1地点から救難要請が出ています！』

隊長機の少し後ろでサポートしながら戦っている副隊長が隊長へ指示を仰ぐ。

『中隊を一つ送れ』

淡々と簡素に指示を出した。

『よろしいので？』

『構わない、それとも何か？ 私がこの程度の事でやられるとでも？』

網膜に映し出された隊長の顔は獰猛な笑いを浮かべていた。

『いえ、『女帝』に無駄な心配でした』

副隊長はすぐに中隊に指示を出し救援に向かわせた。

その間にも真紅の隊長機は要撃級を切り飛ばし、戦車級を打ち抜いていく。

『ふふふ、BETA達よ私に魅入られたら終わりだぞ……？』

機体と同じ真紅の髪の色にバランスの取れた顔立ち。そこに見惚れてしまいそうな残忍な笑顔を浮かべ、BETA群を刈り取る。

仲間達は隊長のその顔と戦闘を見て、更に士気を上げる。

『私達も隊長に続くぞッ！』

『『『『『『『『了解ッ！』』』』』』』』

その戦う姿はまさに一陣の風。

次々とBETAを撃ち殺し、戦線を押し上げていく。

だがそれでも倒しても倒しても押し寄せてくる圧倒的なBETAの波。

幾らエーデルワイス率いる大隊でもこれ以上戦線を押し上げる事は不可能だった。

しばらくして救援に送っていた中隊が戻って来た。

中隊の後ろには青色の国連色のサザerlandが着いて来ていた。

『大佐！ 只今戻りました！』

『ご苦労、それでその後ろの部隊は？』

『はッそれが……』

そこに突然HQから指令が入る。

『こちらH.Q.よりクイーン大隊へ。これよりクイーン大隊はそこに
いるヴァルキリー中隊の援護にまわれ』

『何だとツ！？』

『これは命令だ。ヴァルキリー中隊には極秘で指令が与えられてい
る。その為の援護に当たれ、以上健闘を祈る』

一方的に命令だけを言い通信は切れた。

そこに後ろに居たサザーランドから通信が入る。

『先程は救援有り難う御座います。私はこのヴァルキリー中隊を預
かります伊隅 みちる大尉です』

『そうか、先程私の部隊が助けてきたのがヴァルキリー中隊だった
か……私はこのクイーン大隊を率いているエーデルワイス大佐だ。
先程ヴァルキリー中隊の援護に入れと指令が下った』

『はい。私達は特別任務中としてその為の手伝いをして頂ければ』

『……何をすればいい？』

『今はこのまま現状維持を……先程私達の元に新たな指令が下りま
して、今はこれ以上先に進むのは拙い状況になるかもしれないので』

『拙い状況？』

『今はこれ以上は言うことが出来ません』

『……………』

伊隅のこの物言いからエーデルワイスは、このヴァルキリー中隊が普通の部隊や上の階級程度では知りえない事を主とする特務部隊なのだと確信した。

そうなると先程のこれ以上先に進むのは拙いと言うのは、BETAの事では無いと言うのが今迄の経験上分かってくる。

なら今は目の前のBETAを殺すだけとエーデルワイスは意識を切り替える。

『了解だ。では今はこの周辺のBETA群を処理する。そしてヴァルキリー中隊がその指令を遂行出切るタイミングまで我々の指揮下に入ると言うことでいいか？』

『はい。それで構いません』

『ではヴァルキリー中隊は後方を頼む』

『了解！』

オルタネイティヴ4研究室

「これは酷いわね」

明星作戦の現場からリアルタイムで送られてくるデータを見ながら溜息を吐いた。

送られてきているデータにはA-01の状況が記されていた。

そのA-01は既にヴァルキリーズともう一中隊以外は大半がやられており、ヴァルキリーズだけは何とか『女帝』を護衛につけ、任務を続ける事が出来ているようだ。

「このままだと厳しいか……だけどここで横浜ハイヴを叩いておかないと”あれ”が手に入らないし……心情的には気に食わないけど

やはりアメリカの”切り札”が必要かしらね「

夕呼は現実だけを見据え、先を予想しだした。

同日21時20分

横浜ハイヴから侵攻してくるBETAに対し、帝国軍・国連軍の

部隊と艦隊が防衛線を展開している。

しかし、国連軍の防衛線が一部突破され、光線級を含むBETA約1200体が侵攻して来ていた。

帝国軍と国連軍が慌てて部隊を派遣して防衛線を展開するが、BETAはどんどん侵攻を続けている。

BETAの予想外の侵攻にこれ以上は拙いと判断した帝国斯衛軍は、連隊規模の出撃準備を始めた。

だが帝国斯衛軍の到着まで時間がかかる為、近くに居た小隊二つが廻されて来た。

偶々近隣の駐屯地にて再編成中だった部隊であり、本来なら別の部隊の応援に廻される筈だった小隊が二つ。

サザーランドで8機で構成された国連部隊が展開。

侵攻してくるBETAを、この場で防衛する事が命じられていた。

『ヴェレッタ中尉ッ！ 帝国斯衛軍はまだなのですかッ!？』

『そんな事を喋っている暇があったら一体でも多くBETAを殺せッ!』

先程再編された際に部隊に配属され、まだまだ実戦経験の浅い少尉に返事を返すのはアメリカ陸軍から派遣された銀髪で褐色肌のヴェレッタ・ヌウ中尉。

だがヴィレッタ自身そうは言ったものの、今にもこの崩れそうな防衛線を見て先程の少尉と同じように一体いつになったら帝国斯衛軍は来るのだと内心焦っていた。

（私はこんな所で死ぬわけには行かないッ！ 何の為に今迄アメリカの言い成りになってまで嫌な仕事をもしてきたと思ってるんだッ！ 私は早くアメリカの市民権を取得して家族と共に暮らしてみせるッ！ そして私の生まれを馬鹿にした連中を見返してやるッ！）

ヴィレッタはサザーランドの中で闘志を剥き出しにし、BETAと向き合う。

市民権を取得する為気合を入れていたが、まさかこんな少数でBETAを、しかも未だ900もの数を保ったままの連中と戦う事になるとは、誰も予想していなかった。

それでも侵攻してくる突撃級を迎え撃つ。

散発的に突撃してくる突撃級を避け、装甲が薄い背後を突撃砲で打ち込み続ける。

だが突撃級以外にも要撃級も押し寄せてくる。

『ちッ！』

迫ってくる要撃級の一撃をかわし、突撃砲を発砲する。

何とか紙一重で戦っていたが、小隊の一機が突撃級に弾き飛ばされた。

『ああああー！ たすッ』

回線から聞こえてくる悲鳴にヴィレッタは表情を歪ませるが、決して立ち止まりはしない。

『まだか増援はッ！』

だが突如通信がヴィレッタの耳に入ってくる。

『ナイト・オブ・ラウンスこちら十二の剣。これよりそちらを支援する。全機射線に注意せよ。繰り返す、全機射線に注意せよ』

突如聞こえてきた事柄にヴィレッタは疑問を覚えるが、突如自身の乗るサザードから警報が鳴り出した。

『これはッ！？』

ヴィレッタが驚きと共に確認すると、宙に浮く戦艦アヴァロン高天原から赤黒い光であるハドロン砲が突撃級と要撃級を綺麗に消し飛ばした。

それでも消し飛ばなかったBETAには、アヴァロン高天原から発射されたミサイルが降り注ぎ吹き飛ばす。

『あれはアヴァロン……しかも日本の』

そのアヴァロンからヴィレッタの頭上を通過していく三機の機体。

『行くぞ可憐、枢木！』

その言葉と同時に三機は生き残っているBETAへ向かっていった。

唯依が駆る蒼月は刀を振るい要撃級を切り殺し、可憐が駆る紅蓮式は輻射波動を撃ちBETAを吹き飛ばす。

朱雀が駆るランスロット白兜は唯依と可憐の少し後方からヴァリスを手に射撃を行い、二人の援護を行っている。

普通は三機での連携はそうは上手くいかないのだが、この三人においてはその言葉は当てはまらなかった。

前衛と後衛の決まりが確りとしているのもあるが、何と云っても機体の性能と、個人の力量が並外れているのが主な要因だ。

『凄い……』

ヴィレッタはまるで信じられないと言う風に呆然と三機による戦いを見ていた。

『可憐ッ！ 光線級を仕留めるぞッ！』

『了解！』

『柩木は援護を頼むッ！』

『了解！』

地表ぎりぎりを跳躍しながら光線級へと近づいて行く。

『弾けるBETAッ！』

『これでッ！』

可憐と唯依から輻射波動が放たれ光線級を弾け飛ばしていく。

光線級の照射も二機は持ち前の機動力を生かしすれすれで避けてしまっ。

その隙に後方に控えていた朱雀がヴァリスで確実に光線級を撃ち殺していった。

『これがたった三機の戦いだと言っのか……』

ヴィレッタは拳に力を入れたただ悔しそうに呟いた。

BETAもかなりの数が減り始めた頃、後方から土煙をあげながら来る集団の機体が見えた。

『こちらは帝国斯衛軍、後は我々に任せよ』

そう言っつと返事を待たずにBETA郡に向けて攻撃を開始した。

砲撃の雨に一部小隊が持っている四機運用のハドロン照射砲を撃ち、BETAを吹き飛ばす。

『斯衛の者達よッ！ 一匹たりとも逃がすなッ！』

圧倒的な銃撃に小型種は撃ち殺され、大型種も刀により切り裂かれている。

『これが帝国斯衛軍の力……』

誰が呟いたかその声はこの喧騒の中でも確りと聞こえていた。

38・明星作戦3（前書き）

遅くなりましたーその上なんか微妙なので近いうちに修正をかける
かと……

戦術機第6ハンガー

「ちっこれはもう駄目だッ！ 使える部品だけ外しておけッ！」

「急げッ！ 25番から46番までの戦術機とナイトメア全機、チエックを急げッ！ あーそれとこれ上の連中に持って行けッ！」

「おいッ！ こっちのフレーム歪んでるぞッ！ すぐに替えを持って来いッ！」

「こっちのフレームチェック完了です！」

「馬鹿野郎ッ！ そこはそうじゃねえ！ ここはいいからあっちの方に行けッ！」

「予備フレーム持って来ましたあー！ー！ー！」

「よしッ！ 直ぐに取り替えるッ！ 邪魔な物は脇にどけとけよッ！」

「邪魔ですー！ 退いて下さいー！」

「衛士の人達は近づかないで下さいッ！ きちんと整備しますからッ！」

あちらこちらで大きな声があがり、^{みな}皆慌しく動き回っている。

それも仕方が無い。

ここは明星作戦の前線を支える整備基地の一つなのだから。

そしてこのハンガーの奥一画に一隻の航空艦高天原アウアロンが鎮座していた。

「翔君君！　これが高天原アウアロンの現在の整備状況ね。まあ見ての通りまだ時間がかかりそうね」

『そうですね。でもここで確りと整備しておかないといけませんから』

「ま〜ね〜整備不良で死ぬなんて、死んでも死にきれないわ〜」

翔はラクシャータから渡された分厚い資料を読み、ラクシャータの言葉に苦笑しながらも確りと頷いた。

『でも十二ナイト・オブ・ラウンスの剣の機体三機はエネルギー、銃弾、推進剤の補給だけですみそうですね』

「そうみたいね〜間接部分はもつと駄目になるかと思っていただけ。まだまだ保ちそうだし、あの三機は丈夫な上に扱う衛士三人の技術力が高いからこの程度で済んだみたいよ」

『他の部隊のナイトメアや戦術機はどうですか？』

ラクシャータは少し顔をしか顰め、ゆっくりと頭を振った。

「他は消耗が激しすぎね〜このまま何も手を打てないとなるとまずいわね……」

『それ程ですか……』

深刻そうな表情になり考え出す翔。

「撃震、五月雨、不知火、舞鶴サザーランドとどれもきつい状況ね〜まあナイト

メアの整備特性があるからこそまだ少しは余裕があるのだけど」

ナイトメアは戦術機とは違って腕や脚をパージする事が可能な為、少しでもパーツを使い回す事が可能だった。

「あの、もしかして神風大尉でしょうか？」

翔とラクシャータが話している所に銀髪で褐色肌の女性が話しかけてきた。

『あなたは？』

翔は内心驚いていた。

何故なら相手は前の世界でも見知っていたヴィレッタ・ヌウだったからだ。

前の世界ではルルーシュが全世界の悪として死に、それから何故か扇が日本の首相になり、ヴィレッタは扇の妻となった。

最初の頃はヴィレッタも良かったのだろうが、徐々に扇の無能さが表に出てきたうえに、黒の騎士団時代に敵であったブリタニアの純潔派の一人、ヴィレッタと内通していた事が誰かからのリークで表に出て、マスコミに散々叩かれ首相の座を追われた。

そこからはヴィレッタはすがり付く扇と別れ、子供と二人で過ごすしていた。

翔はヴィレッタの事は扇に会わなければ幸せになれただろうと、ずっと思っていたのだ。

「はッ！ 私はアメリカ陸軍所属ヴィレッタ・ヌウ中尉でありますッ！ 先の戦闘では部隊の危機を救っていただけありがたいがとう御座いましたッ！」

ヴィレッタは綺麗に頭を下げた。

『あの時の部隊の人でしたか』

「はい。お礼だけでも言いたく、探していた所で」

『こちらも間に合って良かったです』

「まさかあの有名な神凧大尉に助けて頂けるとは思っていませんでした」

『そう言えば自己紹介がまだでした。僕は神凧 翔、階級は知つての通り大尉です。よろしくお願いします』

翔は右手を差し出し、ヴィレッタと握手を交わした。

「それじゃ、私も自己紹介しとこうかな、私は十二ナイト・オブ・ラウンズの剣所属の技術者、ラクシャータ・チャウラー宜しく」

ラクシャータは手をひらひらと振って挨拶をした。

「ヴィレッタ中尉。これからブリーフィングです」

一人の男が駆け足でヴィレッタのものへと来て用件を話す。

「そうか……それではお二人ともまたお会いしましょう」

敬礼をしてヴィレッタともう一人の男は去って行った。

『ヴィレッタ・ヌウ中尉ですか……』

「翔君の人材センサーに引っ掛かった？」

『何ですかそれ？』

「ほら、翔君の下に居る人って、無名から一気に名を上げた人とか何人も居るじゃない？ だから今回もそうかな」と

翔は成程と思いながら首肯した。

『引っ掛かったと言えば引っ掛かりました』

「そう……アメリカ陸軍所属だけど、彼女多分避難民だから引っ張ろうと思えば何とかできるんじゃない？」

『咲世子さんに頼めば出来そうですね』

「でもアメリカには翔君が欲しがっていると気付かれたら駄目だからね」

『そうですね。咲世子さんに相談してみますね』

「それが良いわ」

S i d e ヴィレッタ

今迄、神風大尉の事は少しは知っていたが、本人を実際に見てみると凄くいい……

何と言つか笑顔がいいッ！

こんな軍人っぽい男達しか居ないなか、彼は性格良さそうで、優

しそつなとことか。

更に、ナイトメアや高天原アウアロンを造った頭の良さがあるっていうのが
またイイツ！

そのギャップ差が……

た…たまらないな……！

あ〜〜いい〜〜！

もっと関われるようになりたい、仲良くなりたいたいッ！

歳は少々離れているが……だ、大丈夫だッ！

これでも体の手入れには気を使っているし、神凧大尉も後数年し
たら一人前になるだろうし。

アメリカ軍じゃなければ、もう少し何とかなったかもしれないが

……

はあ………ままならないな………

S i d e O u t

S i d e アメリカ

薄暗い部屋の中心には丸いテーブルが置かれ、その周りにはあらゆる格好をした人物達が座っていた。

「さて現状はどうなっている？」

話を切り出したのは黒髪に白髪が少し入っている初老の人物だったが、その目は鋭く他者を威圧するのには十分な目付きだった。

「少々まずい状況だな。日本帝国軍、大東亞連合軍、国連軍と奮闘はしていますが、攻略は難しいと思われる」

「我が国の兵も他国よりは消耗が少ないとはいえ、このままではまずいですな」

「ふむ。だがこの状況は我が国の力を示すには丁度良いではないか」

「しかしこれ以上の兵力の派兵は難しい。残るは……核で焼き払うか、前々から準備をしておいた“あれ”を使うしかないが？」

「いいのでは？ 元々通常戦力で無理でしたら最初から使う予定でしたし、一度は使っておかないと何か不備があるやも知れませんか」

「だが“あれ”を使い攻略に成功したとしても、真つ先にハイヴに突入出切る軍は帝国軍か国連軍だ。しかも国連軍はあの女狐の私兵だ。根こそぎG元素を持っていかれる可能性がある。そうやってしまつてはオルタネイティヴ4を支持する連中が活気付くぞ？」

「だがこの作戦が失敗すれば、極東は遠からず全て陥落する。それだけは避けねばならない」

「なるべく帝国軍には血を流してもらい、我々が真つ先に突入出切る様な状況にしないで」

「“あれ”の情報は他国にどの程度漏れている？」

「前々から準備をしていたので流石に少しは情報は漏れているですよ」

「CIAからの情報だと、どうやら帝国にだいぶ漏れている様ですが……」

「だとしても、今は何も言えまい。結局、神風が幾ら優秀でも戦術、せいぜい戦略までだ。我らは政略で戦っているのだからな。そう言う意味ではあの女狐の方がやっかいだがな。まあ今は我らが兵站を与えなければ奴等は戦えないのだから、幾らこちらを警戒しようが問題は無い」

「では、各々準備を。全てはアメリカの為に」

「『『『『』全てはアメリカの為に』』』』」

Side Out

1999年8月7日 横浜ハイヴ手前40km

瓦礫と化したかつての住宅地。

綺麗な緑溢れていたこの土地も、度重なるBETAとの戦闘で瓦礫の山と化した。

前方からさほど速く無い速度で突撃級が向かって来る。

その後方にもまだ数百のBETAが見える。

「来るぞ！ 第2ソード中隊は左、第3ソード中隊は右からだ！ 第1ソード中隊、フォーメーション・アローヘッド・ワン楔壱型！ 敵前衛を突破、後ろから叩く！」

『承知ッ！』

藤堂を中心として突進する。

前方に見えている突撃級は50もいない。

更に後ろに居る要撃級や戦車級はまだ距離がある。

今回の作戦の為に改良された舞鶴Type00Jと紫炎Type

サザランド

グロースター

00Jは、第3世代機である不知火並みの噴射跳躍を行い、瞬く間に距離を詰める。

そのまま突撃級をすり抜ける様な高速機動で、左右に砲撃や斬撃を加えつつ、群れの中を突っ切る。

『中佐ッ！』

『よしッ！ そのまま平らげろッ！』

36mmと120mmの集中射撃で砲弾を一斉に叩き込み、瞬く間にBETAを殺していく。

『こちら仙波、突破完了です』

『こちらト部ト部、同じく突破完了です』

『中佐、後続と数分後には接触します』

藤堂は千葉に言われ確認してみると、BETA群の数は500以上の数があり、もう接触まで5分を切っていた。

その中でも一番厄介な光線級を探してみたが、今の所は見つかっていない。

藤堂はそれならこの程度の数問題ないと判断した。

『問題ない。全機行くぞッ！』

『承知』

『了解！』

第1、第2、第3中隊がそれぞれ突撃をかける。

徐々に迫ってくる突撃級に要撃級。

藤堂達は、まず突撃級を仕留める事を優先した。

ランドスピナーで一斉に水平に移動を開始する。

それと同時に突撃砲を構え、脚を目標にロックオンした。

突撃級と接触直前に一斉に砲撃を加え、脚を止めさせた。

その隙に藤堂が先陣を切り、突撃級の横をすり抜け後ろから切り裂き、また群れの中へと向かって行く。

『全機そのまま俺に続けッ！』

藤堂がこじ開けた一本の道。

その空間に機体を走らせ、各機左右に攻撃を打ち込んで行く。

その間にも藤堂は突撃級の背後に回り、120mm砲弾を浴びせ始末して行く。

『ソード1より全機、このままこのBETAを殲滅しポイントJ方面へ抜ける』

『承知』

『了解！』

藤堂率いるソード大隊は、水平噴射跳躍で残りの要撃級へ向けて、側面から襲い掛かって行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0709/>

Muv-Luv ナイトメアを作ろう！

2011年10月31日00時05分発行